

4992

915.6  
K011



文學士久保天隨著

七寸鞋全

內外出版協會



### 七寸鞋

桑弧蓬矢四方を射て、この大地に墮謫せし吾、詎ぞ湖海の行なくして止まむ。顧みれば、年甫めて十七、笈を負ふて五城樓下に向ひし後、すでに八星霜、暇あれば跋山涉水これ事とす。すでに二たび芙蓉の頂に踞し、三たび玄海の波に漂ひ、南は鬼界の天を窺ひ、北は蝦夷の境を窮め、こゝに人生五十の半に及びし今の時、足跡正に海内に遍ねく、名嵩巨浸、探討せざるは希なり。桑蓬の宿志、聊か一半を報ゆるを得て、快や何ぞ窮まらむ。

遊ぶとき、必ず記あり。以て他日の追懷に資す、然れども帳中の秘、容易に人に示さず。興來ればいさゝか刪補を爲し、世に公にす。一卷の七寸鞋は、之を輯めたる者に過ぎず。今夫れ、彫琢の巧を競ひ、點綴の妙を爲

すに至りては、世自ら其人あるべし。この書を読む者は、文筆の拙を責めずして、境地の靈に尋ねよ。區々の範山摸水、豈に以て余が眞本領と爲に足らむや。

人生數奇多し、牀頭黄金盡くるとき、壯士顔色なきを奈何ともし難からむ。唯だ堂々たる七尺の軀、固より紛鬧の小門巷に老ゆるに堪へず。願くは、天の冥籠に頼り、廓寥遼曠、未知の曠土を踏破するの期あるを得む。千秋の意氣、吾は長しへに吾たらむかな

明治庚子の仲夏、城北鵲寓に於て

かぶとの山人天隨しるす

目次

えせ遍路……………一

故國の風色……………三三

残の雪道……………四九

やぶれ笠……………九三

箱根の三日……………一〇八

三河北部の勝地……………一二一

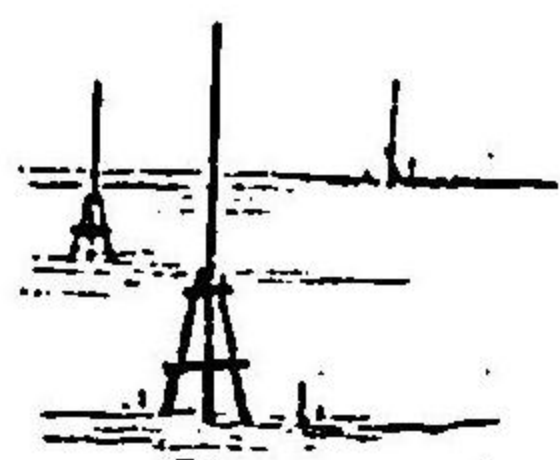
斷魚溪……………一三四

立山登躋録……………一四九

妙義山の秋……………一五九

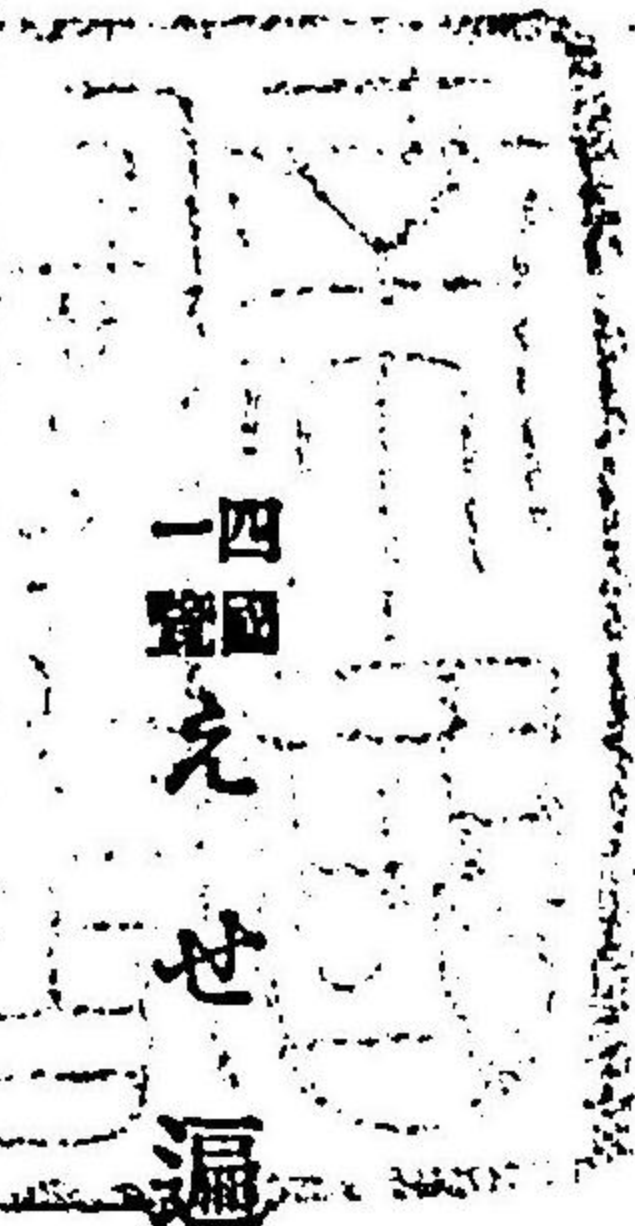
遊船嶽記……………一九七

孤劍飄零集……………二〇六



七寸鞋

久保天隨著



四國えせ 遍路

うづまぐ浪の、名たゝる大鳴門の壯觀に目を飽かせし後、舟を南にうつして、夕日の名残は黒ばみたる山影に迷ふころ、阿波の國、撫養の港の外れなる沙濱につきぬ。こゝは港といへども、實は海峽めきしところにして、四國三郎の名もすぐれて聞ゆる吉野川の、末の分れの流を挾で市をたて、河口には小舟ねびたゞしく響きとめたり。折しも暮潮正に漲り、澄泓鑑をひらきて、さいれ波の岸をゆるする音、涼しく聞ゆ。沙濱のついきはすべて鹽田にして、しほ焼く烟、苫屋よりたちのぼり、ゆるく曳いて蘆葦の間に迷ひ、暮嵐翠を孕んで亂松の中より吹きつ。波枕、舟を家なる水主の子が飯かしぐらむ、蓬窓をもるゝ烟と混

じて、甚だ一氣、林に似たる群橋を置めてめぐれる、夕げしき、あしからずとながめられたり。

舟を棄て、陸に上り、やがて市中を漫步す、われは今朝よりのなやみの、未だ癒えざれば、絶えて食を欲せず。まづ船宿とか呼ぶ番小屋に立ち入りて、狭き板椽に腰打ちかけていこふ。友なる狂生は、晝飯も物さぬことなれば、空腹かぎりなく、殆んど堪へがたしなどいひて、いづこと知らず、出てゆきしが。程なく歸り來り、一壺の洋酒を舉げて、われに示しけるに、これのみはいなみかねて、一口飲み試むれば、其味、ことばも及ばぬやうなるに、一息に傾けつくしつ。海も沸かひずいみじき暑さの半日を、舟の上に曝らし乾されし苦しきも全く打ち消されて、今は初めて蘇りしやうに覺えぬ。

氷水飴湯など賣る小商人の嗟來の聲の、かしましきを、夜半近き頃までも聞きつゝけて、やうやくに舟に乗り、棹歌の聲に寂寥を破りつゝ、纜を解きて、徳島へと向ひぬ。船窓高きところに小さくてむしあつく、蚊の襲ひ來ることたびたしければ、たやすくは眠られず。それさへあるに、乗合の客は十數人と注せられて、さまで丈け低くあらぬわれ等は、

喉を膝頭のあたりまで引き下げて、小さく、丸く、うづくまらねば、忽ちあたりの人に小言を聞かせらるゝ、苦しさ、佗しさ、たどふるに物なし。屋根の上ならば、少しは蚊の來らぬこともやとて、登り見れば、案のごとく蚊はすくなし。されど澄みわたりし夜半の碧落、銀河の水の滴れて落つる、白露のしげきには、薄き單衣、暫時にして濕ひつ。わきて竿を操る梢公には、舟やり悪ければ、是非とも下に這入り玉へといはれて、進退いかにも谷まり、蚊多くして眠られぬよし、有の儘を訴へければ、詮様ありとて、楹木の折屑、したゝか船底よりつかみ出し、火鉢の中にてくすべよといふ。かくて蚊の攻撃は減じられたも、煙にむせびては窒息せむばかり、涙にがくもしぼられたつ。二人かれこれ物いふ間に、熟睡せしものども、みな驚きて目をさまし、口々に罵り合ひ、折角の蚊遣火も忽ち消し止められ、蚊は前にも増して集り來りぬ。

かゝる有様にて、夜ひと夜、碌々にねむりもせず。三日の朝、東の空ほのく白みわたりしころ、名は忘れし一長橋の下に舟を維ぎぬ。陸に上りて見れば、徳島の市中は未だ雨戸を開きつくさず、朝げしたゝめむ家も見あたらねば、儘よ、二三里行く中には必ずあるべ

しどて、草鞋の紐をしめ直し、劍山の方を目がけてすゝむ。いかなる様に、路を取りちがへしにや、怪しげなる裏小路にかゝりて、一里ほど西にゆけば、寺院又は士族屋敷のみ、まばらについで、一時の腹ふくらすべき茶を賣る小家だに見ず。どいのつまりは何處へ行くことかと、まどひながら、なほもすゝめば、翠稻香を吹く千頃の青田をへだて、七八町の先きに、人家のならびたる街道、われ等のたどる小路と並行して見ゆ。さては、あれこそ、本道ならめど、勇みて走り、縦横の溝渠をはね越えなどして、やうやくにゆきつきつ。われは昨日の朝より、飯一粒、喉に下らず、昨夜は一夜ねむらざりし爲か、眼はうるくとして据りあらく、腹は背にへこみ、歩む足さへ踏みしむるに力なし。

東名東と呼べる村にて井を汲み、なほ四五町すゝみした、あやしく、むさくるしき一店あり。突然進入して、あれこれの、むづかしきことはいはず、たゞ腹みたすべきものやあると問へば、別に何といふものなく、朝かれひの残りなる麥飯のみありとこたふ。旅なれや、囊中の金に乏しき貧書生の、ことに今は食撰びする場合にあらねば、二人期せずして聲をわけせ、それ早く出せよと差しせまるに、主は、ゑみて、さるにても純麥の飯、とともく

都人と見ゆる御兩人の、口に入るべきいはれなしといふ。さる心配無用なり、いでや、物の見事に平げて見せむに、早々支度せよと、いひ喚て、前なる小川の清く冷たき水に、顔洗ひなごし、誰やらがひし如く、饑は弱士に美味を與へて、幾代もち傳へけむふちの缺けたる古めかしき大茶碗に、堆かく盛りたる飯を、流星の月を追ふより早く、あのおのく五六度かへて、漸うに腹のしまりも出来て、病も全く忘れたり。あはれ、この味、五鼎を列ねて食ふ貴人には、語りも聞かすべからずとねもはれぬ。

朝げを濟せし後、すぐに立ち出で、何となく失神せしやうなる、ものうき歩行をついけぬ。二里ばかりにして、一宮といふ村あり。四國八十八個所の中の靈場、このあたりでありと聞きしが、さしたる所にもあらざるべしと、自ら定めて、詣です。村中に軒をならぶる宿屋など、今はいたくさびれたるものから、むかし繁昌の像を見るべし。これより先きの路は、山峽の間に縫うて入り、次第に險惡となりしが上に、四分五岐、楊朱ならば泣きもやせむ、ほどく困むはてたり。幸に遍路みちしるべの石、どころく立て、ありければ、やゝ其便を得たりしも、もとより容易の道には非ざりき。

鬼籠野なりけむ、河にのぞめる一軒の茶店にいとひ、草鞋もどめて立ち出でしに、年は十二の童ふたり、一升徳利を肩にし、何やらむ語り合ひつゝ、われ等と前後して行くに遇ひぬ。いづくへゆくものぞと問へば、神領へとこたふ。われ等もかなたへ志すなれば、いで伴れ立たむ、しるべして得させよといふに、童どもは喜びて先に立ち、やがて峻峨の山路にさしかかりしが、その歩調いかにも緩くして、堪へがたければ、いでわれ等こそ先に立たむとて、稜角劍のごとくなる巖石をふみくだきつゝ、どし／＼と勢よく、息つきあはず、のぼりにのぼる。頂近くなりて、路は爪字に分れたり、扱ていづれを取るべきか、彼等わらべに問はむものぞと、顧るに影だに見えず、遙の下に、語り行く聲の聞ゆるのみ。後れたることしるければ、石に腰かけ烟草くゆらしつゝ、自ら吐く烟の末に目をうつして、來し方の遠山近水を指點しつゝ、待ち居たりしこと、半時間ばかり。かの童等はつひに來らず、聲さへ聞えずなりぬ。友なる狂生、彼等の來らぬは、今おもひ當ることあり。さきにわれ先づ行きあひて、一升徳利を肩にせるを見しとき、その酒奪ひて飲んで呉れむなど、され言ひしを、小供心に眞に受け、かくはわざとあぐれて、間道を取り逃げ去りしなら

むといふに、われもおもはず笑ひぬ。

かくて今は童達を頼みにせむとする心も失せて、何處へ出づるもいとほじとて、その中央の一をえらび、やみくもに盲進せしに、道は覺束なきまで細くなりゆきて、薛蘿は荆棘とからみ合ひ、妻木こる山かづさへも通はじと見えしが、一里近く下りしとき、忽ち一條の大道に出で合ひ、いとも嬉しくすゝみゆくに、脚下の水聲、潺湲として琴筑を鳴らすごときを聞きつ。あはたしく馳せ下れば、細流一道、箭を放つに似て奔進し、巨巖磊落、河中に起伏し、傍の崖には、一樹の大榎、亭々として高く雲を拂ひ、牛を蔽ふに足るべき翠蔭は、黒く水にうつれり。狂生大聲をあげて、こゝ屈強の場所なりかし、いで衣服はいふに及ばず、身體より暑氣までを、この清流と涼蔭とに洗ひ去らむと、わめくに、われも何條いなむべき、直に帯を解きすて、單衫と襯衣とを河水に投げ、石の上にて揉みつ、力を合せて絞り、焼けたらむやうに熱き、花崗岩大塊の上にひろぐれば、見る間に乾きゆく。二人はなほも立ち去らず、やがて半身を激湍の中に没し、且つ漱ぎ、且つ浴す。この快、到底筆紙のつくすべき所に非ずとぞ覺えたる。

かゝるところに丘頂の村家より、年のほゞ十には足らぬ二三の少女、魚などをすくはむとにや、箆を携へて、われ等を去る十數歩なる上流に下り、何やらむのしりつゝ、遊べるが有り。次いで來りしは、二入ばかりの女にして、手には盛りいみじき白百合、一莖の花を携へ、裾をすこし掲げて、徐々として水を涉りつ。星眸一轉、われ等の容態を見て、いぶかりしものゝ如く、暫時こなたを見つむるやうなりしが、われ等が相語りつゝ、眺めかへせしに驚き、その手にせる白百合にもまさりて、鄙にはまれなる、品たかく美しき面を、さつと打ち赤らめ、蒼皇として身を反へし、よその見る目もいたましく、かどくしき巖石を、やはらかき足にて踏み拾ひつゝ、なほも上流へとむかひぬ。紅裙碧水に映じて鮮かに、その輕き袂を翻したる涼風は、えならぬ一脈の香を吹き送りに、やがてわが顔をも撫でぬ。身は瑤島に入りて仙妃を垣間見し心地のせられて、暫し茫然として言なく、あからめもせで、打ち守りつゝ、彼のチ、アンの名畫の筆あらばどこぞ思ひしか。

凡そ二時間ばかりも油賣りし後、勇氣を鼓舞して復た發しぬ。地圖にて見れば、神領の村、近にある如くして、實は然らず。尙ほ二里はあるべしとのことに、大にあぐみ果てつ、時

は眞午に垂んとして、今朝の麥腹れずくも減りたり。このあたり飯賣る家もがなとて、物色しつゝ、進みしが、見わたらず。峠又一つ越して、一軒の農家を見つけければ、委細かまはず、躍りこみて問へば、矢張純麥の飯の冷えたるが有りといふに、取り敢へず、馳走に預りぬ。今朝のにくらぶれば、冷温の差あるためか、さしもの豪傑たちも、こたびは大に意氣地なく、二椀目には眼を白黒して嘔み下ろすほど不味く、三椀目には頬張しまゝ、口中こそくとして、噛まむとすれば麥粒逸げてすべり去り、喉元三寸なか／＼に通りゆかず。たゞ後の空腹を患ふるの餘りに、冷茶を注ぎかけて、丸呑になしをはりぬ。この家の主、われ等を何處のものぞと問ひしに對して、狂生が北海道なりと答へしに、北海か、北海かといくたびか口中に繰りかへしつ。いしくも遙々來られしものかな、われも若かりし昔、一度、かの地へ赴きしことあり。現にわが親戚の一家は、かしこにいまれり。そも、われ等が航したるときは、小さき汽船に千人ほどの移住民を載せて、波路はるけくすゝみ出でしに、艙底の暗くして風の通らぬためか、あらぬか、むごくも死者三人を出しぬ。かゝることならむには、到底堪ふべきにあらずとて、乗客一同船長にせまり、



奥州の宮古といふ港に立ち寄りて、一日間の上陸を許され、しばしの息ぬきして、漸くにその地につきぬ。函館も、小樽も、札幌も、見物せしが如何にしても見事なる所、こゝ四國などにはくらぶべき程の市なかるべしと覺えぬ。あはれ、年いまだ少し若からむには、家を擧げて再び渡航し、かしこに永住せむものを。この近傍にも同じ志のものなきにあらぬど。わが航海中の苦を聞きつたへて、斷行せぬが多しなど語る。狂生一々聞きをはり、われにむかひて、この老爺のいふところ、露ばかりも詐なし、げに移住の困難は、見ぬ人の察しも及ばざる所なるべしと、さゝやきつ、流石に嘆息せし様なりき。

食後なほものうき旅をついで、つひに神領の村に入りぬ。村口の鎮守のみやしるの、ことに神さびて、石華表の内には、一株の大銀杏の、幹にちゝを垂れたるが、ぬつと立ち、涼風繁縁を戦がすを見て、そいろにゆかしく歩をまげてすゝみ入り、略ぼ小草ほどに、のびたる青苔の上に偃臥していこふ。かくて一時間もすぎしころ、殘惜げに立ち去り、新道にしきたる砂利の、焦げしかと疑はるゝばかりなるを蹴ちらして寄井といふにいたる。こゝは少しく人家のたちならびて、村らしきところ、河合屋といふが、殊にすぐれし宿屋

なるよし聞きつ。日はなほ高けれども、歩むこといやになりしが上に、この先には然るべき宿ある村なしと感されしがため、つひに草鞋をその家にときぬ。

四日、朝日子の光を脊にうけて、六時ごろに寄井を發し、おなじ名の峠にさしかゝる。いみじく峻しき坂路、長しとにはあらねど、傾斜の大なる驚くべきばかりにて、雨など降らば、とてもく歩かれまじとおもふ程なり。かくて嶺頂にたどりつけば、身は重巒疊嶂の環合したる巒の底に立ち、脚下より迸り出づる溪流は、日光を受けて、白銀をどかしたらむ如き色をなし、うねりくして東へとすゝみゆく、その方は山峻やゝひろく、田畦處々に開けたれども、望眼遠きに及ばず、すべて僻幽の境地と見えたり。

四國八十八靈場中の最險所と唱ふる八鬼山は、こゝより程遠からぬ地にありと聞きしが、又詣でず、昨日にくらぶれば、さのみ懶くあらねど、眺はなくて、たゞ峻しきのみなるに辟易して、牛の歩みのそれより遅く、亭午までかゝりて、わづかに四里の道を歩し、川井をすぎて、木屋平といふにいたり、晝げしたため、づる／＼と三時間ばかりもいこひつ、日かげや、西に傾きしころ、又發しぬ。

半里ほどすゝめば、龍光寺と呼ぶ關若あり、劍山にのぼるものは、この寺に詣づべき例なりと聞きしが、神佛の信仰にはいたく冷淡なるわれ等、かゝる瑣事に頓着せでゆきすぎつ。谿山いよ／＼盛合し、四方の山々には老樹喬木密生し、烟霧蒼勃として垂れかかり、夏山の雨待顔なるに、日の光次第に暗くなりゆきし心元なさ。いでや、いそぎにいそぎて、今宵は藤の池の籠堂にとまるべしとて、殆んど競走するやうに足を早めつ。しばらくして一山前に湧き、その半腹に一軒の家あるを見付け、あれこそ目ざす處にと仰ぐに、名はいかめしきみはかせの劍の山は尖頂を五百重、夕雲の中にかくして見え分かず。されどたもはず崇高の感にうたれて、杖をふるふて天を割し、快と呼ぶこと數回、程なく山峽の全く窮りし處に達す。こゝを垢離取川といふ。河幅わづかに一間ばかり、磊砢たる花崗岩の大塊は相累りて、階段をなし、鏘然として寒玉に似たる清冷の水は、躍て瀑となり、瀦して潭となり、やがて一頓して瀉下し去る。かたへなる崖壁の下には、彩色したる怪しの石佛數基、ならび建てられ、鄙にはめづらしき屋根付の飛梁さへ架したり。橋を渡りをはれば、路俄然として急坂となり、前者殆んど後者の登を踏むともいひたげなり。こゝを柴折坂

といふとか。

蛇の如くなれる樹根の露出して蟠屈したるに、足場を得て、登りしこと半里とおぼしきころ、一息つかむものをとて、石に腰かけていこふ。折しも、下より登り來る白衣の老人あり。頭に二毛を戴きながら、骨逞しく肉しまりて、絶えて老いそぼけたるさまを見ず。しかも眼底あやしき光を放ち、われ等を尻目に睥睨するけしき、たゞ者のごしも思はれず。これは畢竟藤の池権現の神使にてもやあらむと、ひたすら畏懼の心起り、二人ともに瑟縮して一語を交へず、やがて立ち去りて、更に登ること數十町、つひに劍山神社の華表に達しぬ。

さきに眺めし籠堂は其上にあり。戸は鎖されて、呼べども、たゞけども、いらへするものなく、全く人氣なきさまなり。扱ては靈の翁こそ、この堂のあるじなりしよ、さなりと知らば、少しは言葉などかけなくべかりしをど、語る中、かの翁は案外早く登り來りつ、戸をひらき悠然として内に入りぬ。われ等も續いて押し入り、事情を打ち明け、前刻のよそ／＼しかりし罪を詫びて、今宵の宿泊を頼むに、色よき返事はせず、怫然としてあたりをかへりみ、たゞの一語、米なしとて拒みぬ。今は殆んど取り付く島も、なくなりかゝりし

に、二人聲をそろへ、こゝに來りて宿拒まれては、いかに困却すべきか、翁も少しは察せられよかしなど、辭を卑くし、哀を請ひければ、もとく腹悪しくはなかるべき朴訥の老人、やうやくに打ち解けて、冷えたる残りの麥飯にてもよろしとならば、宿は貸さむ。されど、明日の朝餉は疑はしといふ。それは後にいかにかせむとて、足を筒の水に洗ひて上る。五六盞しくべき板間の中央に、爐を切りて、顔れかゝりし四壁、残る隈なく煤けたり。凡そ一時間ばかり經たりとおぼしく、日もたそがれの頃、又二人のもの入り來りぬ。五十あまりの老婦と、十六七の少年となり。老婦は坊の翁と餘程親しきもの、如く、菴坊さんくと呼びて、頗る親切に仕掛け、米の飯を重箱に詰めたるを、土座として差し送りぬ。少年はその近隣のものとおぼしく、寄邊なきまゝに、この坊に使はれむとて來りしもの、如く、見しところ、どこやら扱作めきし可憐なる若者なりき。

食事中、翁と老婦とは相繼打ち、劍山藤の池權現の御利益ともいふべき、いともく馬鹿げたる話を聞かせけるに、かの若者は兎の毛ばかりも疑ふ氣色なく、聞きつ、問ひつ、且つ感じつあり。かくて情なきばかりなる夕飯すませし後、いざや眠らむといへば、翁は

やをら起ちて、傍の戸棚より垢じみたる一枚の薄蒲團を投げ出して貸しぬ。紺の木綿に寄進者村名を染めぬきたり。やがて床のべ終り、われ等と若者とは爐邊に臥しつ。翁と老婦とは何か囁き合ひ、燭を點じて奥深く神隠させ玉ひしが、何處行きけん、知らず。

高山のとなれば、夜氣冷かにして、清寒耐えず。蚊は一疋も居らざれども、蚤の多きと言語に絶えて、なか／＼にねむりつかず。起て衣を振ひしこと幾回真夜中する頃、二人ともに、戸を推して出で、やがて華表の前に漫步す。覺束なかりし夕の空、名残なく晴れつくし、萬里の碧雲秋高くして、星河一道、斜に數峯の西に垂れつ、月に半輪の雲なく、山に萬樹の影あり。遙かなるあたりには、たぎつ水音琴々としてすみわたり、むさびなどには、樹梢に鳴く聲のひいき、靜かさすぎて又なく凄し。石壇の上に立ちて、微吟すること多時、やがて満身の風露を浴びたるに心付き、又たかへりて衾をかつぎてねむる。輾轉の極、夢をむすはず、つひに晨に達しぬ。

かの若者は慣れしものによ、蚤の攻撃にもかまはず。すやくと眠り入り、腑をかくさへあるに、時に醜體を暴露して、行儀わるくもあたけまはるさま、消え残りし火影に見えず

きては、可笑しき堪まらず。餘りの事に、狂生が蒲團をかけ與へしに、流石に神経はあるものか、夢中ながら、大事ないくと、うめき出しこそ、一しほ笑の種なりけれ。せめては其角が喝破せし、切られたる夢にても見ほましかりしを、蚤の攻撃しばしも止まねば、夜もすがらまぶたを塞かず、明くるを遅しと待つ中に、空山雀鴉を聞かず、晨光一縷いつしか戸隙を穿ちしに驚き、五日の朝、疾く起きて、食事を促す。炊がむにも米麥の貯つきたればとて、すゝめしは老婦が土産の米の飯、ぼろくになりかゝりしを茶漬としてかきこむ。悪米ながら、確に米なれば、僅に腹に押し込むを得つ。晝の用意の握飯、腰に着けて、結束し終れば、いざとて立ち出づ。朝鳥の聲ほがらかに林中に鳴き、旭光東の山に射かゝり、萬道の金縷亂飛して、世界忽ち赤く、樹々の葉の上にたきし露の、燦然としてきらめきつるを、そよとつれなの朝嵐、ゆすりて拂ふ間もあらず、つらめきどめぬ珠の散りみだるゝを、をかしと眺めながら、清爽の氣肺腑に満ちて、心神の壯快なること譬ふべくもあらず。二人前後して、杖を揮り立て、劍山の頂めがけて進みぬ。

龍堂の上には、大護摩堂あり、龍光寺に隸屬す。十間四方の廣さとかや、深山の奥には稀

れに見る大建第なれども、濁世感亂の今日この頃、風打雨淋の痕は幾十年、頽破日に甚しく、柱傾き、豊落ち、山嵐圍を排して入り、佛頂をなぐるもわびし。これより八町ゆきて追分といふにいたれば、道二つに岐れ、われ等は左なるを取りて登りぬ。上なる峯を、一の森といふ。

路は急峻にして滑り易きが上に、密篠灌莽人よりも高く、隙間あらず、からみつ、もつれつ、其少しく倒れ合ひたるどころ、僅に通路たるを知るのみ。之をかき分けつゝ進みゆくに、簾々として聲あり。きぬくの別を惜む乙女が情あつき涙の、それならなくに、まだ乾かぬ草の露の、わが衣手にふりかゝるを、無分別なる置所とて怨みむは流石なれども、湿は早くも杉衣に透りて、冷寒堪へず、深き胸に及ぶほどの川を徒渉するに比して、其苦しきは更にまされり。幾千年來斧斤絶えて入りしことなしと見ゆる林の中には、檜柏櫻櫟など、十圍の老樹、秀蔚參錯して、その梢は高く雲漢を拂ひ、蒸し出す走翠一片、かろく飛で落つれば、杉角痕を留めて、緑を暈せむとはしつ。俯して瞰れば、千仞の壑底、雲絲縷々、斷又續、搖又曳、須臾にして腐合すれば、鞋下皆かなり。やがて風一陣吹きあぐる

よ〇〇見えしが、霧〇〇地〇〇が〇〇肘〇〇腋〇〇の間〇〇を〇〇拂〇〇ふ〇〇て〇〇颯〇〇り、つ〇〇ひ〇〇に〇〇天〇〇空〇〇に〇〇瀾〇〇漫〇〇し、日〇〇色〇〇微〇〇に〇〇し〇〇て〇〇黄〇〇な〇〇ら〇〇む〇〇と〇〇す、漸〇〇く〇〇上〇〇る〇〇に〇〇従〇〇て、奔〇〇泉〇〇石〇〇に〇〇激〇〇する〇〇溪〇〇聲〇〇は、次〇〇第〇〇に〇〇聞〇〇え〇〇ず〇〇な〇〇り〇〇ゆ〇〇き、知〇〇ら〇〇ず〇〇ば〇〇名〇〇の〇〇り〇〇つ〇〇い〇〇人〇〇を〇〇呼〇〇ぶ〇〇か〇〇ど〇〇あ〇〇や〇〇ま〇〇た〇〇る〇〇い、奇〇〇禽〇〇の〇〇叫〇〇號〇〇を〇〇耳〇〇に〇〇す〇〇る〇〇の〇〇み。淋〇〇し〇〇き〇〇な〇〇ん〇〇ど〇〇も、あ〇〇ろ〇〇か〇〇な〇〇り。

頂〇〇ち〇〇か〇〇く〇〇な〇〇り〇〇て、樹〇〇木〇〇漸〇〇く〇〇扶〇〇疎、た〇〇い〇〇熊〇〇笹〇〇の〇〇茂〇〇み〇〇の〇〇み〇〇は、な〇〇ほ〇〇深〇〇く〇〇し〇〇て、路〇〇は〇〇前〇〇にも〇〇増〇〇し〇〇て〇〇明〇〇な〇〇ら〇〇ず、そ〇〇の〇〇心〇〇細〇〇き〇〇こ〇〇と〇〇到〇〇底〇〇た〇〇と〇〇へ〇〇む〇〇方〇〇な〇〇し。か〇〇く〇〇て〇〇一〇〇の〇〇田〇〇和〇〇を〇〇す〇〇ぎ、二〇〇の〇〇森〇〇を〇〇度〇〇り〇〇三〇〇の〇〇森〇〇を〇〇越〇〇え〇〇ぬ。そ〇〇の〇〇上〇〇に、一〇〇大〇〇石〇〇灰〇〇岩〇〇の〇〇突〇〇兀〇〇と〇〇し〇〇て、聳〇〇立〇〇する〇〇あ〇〇り、岩〇〇脚〇〇に〇〇社〇〇め〇〇き〇〇た〇〇る〇〇も、半〇〇は〇〇破〇〇れ〇〇を〇〇見〇〇る。地〇〇圖〇〇に〇〇し〇〇る〇〇せ〇〇し〇〇小〇〇劍〇〇祠〇〇と〇〇は〇〇是〇〇なる〇〇べ〇〇し〇〇と、う〇〇な〇〇づ〇〇き〇〇て〇〇過〇〇ぎ〇〇ぬ〇〇る。

こ〇〇れ〇〇よ〇〇り〇〇少〇〇し〇〇ゆ〇〇け〇〇ば、絶〇〇頂〇〇な〇〇り。藤〇〇の〇〇池〇〇よ〇〇り〇〇三〇〇里〇〇ばかり〇〇とい〇〇ふ、嶺〇〇路〇〇長〇〇し〇〇と〇〇には〇〇あ〇〇ら〇〇ね〇〇ど、傾〇〇斜〇〇の〇〇急〇〇な〇〇ると、道〇〇の〇〇覺〇〇束〇〇な〇〇き〇〇と〇〇は、天〇〇下〇〇ま〇〇れ〇〇に〇〇見〇〇る〇〇と〇〇ころ。な〇〇ほ〇〇山〇〇中〇〇風〇〇物〇〇の〇〇幽〇〇邃〇〇に〇〇し〇〇て、石〇〇峽〇〇の〇〇峻〇〇窄〇〇なる〇〇に〇〇至〇〇り〇〇て〇〇は、到〇〇底〇〇他〇〇に〇〇比〇〇類〇〇なし〇〇と〇〇ぞ〇〇覺〇〇え〇〇た〇〇る。

絶〇〇頂〇〇は〇〇平〇〇坦〇〇に〇〇し〇〇て、方〇〇數〇〇町〇〇ばかり、小〇〇篠〇〇く〇〇ま〇〇な〇〇く〇〇し〇〇き〇〇つ〇〇め〇〇た〇〇る〇〇が〇〇中〇〇に、山〇〇龍〇〇膽〇〇あ〇〇と〇〇み〇〇など

を〇〇初〇〇と〇〇し〇〇て、名〇〇を〇〇知〇〇ら〇〇ぬ〇〇奇〇〇葩〇〇幽〇〇葩、三〇〇々〇〇五〇〇々、三〇〇々は〇〇う〇〇す〇〇紅〇〇に、五〇〇々は〇〇濃〇〇紫〇〇に〇〇咲〇〇き〇〇て、點〇〇綴〇〇した〇〇る、た〇〇と〇〇ふ〇〇れば〇〇緑〇〇の〇〇色〇〇の〇〇毛〇〇氈〇〇に、畫〇〇模〇〇樣〇〇を〇〇繡〇〇し〇〇出〇〇した〇〇る〇〇が〇〇如〇〇し。こ〇〇ゝは、神〇〇の〇〇馬〇〇場〇〇と〇〇い〇〇ふ〇〇と〇〇か。あ〇〇も〇〇ふ、秋〇〇高〇〇き〇〇碧〇〇霄、澄〇〇み〇〇わ〇〇た〇〇り〇〇て、星〇〇月〇〇皎〇〇潔〇〇なる〇〇夜、天〇〇つ〇〇神、國〇〇つ〇〇神、こ〇〇の〇〇山〇〇嶺〇〇に〇〇つ〇〇ど〇〇ひ〇〇玉〇〇ひ〇〇て、金〇〇支〇〇翠〇〇葆〇〇紛〇〇た〇〇る〇〇處、吹〇〇き〇〇す〇〇さ〇〇ぶ〇〇簫〇〇聲〇〇水〇〇の〇〇如〇〇く、月〇〇を〇〇環〇〇佩〇〇と〇〇なし〇〇風〇〇を〇〇襟〇〇帶〇〇と〇〇な〇〇した〇〇る〇〇天〇〇つ〇〇乙〇〇女〇〇か、な〇〇び〇〇く〇〇も〇〇か〇〇へ〇〇す〇〇袖〇〇た〇〇も〇〇と、遺〇〇譜〇〇つ〇〇ひ〇〇に〇〇人〇〇間〇〇に〇〇傳〇〇へ〇〇さ〇〇る〇〇瑤〇〇池〇〇の〇〇樂〇〇を〇〇奏〇〇で〇〇つ〇〇い、舞〇〇ひ〇〇め〇〇ぐ〇〇り〇〇し〇〇こ〇〇と〇〇な〇〇ど〇〇あ〇〇り〇〇け〇〇む〇〇よ〇と。馳〇〇する〇〇思〇〇の〇〇末〇〇は、天〇〇上〇〇の〇〇靈〇〇界〇〇に〇〇む〇〇か〇〇ひ〇〇て、自〇〇ら〇〇床〇〇し〇〇く〇〇な〇〇つ〇〇か〇〇し〇〇と〇〇し〇〇の〇〇ば〇〇れ〇〇ぬ。

神〇〇の〇〇馬〇〇場〇〇の〇〇西〇〇南〇〇隅〇〇に〇〇は、ま〇〇た〇〇二〇〇大〇〇石〇〇灰〇〇岩〇〇の〇〇卓〇〇立〇〇する〇〇を〇〇見〇〇る。大〇〇劍〇〇祠〇〇と〇〇し〇〇て〇〇いつ〇〇き〇〇ま〇〇つ〇〇ら〇〇れ〇〇し〇〇範〇〇は、四〇〇柱〇〇を〇〇残〇〇して〇〇天〇〇風〇〇に〇〇剝〇〇が〇〇れ〇〇や〇〇し〇〇け〇〇む、跡〇〇ば〇〇か〇〇り〇〇残〇〇れる〇〇を、一〇〇拜〇〇して〇〇去〇〇り、正〇〇南〇〇の〇〇最〇〇高〇〇所〇〇に〇〇測〇〇量〇〇部〇〇の〇〇物〇〇見〇〇や〇〇ぐ〇〇ら〇〇の〇〇立〇〇てる〇〇を〇〇見〇〇つ〇〇け、馳〇〇せ〇〇ゆ〇〇き〇〇て〇〇攀〇〇ぢ〇〇の〇〇ぼ〇〇り、笠〇〇を〇〇卸〇〇し〇〇衣〇〇を〇〇拂〇〇ひ〇〇つ〇〇い、坐〇〇愁〇〇す〇〇る〇〇こ〇〇と〇〇や〇〇久〇〇し。

喘〇〇す〇〇で〇〇に〇〇定〇〇て、神〇〇乃〇〇ち〇〇王〇〇な〇〇り。仰〇〇い〇〇で〇〇八〇〇荒〇〇を〇〇睥〇〇睨〇〇し、俯〇〇し〇〇て〇〇九〇〇地〇〇を〇〇藐〇〇視〇〇し〇〇つ。意〇〇氣〇〇正〇〇に〇〇顛〇〇豪〇〇自〇〇ら〇〇天〇〇開〇〇の〇〇近〇〇く〇〇し〇〇て〇〇叩〇〇く〇〇べ〇〇き〇〇を〇〇疑〇〇ひ〇〇ぬ。こ〇〇の〇〇山、阿〇〇土〇〇の〇〇境〇〇に〇〇當〇〇り〇〇て、海〇〇面〇〇を〇〇抜〇〇くと〇〇五

千八百六十尺、これを豫土境上の石鐘山に比して、わづかに三十尺を輸するのみ。相並んで東西の巨鎮たり。凡そこの二山の間に錯綜交絡せる山脈丘勢は、即ち四國の全陸を構成するなりとか。されば、脚下に走りつ儘れつする亂山頽峯は、塊然として培塿の如く、蟻埴の如く、しかも脈絡明かに透かされてぞ見ゆる。たゞ萬壑の雲烟、卷舒變幻、須臾を以てする能はざれば、景象従つて轉じて去り、忽ち有り、忽ち無く、仔細に諦視するの暇なく、加ふるに遠處は雲氣濛としてたちこめ、微冥幽渺の裡、絶えて海陸を辨せず。土州の沿岸、東は室戸より西は蹉跎にいたるまで、九十九里、弓櫓の長汀、大鯨潮を噴いて躍れる荒なだも、何處をそれと知るよしなかりき。されど、この身、飄然遐舉して雲中に立てるを自覺すれば、豪快の情を禁ずる能はず、神は宇宙の外に飛で、氣は乾坤の表を壓し、馮虛駕風はいふに足らず、清都紫微、直に到るべきの想ありき。仙乎、神乎、自ら知らず、たい窅然として天下を喪ひたりとやいはむ。あゝ此時の感、われ今こゝに辯せむとして、已に言を忘れぬ。

翻りておもふ、太古巢居の民は、其天地、むしろ、ひろかりけむと。人の世の事さまじげ

くなりゆきては、井處して窘迫するを奈何ともしがたし。崔巍たる朱門の裡に住む、うとましの痴者、壁を堅くし牆を高くし、天然の畫を掩遮するをいとはず。疊十枚に足らざる室中にこもり居て、博山香爐の烟を以て岫を出づる雲とし眺め、屏間人工の似而非山水の間に臥遊して、自ら足れりとなす。人はつひに自然と絶ちぬ、已ぬるかな。われも今浮世に落ちて塵の子たり。終歲踟躕する都門の中の、俗にひたさるゝこと漸く深く、財鬼に事ふの止むを得ざるに出で、あはや美神われを棄て、去らむとすめり。因つてその影をなつかしみ、連りに之を追うて、狂奔するに至れば、山水爲にわが累をなす。しかもなほ葛藤を解き、羈絆を脱する能はず。憶うて、こゝにいたれば、潏然として涙下らむとす。たゞ他年清修して去るを得ば、必ず、こゝ山頂に巖處して、雲煙を吸ひ、星斗を弄しつゝあらむ。若し又たわか前身をして、幸に五雲閣下の一仙卿たらしめば、降謫期満ちしとき、羽幘星冠、青鳳凰に驂し、こゝより起ちて、瑤京の故宮にかへる日もありなむよ。

扱て、これより、下らむとす。そもこの山の發路、凡そ三條あり。東口は阿波よりするものにして、藤の池口といひ、西口は土佐よりするものにして、祖谷口といひ、北口は讃岐

よりするものにして、半田口と呼ぶ。わが先にのぼりしは、藤の池の東口なれども、今より取らむとするは、これ等三條以外の徑路にして、直に土佐の香美郡久保といふに至らむとする者なり。

物見やぐらを降らむとするとき、二人の若者、かなたより登り來りしを認めぬ。垢じみたる薄き單衫をひきまといひ、藁繩を帯にして、山刀を横へ、獵銃を肩にし、雁首のすぐれて大なる煙管をくわへて、しづくと歩み近よる。問はでも知るき足引の山の獵夫、われ等と相見るや、叮嚀に挨拶をばなしぬ。時節外れて、今頃何を打つぞと問へば、鹿を打つなりとこたふ。ここの序には、仔細に路を問ひ正しつ。彼等の南方の深壑に下り、われ等は西面の峯脊を度りぬ。

行くこと幾くもなくして、丁々たる伐木の音、遠きあたりより、こだまに反響して、二聲に聞ゆるをいぶかしみ、首をめぐらせば、北方の壑底、一面の深林を切り倒したる跡あるを見つけたりけり。地圖を案すれば、祖谷山一帯の地とおぼしくて、かつて人より聞きしことどもおもひ出されつ。肥後の五個庄、越後の秋山などと同じく、網を漏れし魚ならなく

に、壇浦よりにげのびたる、平家の子孫の、住める村なりとか。人境を離れたること三里の奥の別天地、言語風俗、みな古様を存して、おもしろき所なるよしなれども、今は急ぎの旅にして、探求の志を果すを得ざる口惜しさに、行く手は玉鉦の道すから、やをら手を笠に加へて、幾度となく、ふりかへりつ、眺め下ろされしが。

峯脊を度りつゝ、む路は、登頓下上すること幾十回なるを知らず。すべて樹木なく、相變らずの密篠からみ合ひて、排進すること艱ならずといはず。時はすでに午を過ぎて、赫然たる驕陽、正に頭上にあり。汗、額より流れて、眼鏡の縁につたはり、雨の日のそれにも増して、鏡面忽ちくもるを、その度ごとに指にて拭ひつゝ、近眼の不自由は、かゝる折にもありけりと、嗟嘆しつ。苦しいよくと増さりて、今に爛死するかとまでおもひしが、流石は高山のこと、骨を玉にせむず涼風、浩々として天上より吹き下ろせしには、僅に蘇りし心地せられて、友と二人相呼び、相勵ましてすゝみぬ。

今日は山路を十里、一字の茅屋だに無しと聞き居たれば、せめて清水の湧くところにて、噓ぢらむと、今まで腰につけたりし握飯を、腹減りたる上に、清水のあること覺束なけれ

ばとて、取り出し、歩みながらにくらふ。口中乾らびて、咽ばむばかりなるを、漸くに嚙み下ろしつ。飯粒のねばりつきし指先をなむれば、鹽よりもきひしくて、苦きやうなる鹹味を覺えたるも、くるしや。

やがて三四里は來てけりとおぼしく、聖峯といふを正面に仰ぐに至りて、少しく峯脊を下り、路の幅もやゝ大きくなりぬ。路傍の草樹を藉きて、二人の男のやすみ居るを認めて、近づけば、滾々として巖罅より迸出する清水のありけるに、嬉しさたまらず、馳せ寄りて、兼ねて用意せし水呑の朱塗の椀、取り出す間も遅しとて、飲みつゝいくること幾十杯、はてはまだるしとて涌く所に口をつけて予呑みぬる。こゝに初めて渴を醫するを得て、坐憩更に時あり。彼の男等とかたらふ。聞けば、この山より出づる、下駄の下地の山桐を、山下に運ぶものなりとか。その一人、つくづくとわが顔を打守りて、君はどこやらにて、見しことあるやうなる人なりとて、首をひねるに、いづれ英物ならぬわれの顔の如きは、天下其類多かるべしとて、笑ひつ。かれは又た、わが草鞋の半よりちぎれたるを見て、肩をひそめ、これよりさきは、すべて下り道なれども、人は砂礫と共に滾下せむばかりなるを、

その草鞋にてはむづかしかるべく、これ參らせむとて、はきかへたる草鞋の、まださまでは化けざるを呉れたる、深き情のほどうれしき。

かくて殆んど屹立せる如き、急峻の坂路を下るに、膝蓋骨、飛び出さむやうに予おぼえたる。折から、一天俄にかき曇り、鳴る神は雲の峯の崩れし音か、轟然連りにひいき續けしが、夕立の雨は、山下何處の里にふりけむ。こゝは木の葉に、ばさりの音も聞かず。やがてまた拭ふが如く晴れわたり、西日名残の雲を彩りし、夕榮の空の色、うるはし。

路また林叢の間に穿ち入りて、傍には細溪のたぎるゝを聞きつゝ、われは流水に従て、また人間に下らむとす。かくて、暮山紫に、ほひて、日ぐらしの聲かしましき黄昏の頃、久保といふにつきて、初めて人家を見るを得たりき。

こゝは峽底僻幽の境地と見ゆるものから、閑古鳥、住めば都と、こたふらむ、流石に人は、慣れて老いつゝ、散點せる屋舎の数は二十ばかり、茅檐山を靡き、斷橋溪に臨みつ。水行きては雲停り、樹老いては鳥睡る、蕭索清寂の風色、今更に趣ありなといふは愚か、市朝萬丈の紅塵を隔截して、こゝに屏障をめぐらせる四面の青山は、渡る日の影を遮りて、入



相の程も早けれども、浮世を外の、日の長きことは小年も管ならず、石丈木客を友に持ち、山歩を専らの業とせる村人の心は、自ら長閑なりとか。まことに蜂蟬の命ある間を住みわづらひて、こゝもまた、浮世なりけり、よそながら、思ひしまゝの、山里もがな、と詠じけむ、世捨人は、こゝにこそ杖を停むべかりしか。

世のつねの旅籠などあるべき處ならねば、村中にてや、立派らしく見えたる一軒の家にてたりて、一夜の宿を借りぬ。年の程は六十に近かるべき主人は、山間の風雨に鍛えたりけむ、巖なす骨と肉と、共に逞しく、水滸傳一流の筆法を用ひて、顔は渥丹の如く、聲は破鍾の如しなど、いひたげなるが、朴訥仁に近き情は深く、露はかりも疑ふけしきなく、歡迎して措かず、直に草鞋を解き棄て、やがて爐邊に對坐して語り合ふ。や、ありて主人の翁、家には近頃米盡きたり、公等は何程を要し玉ふぞといふに、二人六七合あれば足りぬべしとこたへければ、好しくと領きつゝ、升を提げて出でしが、何地ゆきけむ、程なくかへり來り、米を婦にわたして、煮炊せしめぬ。翁はなほも爐邊に倚りて踞坐し、燃え残りたる竹片を拾ひ上げ、鑊庖丁を以て、一心に削りかゝりしが、出來上りたるを見れば箸な

りけり。炊米の將に熟せむとするころ、翁は茶を得て來らむかなど獨言いひつゝ、又た手に一撮を得てかへり、之をたざる釜の中に投じぬ。扱ていよく膳にむかひて箸を取るに、供せられしは、たゞ一種、大根の味噌漬あるのみ。それも繊維かたくして、さながら牛蒡を噛むに似たりけり。翁はわれ等の窘むさまを見兼ねてや、しばし待ちね、村中をたづねなば、豆腐位はありなむをといひつ。又た出で行きしが、程なく齋らして歸へり、味噌をつけて食はしむ。これも又あやしく硬ければ、ひそかに石豆腐とて頗る風流な名をおはしめつ。かくて情なきより、むしろ可笑しき夕飯は畢りたりき。

將に燈を點せむとして、老婦はいともわびしげに、今日は油買ひおくこと忘れたりといふに、今更詮なく黯黒の中、時に爐火の閃光を發するあるのみ。家中のものといへども摺り足して、躓かざるを惟勉むるさま、又なくをかし。

食後翁と話し、興漸くすゝむ。翁、得意に吹き立て、われは寒村の老氓なれども、自ら人に譲らむと信ずる程のもの無くてや。日の本はあろか、唐天竺のこといへども、一應は會得せざることなく、村中の人はいみなわが敵に非ず、なぞいひて、氣焰萬丈、天を薰

するの勢あり。つひにわれ等二人をして、その一個獨創の日本歴史論一斑より初めて、多少慷慨的口吻のほの見ゆる述懐と、あどろくしき名をつけなば處世觀とやいはむ議論とを合せて、拜聽するの榮を得せしめぬ。あはれ眼に一丁字なくして、天真朴素なることは、葛天の民にも似たる山村の老翁が、語り聞せし言の葉、いかにをかしく面白かりしかは、知らぬ人のとても推察し到らざる所なるべし。

翁は先づ襟を正うし、危坐してわれ等にむかひていへらく、そも事古りにたれども、天神七代、地神五代の御時は、奥州いではの城に都し玉ひしが、人皇に及びて、柿本の人丸がうたひけむ、逢坂山のさねかづらに移り玉ひ、後には奈良の都の八重櫻、宮居をつとめつ。物換り、星移りて、今は吾妻に都し玉ふ。かく明けく治まれるめでたき大御世に、似而非役人の要なき世話ごととして、威張りちらすこそ心得ぬ。凡そ下役たらむ者は、上の意を受けて立ち働けば足るべきを、今の輩ある奴原は、餘りにく出過ぎて無禮なり。さはいく、下役たらむは易く、上役たらむは難し、上役たらむ人、鷹ありて物に動ぜずば、日の丸の扇を手にし、天満天神の如く坐り居てもよきぞかし。彼の義經の如きは、虎の巻とて、そ

の平生考へおきたる事どもを、かきあつめたる帳面を秘藏し、時に臨んで一たび開くや、何月何日、何の方より何萬騎の軍勢押寄するを前知することさながら掌を反すが如くなり。自らは、指圖するのみにて、事欠かぬものなり。上役もかくなれば、つねに安樂なれども、時には苦の甚しきこともあり。鳥津三郎といふは、奥州一のき、役者なりしが、かの支那征伐の折のことかどよ、兵糧攻にあひければ、詮方なく、豚の肉を食ひけるに、其不淨のためか忽ち打負けて、むごや首をば敵に取られき。その弟のなにがしは、幸に食はざりければ、僅に生きて還りしとぞ、なみ大抵の人達は、上役になられぬものなりと。翁の話、移りゆきの妙なると、事柄の奇なるとは、更にもいはず、その材料の出所にいたりては、人間一部の百人一首の外は、凡眼以て端倪するを得じとぞ覺えたる。われ等は、敢て抗論せず、謹聽して談を了へしめぬ。

夜更けて寢所に導く、古蒲團二枚、無造作にしきならべしのみ、被なく、帳なし。戸扇は開放せられたれども、幸に蚊なし。溪風ありく敗廉を拂ひ、水聲澄みわたりて、空谷半夜、寂更に寂、月色枕を照らして幽奇極なく、風扇露衣、秋を感せし夢魂、うたい清かり。

明くれば六日、足らぬを我慢して、昨夜の残の飯に腹を塞ぎ、將に立ち出らむとして試に宿賃を問ふ。翁は相變らずの元氣よしにて、公等二人、米價八錢のみと、事もなげにいへるさま、をかし。さりとはと、二十錢銀貨一枚、受けぬものを無理に納めしめつ。結束すでに成り、辭して出でけるに、翁はついでに走せ出で、送り來ること數町、やかて溪水の屈曲するところにいたれば、淺瀬を教へ、われ等が涉りをはり對岸に立てるを見て、初めて腫をめぐらしてぞ、立かへりぬる。

溪を涉ること又た一次、路はつねに久保川の南岸に沿へり。この河、西南に流れて、未はいかめしき名の、物部川となる。峽勢なほ險窄、山高くして日光未だ到らず、曉霧わづかに霽れて、對岸の數峯、その勢は飛舞せむとするを仰ぎ、脚下千仞の底には、水石相闘ぐ音おそろしく、數ならず俯して瞰られつ、朝嵐、林木を拂ふて、空翠人の鬚眉を染めむとする心地よさに、歩もおのづから捗りゆく。路は自然に斜下する上に、旅人の命なる清水、處々に湧きければ、昨日とは打て變て、絶えて苦といふことを知らず。

四里ばかりにして、大朽といふ町めきたる里にいたり、別役川を渡る。橋邊は樹木幽鬱、

や、風情ありしやに覺えたり。これより、登降各半里ばかりなる一小嶺を越して、白石にいたれば、兩岸の山勢、漸く靡けて去り、俄然開朗、げに嶮を出でし心は、退院の僧にも似たりけり。時は午ならむとして、日高く風死したり。新道の砂利の、まだ踏み堅めざるには、足の底刺さるゝ如きおもひをなしつ。野尻の村のあたりにて、路傍の一家にいとふ。店前にはいみじく丈高く延びたる赤百合の兩三株、盛に花を着けたるに、鴉の孫にてもあるか、すぐれて大きな黒蝶の二つ三つ舞ひめぐれる、見る目も眩くて、うとまし。

初め徳島につきし折、高知なる知人かり、手紙を出し、今日つくべき由、いひ送りたれば、よしや、夜になりても、是非彼地までたどり付かばやと、おもふ心は箭に似たる、直ぐなる道をいそぎて、鴉の目、鷹の目、車をさがしつゝゆくに、こゝらは無下の田舎なればにや、つひに見當らず。五里の道いつしか歩いて、山田の町につきしは、四時の頃なり。こゝには、必ずあるべしと頼みにせしを、夜遅くなることゝて、賃錢廉ならぬに辟易して、断念し、なほ歩すること一里、後免といふに泊りぬ。

こゝも町めきたる村なるが、悪く開けしところと見えて、泊りし家など、待遇頗るよろし

がらず。流石に快くは覺えぬものから、明日はなつかしき友に逢ふべしとおもへば、強て自ら慰めつ。夜、町中を散歩し、藥店に購ふべきものありて、狂生その任に當り、かれこれ物いひつゝある中に、官吏風に見えたる一人の醉漢、突然として躍り込み、おやち麥酒よこせとわめきつゝ、一本をひつたくり、更に轉じて、狂生の肩をくらはし、理窟いふなと叫びつゝ、哄笑の聲を跡に残して、踏々跟々として立ち去りたる、さながら疾風に似たる振舞には、二人ともにあきれはてける。

七日、朝とく起ち、四里の道一飛びに飛ばして、午ともならぬに高知につきぬ。途中何處なりけむ、道傍に神さびたる社ありしを見付て、立寄りつ。祠内の神井を汲みて、渴を醫せむとするに、釣瓶なく、ほどと困じ果てしに、狂生はその秘藏せし玻璃製の水入瓶を取り出し、紐をつけ汲み上げたる、頓智の程、彼も自ら誇顔に、智慧は凄じきものにてなど、のしり居たりしが、數回の後にいたり、遂に誤て井戸側に打當て、微塵にくだけて沈みしには、天狗の鼻忽ちへし折られて、氣の毒なりき。かくて城北の久萬といふにいたり、われを待ちわびけむ、友なるにがしの家を訪ひつ。

(三十年八月)

### 故國の風色

岐○岨○の○高○峰○に○雲○や○わ○く○ら○む○、○い○み○じ○く○暑○き○日○の○ほ○り○て○も○、○青○銅○を○磨○き○た○ら○む○や○う○な○る○諏○訪○湖○の○面○を○わ○た○る○風○涼○し○け○れ○ば○、○さ○ば○か○り○と○も○覺○え○ず○、○日○は○守○屋○山○の○一○角○に○斜○な○ら○む○と○す○る○こ○ろ○、○四○里○の○汀○岸○を○一○周○し○終○り○ぬ○れ○ば○、○神○宮○寺○と○い○ふ○に○至○り○て○、○諏○訪○神○社○の○本○社○に○詣○で○ぬ○。○世○に○信○濃○一○の○宮○と○い○へ○る○は○こゝ○な○り○と○か○、○杉○の○老○木○、○さ○な○が○ら○鉾○の○如○き○が○、○蠶○々○と○し○て○天○を○衝○き○、○嵐○翠○雲○を○凝○ら○し○て○晝○な○ほ○暗○く○、○吹○き○度○る○風○に○太○古○の○響○あ○り○。○み○づ○籬○の○中○は○、○帯○浪○波○を○描○い○て○、○一○塵○を○留○め○ず○。○見○上○げ○ま○つ○れ○る○廟○貌○、○つ○ゆ○花○や○か○な○る○方○に○は○非○ず○、○か○つ○は○い○た○く○年○古○り○に○た○れ○ど○、○風○打○雨○淋○の○痕○の○天○然○の○雕○繪○を○せ○る○も○床○し○く○、○よ○ろ○づ○に○神○さ○び○た○る○け○は○ひ○あ○り○、○誠○に○名○たゝる○大○い○く○さ○神○の○祠○な○り○けり○と○、○わ○か○頭○は○自○ら○階○前○の○土○を○たゝき○つ○。○や○が○て○神○鴉○の○二○羽○三○羽○、○ぬ○ぐ○ら○求○め○て○梢○に○啼○き○喚○け○ば○、○は○や○夕○く○れ○の○時○と○は○知○ら○れ○た○り○。○今○宵○は○こ○の○里○に○泊○ら○ば○や○と○て○、○宮○を○出○で○つ○。○社○前○の○旅○店○に○立○ち○入○り○け○る○に○、○お○そ○ろ○し○き○病○に○惱○め○る○人○あ○り○と○て○、○す○げ○な○く○い○な○み○ぬ○。○外○に○も○あ○り○け○れ○ど○も○、○皆○思○は○し○か○ら○ね○ば○、○す○で

に旅寝の幾夜を重ねて、まだ見ぬ故郷のやうやく近くなりにしものを、今宵は少しく夜道を冒し、明日は早く着くこそ善けれと心を定めて、新らしき草鞋の紐をしめかため、程なく杖突峠といふにさりかゝりぬ。

この時、高からぬ邊、名にしちふ羊腸の坂路、百歩九折ともいひたげなり。嶺頂のながめは殊の外によく、折しも日落ちて空や曇り、やをら手を笠に加へて見渡すかぎり、四圍の山々、八ヶ嶽、鹽尻、和田、大門の峠など、五百重の夕雲につままれて、色鮮ならず。脚下に開ける鵜湖一面の水も、薄烟に掩はれて、さながら古鏡の娥影をうつさるが如く、魚局の翁が手を借らばやと思ふばかりなり。恣眺時をうつし後、下り坂にかゝれば前の如くにあらぬが、夕くれ過ぎて四方の景色たちまちほの暗く、路行く人には絶えて逢はず、いづこと知らず、煙の中に水の音すさまじく、時には名を知らぬ鳥の、けたましき聲して、深等の中に啼くが聞こゆるのみなるに、友なき旅の身には、心おのゝくまで怖ろしかりき。

三里ばかりにして田麿の開けしところに出で、人里近しと勇みて行くほどに、峡雲乍ち破

れて、月天心に高く、稻葉の風のそよ吹きて、露の珠、衣手さむくふりかゝるに、戀せぬ身には苦しとも思はず。蛙の聲かしましき田の面に、笠三つ四つ二つ、亂れて飛へるもをかしく、又何やらむ小さき虫の、飛び違ひさま、吾顔を撲つなどもあり。やがて村につき、二更の頃、さるべき家を尋ねて、宿をかりつ。

帳をつけて取らすれば、主つくく打守り、高遠の御方にておはさずやと問ふ。さなりと答へて、家君の御名など、のり聞かすれば、思ひ合することある様にて、むかし相識りし人の御子息なんめりなどいふ。心を置かぬ旅の宿のうれしきに、蚊帳など、みどり色匂ふばかりなるを取り出て、釣り呉れしも心地よし。唯だ餘に高くせし故、下の方すきて、夜半過ぐる頃夢さめて後、蚊の齧ちて、あたら短夜を不眠にすとしは、おぢましく又拙しといふの外なかりき。

次の日、朝どく起き、主にわかれ、急ぎゆく程に、わづかに四里の路なれば、午ひるとならぬに高遠の里につきぬ。先づ町のありさまを見めぐらすに、提封三萬石の古城下とて、よろづに事欠け、鄙の手ぶりの何となく淋しげなり。かねて聞き居りし父軌なにかしといふ翁

の家を訪ふ。いかめしき名の殿坂とて、城墟にのぼる道の中ほどあたりであり。折よく、家にありければ、喜びて我を迎へ、初見の禮を濟まし、やがて四方山の話にうつりぬ。聞けば、翁は家君の竹馬の友にして、又この家の隣なるは、家君の生れてより幾十年、住み居たまひし所にて、今は人改りたれど、その様のみは有りし昔にかはらぬよし。されば、何やらむなづかしく、まことの我家に歸へりつきし心地のせられしが、若し家君と共に來らましかばどこぞ思ひしか。

ひるげ畢りし後は、翁に誘はれて、城後の峰山寺といふに詣でぬ。こゝにはわが祖先たちの御墓、十に近きが立ちならび、七年の昔うせ玉ひし祖母なる人のもありけり。近きころ人に托して建てしめし石碑の面に、金字きらびやかに彫りつけしが、先づ目に入りしも嬉しく、枯れたる手向の花の、捧げし主は誰ならむ。祖母はわが地に落ちてより十二年の歲月、山よりも高く海よりも深き御惠をかけさせ玉ひし人にてねはせば、有りし昔のこといも思ひ出されて、まだ暮れぬ所の秋の風、はやも身にしむ心地ぞせられし。遠き國にて身まかれしかど、兼ねての言ひ置なればとて、茶毘のあとの遺骨のみは、齋らしてこゝにぞ埋

み參らせける。されば千里相隔りて、さるべき日にだも詣つることかなひ難く、わづかに此地なる相知れる人たちの時々跡とふのみなれば、掃除など兎角に行き届かず、八重葎しげれる秋の露深き夜ごとく、松風のかなしきを苔の下に聞き惜れ玉ひけむ、我身の罪は髪を擻くとも盡させぬなるべし。かくおもひ來れば、萬感蝟集して胸襟忽ち破る、如く、しばらく茫然として吾を失ひたる折しも、翁が、今日は盂蘭盆會の日といひ、みな人の墓に詣づる時なるに、いしくも折よく來玉ひしものかななどいはれけるを聞きつゝ、流石につきせぬ縁もありけるよと、深く我心に感じたりき。

これより方丈に呼びおとさひ、やがて位牌壇の前にぬかづく。この寺もむかしは七寶莊嚴、瑠璃金銀の雕飾をなし、花やかにきらびやかなりし由なるが、人の心の荒れまさりゆく濁世の惑亂は奈何ともなし難く、いつしかに門は頽れ、堂は破れ、緑蘿は延びて磨扉を鎖し、青苔は濕ふて壞壁に舗き、欄間の天人は蜘蛛の網にからめられ、天井の隙間は星の光をのぞき得べきままでになりはてしが、取りたつるわさもなく、形ばかりを留め置きたるもわびし。それさへあるに、住持の僧はこの頃、秋蠶飼ふとて、本堂の中いたく取り亂され桑の葉な

どあたり散りしきて、見る目もいぶせきまでなり。かゝること、國益などいひて得々たる人に見せなば兎に角、經よみ後世願ふ人の上には似合しからず、かくては佛にまで光なく、凡俗の程、よそ目にも見え渡りて、うとまじきことの限なりけり。

寺を辭し、還りて城址に向ふ。路すがら藩士の舊宅の跡を見るに、斷礎わづかに残れるもありて、すべて桑畑となり了りつ、畫戟草を坐し朱門灰に歸すといひけむもかくや。城址もいたく荒れ果て、濼は心なき夏草のしげみに埋み、武庫譙樓のありしところへ、今は尋ねべきよすがもなし。たゞ牙城の中のみは、公園となりて、昔をしのふ便もあり。そのあたりの樹々はかつて太守が後庭に眺を添へ、春は花、秋は紅葉、時につれ折にあひ、宴游の興を起し、詩歌管絃の備となりて、愛でられしものなるべきか、今は棄てられて、顧る人ありと見えす、蒙塵の手にもかいらざれば、おのがじい入方に生ひしげり、綠陰晝暗くして、日光を洩さぬまでなり。されど故人の遺愛の名残とおもへば、何どはなしに懐かしく、樹蔭によりそひて昔を語らむとせしものから、非情の草不、物いはねば、それも詮なく、甘棠の詩にことよせて微吟すれば、一陣吹き入る松の風、玉琴の音に似通ひて、

さながら相和する如く聞えけるに、哀れさいよまさりぬ。

城址西端の崖上に立ちて馳望すれば、四方の眺いとも潤く、城下に軒を並ぶる人家は臥蓋に似て、煙たなびく遠山小村、手に取るか如く見られたり。こゝにつらく地勢を按するに、今わか立てるところは兜山の半腹にして、藤澤川と三峯川とは遠く國境より流れ來り、この丘麓の左右をめぐりて自然の塹濠をなし、合注したる後には天龍川に入るとぞ。されば西方の一面は全く開豁にして、平野十餘里、遠く飯田に連なり、駒ヶ嶽より鎗ヶ嶽に打つゝきたる花岡岩脈の麓に達するまで、特に眼を遮るものとはあらず。城は天嶮に依りて、金湯の固、海内に比なく、兜山の名の信玄にゆかりあるは更にも言はず、支城の一角に勘助郭の名の残りしを見るも、築き成せし人は推せらるべし。されどそのかみは城邊老樹ごとく多く、白堊粉牆、見え分き難き程なりしが、今は皆伐り去られたりと聞こえ、むかしは雨ふらさるに何の虹ぞと眺めたりけむ名高かりし天女橋も、近くはいたく朽腐し、断えむばかりになりながら、奔湍の上に覺束なくも架け渡したり。あゝ舊物の存するもの、いくばくもあらず。まして見ぬ世のうらし、乾坤の戦代を追憶し來れば、更に丈夫の涙

に堪へざるものゝなくてやは。

東の方は、月藏山よりついできて、餘脈盡きむとするところ、五郎山といふを崛起せり。そのあたり、ところ／＼、林樾のしん／＼たる中に、社らしきものゝ見えたるをいぶかしみ、翁に問へば、仁科信盛以下の人々を分ちまつれるなりと答へらる。ねもひぞ出づるその昔、世は刈蒺とみたれつ、戦國割據を事とするときに方りて、天は權變奇譎なる絶代の名將を下して、わが信甲の地を管せしめつ。大菱の旗風の下には、靡かぬ草木とてもなく、關左無數の豪傑をして、胃を軍門に脱いて、馬前の土に跪かしめたるに、あはれ野田城外凍れる月影に、吹きすさぶ笛聲さむき夜、暗中の銃丸は、端なくも將星をして地に墜さしめ、驚倒の餘、輿中疾を護してかへり來るに至り、やがて青石一棺、萬古の恨を併せて湖底に沈みし後は、北越の俠將、箸を抛て好敵手を失ひし嘆ありしのみ。二嬖權を弄して、四郎の驕愚、爲すに足らず、鴟梟毒を逞うして豚犬謀なきを奈何ともし難かりき。頃は天正十年三月のはじめ、織田家の軍勢、四境より攻め入り、さながら潮の寄せたるが如く、城塞頻に守を失ひ、宗社の運、正に旦夕に逼りぬ。さすがにこの城のみは信玄自ら築きし

故、要衝の固容易に破るべからず。公子信忠、三萬餘騎に將として、専らこの一城に當り、十重廿重に圍をめぐらし、稻麻竹葦といふもかくや、翼なき身の逃れはてじと見えにける。かくて一面には使を遣り、言を巧にし、降を納れて城を出てむことを勧めたりしが、主將信盛、心鐵石の如くして、更に受けひかず、はては使の耳を切り、鼻をそぎて追ひかへせしかば、信忠大に怒をなし、二手に分れ、一軍をして迂行し、樵蘇の路をたづねて後の山に登らしめ、鳥銃を放たしめけるに、腹背敵を受けて、しばしも支えず、忽ち落城の非運に臨みぬ。この時、翁はふりかへり、後方を指して、そはかの山なるべしと聞えたまふ。さるほどに敵軍牙城の中にまでみだれ入り、城兵殘すくなく、討ち滅らされしかば、五郎信盛をはじめとし、春日河内、原隼人、今福安左衛門、諏訪莊右衛門など、宗徒の面々合せて十八人、大廣間にこもり、心しづかに最後の酒宴をなし、今日を限りと奮戦し、敵の總大將信忠が淺資金襴の母衣をかけて、屏にあがり梧桐の枝にとりつきて下知するを目がけて、七八度まで打てかゝる。折しも年は三十五六ばかりなる女の、緑の黒髪、白き練絹にて束ね、緋威の物の具を着下ろし、薙刀を提げ、我こそは諏訪莊右衛門の妻よと名のり



かけ、七八人めたく、ひまに薙き伏せしが、身に數處の痛手をうけしからは、女ながらも敵の手にはかいらじと、喉かき破て、そのまゝに斃れたるが有り。金閨の蛾眉、すでに命を鋒刃に殖しぬ。鬚眉の丈夫はいふにも及はず。中にも客將渡邊金大夫は、ひとり城外に出で、取り返してはかけ亂し、最後のあもひ出にどて快戦したりしが、やがて歳神坂の雪どろ消えぬる。そが金の短冊の馬印をさしたる武者振、いかに逞しかりけむ、敵の中にも感せぬものゝなかりしとや。かくて信盛以下、死者ぐるひに切りめぐりければ、さしもの織田勢、やゝ攻めあぐみて見えけるに、森武藏守長可はせむ様ありとて、雜兵あまた屋根に上して、板を引き破らせ、彈丸雨の如くに打こみたりければ、見る間に五七人に將某倒しに重ね合ひて倒れつ。信盛生年わづかに十九歳、今は是までなりとおもひ切りしものから遺恨やる方なく、床の上に推し上り、左の小脇に刀をつきたて、右の傍腹まで切り目長くかき破りて、中なる鴈摺み出し、屏障に擲ちやがてかつばと前に俯しぬ。あはれ、その剛猛のほどは、兄なる四郎のくらぶべきにあらず、ことに最後の勇ましきは、烏江の項羽にもまさりて、涼しきまでに潔く、傳へ聞けたに、人をして髮堅て冠を衝くのおもひあらじ

むるになむ。蒲城の士卒、一人の甲を解きしものなく、おもひくの死さまして、主と國とに殉しぬ。廳前にはまだ消えあぬ春の雪、あくまで戦血の腥きを染めて、凝りてし色や、あかねさす紫とはなれりける。

この戦のはてし後の始末いかにせしかと尋ぬるに、外城に討死せし武者どもの屍は、あたりの百姓ばら取り收めて、一つの塚を築きしよし、今は大方鋤かれて、何處とも知られ難きが、三峰川の對岸なる勝間の村のあたり、小石かさね合ひて、木立の疎なるところこそ、その跡ならめ。又城中に死せしものどもは、床の下に推し落し、僅に土を被らせし者の如く、かくて嘉永安政のころ、蠻舶下田に來航し、各藩競ふて武備を嚴にせし折のことかどよ、わか藩の有司硝石をつくらむとて、床下の土をかきあつめさせしに、人骨夥しく出てたり。こはそのかみ戦死せしものゝ遺骨なること問はでも知るければ、俵につめてあまたありけるを、仁科氏の菩提處とかや、城後なる桂泉寺といふに納めきとぞ。戦の劇しかりしは、これにても推せらるべし。又この頃のことなりけむ、藩の老儒中村ながしの建議により、別郭中に新城神の一祠を立て、信盛をいつきまつり、毎年三月三日、落城の當日

には、領内の力士とも相集りて技を奉納せしどか。翁か語り聞かせ玉ひしことは、世のつねの書どもには見えす、すべて古老か口づから傳へつぎし逸史の大略なりけり。物換り星移りて、こゝに三百秋。今に兜城山下破屋の裡、北風さむく吹雪窓を打つ夜ごとく、折りくずべし櫓の火に大藥罐の茶をたぎらし、貯への山栗を熱灰にくべて、團樂の興たのしげなる爐邊には、昔知り顔なる父老の子弟を誠しめの爲にとて、黄なる髯を拂ひつゝ、眉を揚げて、長しへに五郎の勇を説くがあるぞとよ。とみれば殘陽西に斜ならむとして、客衣をひるかへす秋風いとも冷に、一片蒼涼たり江山の氣、英雄未死の魂、今に留りてまよふか爲にあらすやと疑はれぬ。

元和偃武の後、はしめて封をこの地に受けしもの保科氏あり、次は鳥居氏、次はわれ等が舊主の内藤氏なり。恩風惠雨殆んど二百年、世は聖代となりぬるも、遺民の舊徳を懐ふもの今に少からず、公園の西北隅には清からなる小祠を設けて、藩祖を祭り。そが楯間にかけたる額どもの中に、戊辰の役、越後口に派出したりし藩士の行列のさま寫したるがあり、わが見さりし伯父にておはせし人も加はりてあるよし、翁の語られけるに、仰觀しばし

時あり、感亦たすぐれて深かり。折しも西邊駒嶽につゞける山々、黒雲おほひかゝり、紫電一閃眼を射るよと見えしが、鳴る神おそろしく天の原ふみ蘇かし、降りそぐ雨はさながら車軸をながすが如く、あはやこの世もくつれむばかりなるに、社殿にかけ上りて晴るゝを遅しと待つ中、何者の靈怪か、この變を起したるなと咄けば、翁はこれが世にもおそろしき怪雲の一種たる信濃太郎なりなど語らる。雨は須臾にして歇み、碧落乍ち洗はれしがごとく、やがて彩虹一條東天に高かりき。

雨あがりのぬかり道、ふみひろひつゝ、路を教えられ、翁と別れてさるべき親戚を訪ひしか、今は家を移して、西信の地にあるよし。又こゝに併せて他の尋ねべき方のこと、かげながら問ひ試みしに、多くは流亡して、之くところさへ知らず、あるは全く死に絶えしもあり。げにや家君のこゝを出て玉ひしは、二十餘年の前にして、その後は年々一兩回の消息にて彼我の有さまおぼつかなく推するのみなれば、今まのあたり來り見て、聞きしに違ふことの多かるも宜なりけり。されば忽ち望を失ひて、故郷の想をなさず、しばしは依然としてみぎの國にさすらふ心のみまさりき。さてしもあるべきにあらざれば、辭して出で、町の

さまなど見めぐり、夕くれ近きころ、翁の家にかへりつきぬ。

とも吾祖にておはせし人は、武田流の韜鈴を以て藩祿を食み、庭のちしへ子いとも多く、聲望一郷に高く、あまねく人に崇められ玉ひしよしにて、郷黨の中には、吾事をさへ傳聞して知り居るものあり。翁の家を訪ひ來し人など、ねもころに禮をなし、滞在もし玉はい必ずよ一日雞黍の約をたづねて、松下に盤桓せむかなど聞えけるに、廉吏の兒孫、未だ困厄を嗟するに及ばず、父祖の餘澤はわか身の上にありけるよと、流石に嬉しくこそ覺えたりしか。

夜になれば、湯にゆく。坂の下にあり、兜湯と名つく。こはいつの折なりけむ、信玄か重創を癒せしことある靈泉にして、その後長く湮没したりしを、この頃、また見出せしとぞいふなる。されば御身の父はまだ知らぬなるべしなど、翁は語らる。この夜翁の家に泊り、次の朝辭して出づ。もはや、この地に訪ふべき程の人もあらず、歸期方に迫りて濡滞すべくもあらねば、これより吾母の郷里なる松本の方に向ひぬ。

美なるかな、兜城の地。山あり樵すべく、水あり釣すべし、且つや逸史のつながれたる遺

蹟は、吟情を養ふに足らずといはじ。顧みればわが年正に二十、身は浮草の根を絶えて、飄浪しばらくも止まず、何處か果して心の宿たるべき。さてもこの境に入りしは今が初といひながら、すでに家君が桑梓の地たるからは、今より以往、長しへにまことのわが故郷たるべし。あゝ故郷、故郷は游子が胸奥に張りし難妙なる琴線にして、觸るゝときは必ず無限の妙音を發するにあらずや。むかし劉琨、胡騎に晋陽に圍まれき。琨、夜に乗じて胡笳を軍中に奏せしに、賊みな歔歔流涕して、油然懷土の情あり。曉に向て復た吹きしに、さしもの賊もつひに圍を解いて去りきといへり。泗水の亭長、すでに天下を一統して、威海内に加はりし時に方り、何が故に豊沛の父老と酒を置て舊故を語りし。故郷の前には、英雄なく、兒女なく、功名なく、富貴なし、たい純潔の氣の吹き満づるあるのみ。われは萬戸侯、卿相の位の貴きを思はざるにあらねど、死して廟に祀らるゝ郷先生の猶ほ榮となすべきを知るなり。吾が今期するところは他に非ず、彼の船山かいへりけむ四十にして山谷に退かむ日あらば、必ずよ家を移してこゝに歸休し、再び二頃の田を置き、晴耕雨讀、いさゝか郷黨の子弟に教えつゝ、心しづかにすみなせる庵をめぐり、方一町をかざりて園

池を開き、花紅葉つきくしく植ゑこみ、東籬菊を採る日、南山のけしきを登しつゝあるを得む。人生數奇多く、志業蹉跎たり易し。たい吾はこの願を千早ふる神にかけて、今よりかくあれかしと祈らむのみ。

かゝるはかなきことども思ひつゝけ、行々なつかしき郷土に離れつゝ、やがて天龍河上に來りぬ。しばしの別ぞと心には期せしものから、さすがに名残のれしまれて、顧みかちに瞻望すれば、兜山の烟樹、暎雲うすく蔽ひかゝりつ。さながら愁を疊むと見たる、われながら、ねもひなしのいかなれば、かくは切なりしよ。

(二十七年八月)



残の雪道

戀しき時の、おもひ出にせよとや、うたて露、けきわが袖に、にほひばかりを留めおきて、梅の花、しづ心なく、階下の苔の土に散りしきつ。けしきだつ春は、いよ／＼れたやかに、暖くなりゆくまに／＼、いにし日の恐るべき寒さの、かげをもとめず。風は新柳の髪を梳り、色はまされる桃櫻の、笑の口を開かむとするに、はかなき心の駒も、今はのどかにゆるびて、萬のことの、手につき兼ねしぞ是非もなき。紫陌紅塵、おもてを拂うて來るといひけむ、都門の賑は、まだ見ぬさきよりうとまれければ、花なき里に、すみやならへる歸雁をまねびて、残の雪道、風流の少しはさむくとも、大に俗を抜きたる旅路をたどらむと、心をさだめつ。語り合ひし友の名は、後にいたりて追々どあらはれつべければ、一一こゝに擧げずもありなむ。旅にかきすての耻と痴氣は、彌次喜多のそれほどまでにはやられもせねど、服装は一様の烏打帽に日本服、尻かるくかいつまんで、草鞋の紐をむすび、勢よく立ち出でしはそれの歳三月三十日、朝のことなりき。

上野發の二番汽車に乗るつもりにて、かけり行くや別れ／＼に、従て停車場につきし時刻に、遅速の差あり、大方は打揃ひたるものから、足らぬは一人、歳ひねて氣も長く、雅號の下に老人の二字を署して見たげなる珠峯といへる先生にして、三番目に振りし鈴の聲に、うたてや、入口の扉、鎖されしころ、悠々如として杖を曳いて來る影の、初めて見えてける。今夫れ、汽車に乗り遅れて、失望し落膽するは、初心の野暮ぞかし。旅には、人も許せし剛のものなるわれには、かゝること夢さらく／＼なけれど、かく他の連類を待つが爲に、颯輪の轟走するを見送りつゝ、乗り得ずなりしは、遺憾ならずといはず。されど、年輩はむしろ履を捧げし孺子のほどなるわれ等、黄石公ともいはるゝたふとき人に對し、あべこべに、いきま／＼きすべもなく、己を枉げて、人に従ふも、觀じ來れば、この世の習として、いとも果敢なき次第なりける。

待つとしなれば、長き二時間を、欠伸の中に送り、やうやく三番汽車に乗り、十一時や、すぎし頃、古河につきて、車を下り、むづかゆき蹠脚を踏み出し、新にしきし小砂利のいまく／＼しきまでなるを、面白づくに、右に左に、蹴かへして、歩を早めつ。劈頭第一に、

探險せむとするは、熊澤蕃山の墓なりけり。停車場を東南に去ること、十町ばかり、一叢の茂林あり。たちならぶ人家數軒、午炊の烟の微に颯るところ、路は人を導いて、一廢寺の裡に入らしむ。これを、正源山能延寺となす。かつて回祿の災にかゝり、舊觀に復するを得ず。今見るところ、古堂燼傾き、壞壁草に封し、いぶせてさ／＼やかなるさまは馬小家に劣りて、寺としも覺えず。皺がれし老僧の經よむ聲を聞いて、僅にそれと推せられしのみ。堂後の小徑をたづね、まだ萌えぬ枯草に、春の霜を踏みつゝ、行けば、主を誰とし、るしの文字も滅したる、古碑の顛伏して荆棘に裡に横はるを見る。これが人生死後の形相かとおもへば、今更ながしそいろに悲しく、扱てわが尋ぬるは、何れにやと案じわづらふ中に、村童の馳せ來り、それと推せしにや、先に立ちて、命せざるに案内し、これ熊澤さまの御墓よと、教えくれたるは、大手柄なりき。兩基の石、相並んで高さ各三尺、左なるは而に刻して、熊澤息遊軒伯繼之墓といひ、右なるは息遊軒妻矢部氏之墓といふのみ。どもに、先生か豫めかき置きたりし、自筆の蹟なりとか。嗟呼、先生、落魄の家に生れ、颯軻の中に人となり、つひに明主の知遇を得て、滿腹の經綸、施すところ少からず、治國

濟民の功、もとより當代に比なかりき。然れども、刀の鋭に過ぐるものは、折れ易く、才の俊に過ぐるものは、容れられず。高明の室、鬼の瞰る所となり、鸞鳳泊しはらく年あり、後又た言を幕府に奉り、罪を獲て、この古河の地に幽せられ、居ること五年、つひに空しくなりけるとや。たゞ、達人の氣象は、自ら坦々たり。難に遇うて驚かず、急に際して變せず、天を怨みず、人を尤めず、優遊以て卒ふ。その光風霽月の襟懷、ながく欽慕するに堪へたり。げにや「雲のかゝるは月のため、風のちらすは花のため、雲と風とのありてこそ、月と花とはたふどけれ」。われは、この一首の歌を微吟して、嶄然俊異なりけむ彼が風丰の俦をしのび、稽拜や久うして立ち去りぬ。

かへりて、古河の間をすぎて、北に向ふ。異形の男の六人連を、井底の痴蛙に似たる匹夫匹婦か、何と評し合へるかど、それとなく、耳聳つれば、中にあれ見玉へ、擲擧の手つだひに、出でし壯士たちが、引き上ぐる姿のをかしきをなどいふがあり。友と相顧み、一笑して打ちすぎぬ。

これより、佐野にいたる。四里のほど、路はつねに渡良瀬川に沿うて、塘堤の上にある。

春なほ淺き空の色、さむげに曇り、四顧野影蒼茫として、見渡すかぎり、目もはるかに、開けたる枯田の中に、處々濃烟のうづまきて起るを見る。午炊かどちもへど、あらず。野焼かどちもへど、又たあらず。之を農夫に問へば、前年洪水ありて、稻禾實るに及ばずして枯死しけるに、今は枯株を抜きすて、焼きて田を清めむとするなりとこたへぬ。

かくて日もたそがれに近き頃、佐野に入り、長き町を北に通るぬけ、犬伏にいたり、小店に憩ひ、冷酒二三碗、勇を買ひたる後、唐澤の山へとむかふ。そも唐澤の山たるや、關東平原の北につくるところにあり。もとより、一堆の土壤、隆起するに過ぎざれども、前面に峰巒の遮蔽するものなければ、眺観頗る曠濶。ねもふ、五六年前、一たび杖履を着けしことあり、時維れ涼秋、天高くして氣澄み、房總を雲外に望み、豆相を天末に瞻、駿嶽南に揖し、常峯東に拱し、武甲信磐毛野の諸山、羅列して、嬌髻摘むべく、烟霞鮮明なりしを。この行、再び斯觀をなさむと欲しければ、かくは日暮れて、道遠きをもいとせず、富士村を経て、やがて阪路にかゝりしなりき。初は日の中に山を下り、葛生に至るさだめなりしが、發程の際、數時間を後れたりしを今更せむなけれど、互にうらめしくて、兎角に

語らひ合ふことをかきさ。せめては、山頂までもとあもふ心のみは、せかれて、暮雲山を置むる頃、月くらき夜の何となく、凄き物どもせで、登りにのぼりぬ。

いたはしきは、巖南とて旅には初心の男の中にかどり、情なきほどに、弱りはて、かどくしき片石に躓きつゝ、足ひき掬りながら、流石は女ならぬ證據の、負けし魂はあるものか、あくれじと力むるさまの、痛ましきが、やがて絶頂に達して、祠廟の石階の上に慙ひし折に、おしる夜にては、音に聞きし名たる眺觀もなしえられぬものを、山上の亭に宿をかりなむといふ。有體にへたばりたりといふも、知り合ひ同士の間に、殊に耻にもなるまじきを、口先のみは減らぬものと、われはひそかに心にかしく覺えしが、互に自ら許せしお人よしの、弱きをいぢめて、興がるごとき、罪ふかきものにしあらねば、その言に任しつ。旗亭の三樹といへるに頼み入りて、宿をぞ借りぬる。一浴、面上の塵をながし畢り、酒し飯したる後、春の夜の床を斜にしきのへて、寐物語りの自ら更けてゆけば、清寒身にしみて、雲は枕函をめぐる山上の一夜、吟魂飄搖として、仙夢うたい白かりき。

三十一日、曉來天くもりて、嵐氣肌にさむく、欄に倚り盡すも、さしたる眺を領し得ざり

し口惜さに、いそぎ結束して起ち、山を西北に下り、一里にして、葛生に出づ。陰雲開駁して、空うららかに晴れわたり、誰が柴の戸の、殘梅の香を吹き送り、のどかに微和を扇く春風、いと心地よし。このあたりの山丘は、盡く石灰岩より成り、到るところ、之を細碎焼化して、石灰を製すよし。佐野川に沿うて、西北に向ひ、二里にして、羽鶴峠といふを越え、つひに出流に達す。村内各所に、例の石灰岩の洞窟、散在し、その最も大なるものは、安蘇山つゝきの崖岸、満願寺の域内にあるものを推す。寺は眞言の檀林、醍醐なる無量壽院の末寺にして、實に坂東順禮第十七番の靈場なりとか。名たる鉅觀のすくれたるがあるものから、その僻遠にあるが爲か、巡賽の人の、多からぬは、遺憾のことといふべし。

洞窟の大なるもの、三所に存し、之を見めぐるに、先づ中央のよりはじむ。名は觀音の窟とや、長梯を躡て、登りつきし懸崖の中腹を開鑿せし岩窟は、一大房をなし、内に大黒天と聖道上人の石像を安置す。燭を點して窟中に入れば、虛朗玲瓏、石鍾乳の巨柱千萬株、或は森然として上より垂れ、或は轟然として下より堅立す。莊嚴無比、たとふるに辭なし。洞の

中央に右偏し、石柱の最も巨大にして、上は殺げて下は豊に、開いてから見れば、なる程、人のうづくまれるやうなるを、觀世音のうしろ姿といひ、案内者は、ことばをそへて、「八葉の淨蓮華の上に立ち、西方に向て御説法の容態」といふ。この洞を出て、更に上ること半町ばかり、大日如來の窟あり。窟は奥にて、二條に岐れ、一は深さ廿五間、一は遠く北部の山麓に穿ち入りて、遂に測るべからず。口まめなる案内者は、「これより先に、百八の地獄ありと申せど、奥ふかくて、拜ません」と断はる。すでに二洞を見了り、更に大師の窟をたづぬ。洞口頗る窄く、身つぼめて僅に入るばかり、この洞は、最も深くして、ときに匍匐してからくもすりぬける處などあり。洞中いたるところに、底鍾の下垂するあり、呼んで「天蓋瓔珞の懸りたる容態」といふ。あるは、泉流冷々として、石面を濕し、鍾乳わづかに延びて、指頭の如く、而かも簇生攢集したるを、「雨夜に星の容態」とは名づけたり。その他、石灰の洞壁に沈澱凝成しとり／＼に磊落奇偉の姿をなし、踞して虎の如く、獅子の如く、蟠りて龍の如く、蛇の如く、立て人の如く、佛の如きもの、うるさきまでに、一々こどづけの異稱あり、人をして噴飯せしむるものさへ、少からず。

おもふに、中世浮屠氏の狡黠なるもの、相率ひて名山絶壑に入り、いたる處、祠を立て、道をひらき、概ね以て冥府地獄になぞらへ、一石一水、似つかはしくいまはしき名をつけて、怪をのみこれ聞かむとする、はかなき凡夫の心に取り入りつ。迷信を去る能はざる、低の蚩々たる者の、欺かれしは、今更臍に茶を沸かすべき次第にこそあれ。こゝに、例の巖南と呼べる男、つねよりかゝる筋には、厭しむかぬる性として、この洞窟を破壊したり、今の世にも少からぬ愚民の迷信を拂ひ盡さざるかぎりには、文明も皮相のみにて、未だし、など、氣焔萬丈、天を薫して、いきまきつゝ、哮り出てし勢のみは凄しかりしが、がやて洞口に引かゝり、進退こゝに谷まり、その出づるや、面上には五色主なくなりて、青き息を吐きつゝ、よろ／＼と歩み來りしは、何たる氣の毒の態なりしか。まことに、百八の地獄、この奥に在りと申し、こと詐ならず、亡者の迷ひ出でしにやと、怪しまれ、口ほどになき弱蟲の、本性をあらはし、むごや、器量の一段を下げて、がんなん汝を玉にすと、中に口惡の友にぞ、洒落られてける。

三洞の外に、なほ一つ、やゝ大なる胎内くゞりといふがあり。すべて、巡覽して、時を費



すこと二時間ばかり、一言以て之を蔽ふへば、一度は必ず見て置くべきほどのものなり。われ嘗て秩父に遊び、石龍山橋立寺の岩窟を見しことあり。今兩者を比較せむに、宏大てふ一點に於ては、これ遂に彼に及ばず、しかも、怪特靈異の所は、負に過ぎたりといはまほしく、寺域の内の景致瀟洒にして、苔むす岩にせかるゝ谷川の、曉さむく雲を流し來るなどは、彼に見ぬところなり。案するに、補陀落山建立記には、常國伊豆留岩窟、有千手觀音靈像、是人皇第三帝安寧天皇御宇、天人降作之、……としるせり。されど、佛法渡來の前に、たどひ自然天工の佛像ありとも、誰かこれをしも、佛像とは知らむ。そはとまれかくまれ、聖道上人の父母、この岩窟は參籠して、上人をまうけ、上人も亦たこゝに籠り居て、座禪せしことありといへば、古くより開けしものとは、知られたり。なほ、この山のふもと、三十町ばかり東に、鍋山安養寺とて、上人が初に住みし所もありとか。日、亭午に及て、寺を辭し、門前の茅店にこひ、おのゝ茶碗酒を引かけ、長閑けき春の日の光を背にうけて、北に向へる山路にかゝり、人に遇はぬを幸なる放歌高吟の、狂態をかしく、路もせに生ひし名もやさしき姫小松の片枝を、打ちふるふ杖の先に、薙ぎ倒し

などする勢あらく、峠、いつしかに越えをはり、忽ち一綫の大道を得て、やゝ東北の方に折れ、三里にして、栗野といふを過ぎつ。なほ、程をつゞけてたどりゆくに、日は漸く西の山影にちらつき、北より吹き捲く風は、日光あろしとかや、夕ぐれ寒く、野は荒れて、疲れし脚をいそがしつ。三人づゝ、二組に分れ、前後して、鹿沼の町に入り、逆旅に草鞋の紐をときしは、夜、すでに初更の頃なりき。

これも、育は高さ家の人にあらねど、旅なれぬは世に情なきものにて、一日十里に足らぬ今日の行程を、豆の豊年の足重くなりて、行のむづかしかりしを怒て訴ふのもの、過半数に及び、旅を畢るまでは、萬事黙して、われに聽かむ筈の、條約をも、今更改正とまでなりかゝりしを、言ひ解き、なぐさむる、われの骨折一方ならず。凡そ相棒の弱りはてしは、氣の毒なれども、見る目に齒痒く、足手まどひの埒明かず、こたひのことは、われながら、千慮の一失、連のなきこそ旅はよけれど、事新らしくも、感じける。

四月一日、陰霽定まらず、汽車に乗じて、日光に向ひ、午前八時といふに、着きつ。旅亭に小憩し、案内者をやどひて、又もや、靈廟を見物しぬ、われこの地にもせしこと、す

でに二回、その初こそ、丹青の麗、彫飾の妙、たちならぶ二十三字の殿閣、金碧燦爛、畫ける如きに眩し、心も言葉も及ばれずと感じ、日光を観ざれば、世に結構の語をなす勿れといふ、俗諺をも宜なりとなづきたれ。再遊して目慣るれば、またなかなか驚かさず。類なしとはいふものから、やゝ俗に近くして、殆ど雅ならざる所もあり、細緻巧緻は盡すとも、之を以てわが島帝國美術の精華を集めたるものとして、多少物足らぬおもひのなからずやは。若し夫れ跌宕幽奥にして崇高沈靜なる大美術の神韻にいたりては遂に之を日光に求むべからず、否、日本にこれなし。試におもへ、ないの河畔に聳ゆといふびらみつどの如何を。巍然として山よりも高く、雲霄に湧き出て、炎風烈日を嘲笑しつゝあり。萬里の長城は如何、朔北の風に雪に、依然儼存し、どこしへに始皇か雄圖の名残を留むるにあらずや。その他、羅馬のばちかの如き、雅典のばるせのんの如き、之を概評せば、大陸、否、特に歐西のすぐれたる美術は、渾身の精力の發現として、多くは自然的なるに反し、日本の美術は、わづかに、手先の技工にして、全く人工的なり。しかも、是れ風土の影響を受けたる、人心好尚の相反する結果に外ならず、今更詮なきものから、今後

の藝術家に望むところは、どこまでも、彼の長を採て、我の短を補ふの一事にこそあれ。凡そ、日光殿閣の美、萬里觀光の客の眼をひくものは、その價值のすぐれたるに非ずして、西土に求め難きがためならむのみ。

かくは心の底に考へ浮びしものから、譯の分らぬものに、頭から食てかゝり、けなしつけむも、大人氣なく、褒めぬも無愛相の極ならむと、おもふ心はおなじくてや、同勢中の兩三人、期せずして、聲をそろへ、なかく立派なものよと、囁し立つれば、案内者のすこしく怒氣をふくみて、立派どころか、こゝを目の極樂と知らずやと、尖がりたるは、そゝろにおそろしく、みな人、口をつぼめて、又いふよしもなかりける。この案内者といへるは五十あまりの男の、頭は大方ならず、禿げたるが、わづかに残れる一撮の髪をしきならべ、どこどなく奇物らしく、一癖あるべき面魂、凡庸ならじと見えけるが、指示説明にはあらで、詰問面責の口調を以て、むかひ來りしは、いと面憎かり。陽明門の魔よけの柱といふを指して、この柱、他と如何に異りて見ゆるにやなど、いひしは、今少し、喧嘩づきなる同勢ならむには、われ先づ杖の先に、かの禿頭、したゝかに、くらはすべき筈なりし

か。たし、翻ておもひめぐらせば、勿論、拜觀料さへ納めず、賽錢は三文もふりまかず、蠟燭も誰か一人、總代として上げなば濟みなむなぞいふ我輩なれば、萬事に守舊主義と見えたる彼の、腹の蟲の居どころ、やゝ變りて、大きくいへば、滿腔の不平、鬱勃として抑へ難きものありたればならむか。

日光を辭して、中禪寺にむかひ、蓮花寺より折れて、ゆくこと半里、例の裏見の瀑下に出づ。姿眺ししばらく時あり、こゝを去て、雪、なほ消えあへぬ山路のかどくしきを攀ぢ登り、つひに劍の峯にいたる。珠峯老人、足の關節をいためて、しばく後れたるから、そこゝに、待ち合して、行くほどに、道はかどらで、影は谷に寒き入日、乍ちくらく、山嵐暮色を曳いて、低迷するころ、華嚴の瀑の上なる懸崖にいたり、凍りし雪の、かたきを踏み碎きつゝ、少しく崖を降りて觀る。

裏見は奇峭、華嚴は雄偉とは、ある人の評語なりとか。裏見や奇は奇に違なきも、壯大ならず。般若、方等、阿含の如きは、幽雅の趣、愛すべきも、たゞ瀑とばかりにて、さまで賞すべきにあらず。龍頭、湯湖の兩瀑の如きは、爰にこれ等諸瀑の上にあるが如く覺ゆれ

ど、こたびは、探らねば、論せず。こゝに、華嚴は、實に日光山七十二瀑の、冠冕として、世に稱せらるゝもの、普通にして眺望するものは、壑を隔てたる茶亭の上に於てし、なほ少しく下れば、今わが居る懸崖の半腹、瀑布の中央と相對するところに、いたりて、止むべきのみ。若し少しく險を冒すを敢てせば、瀑上の溪流に順ひ、瀑右の斷壁の頂に出で、それより下りて、深底にいたるべし。

夫れ唯だかくの如くして、眺觀の便ならざるは、争ふべからず。又た深底に下りつきたりとも、一道の懸泉、滾落する眺はあり、然れども其幅の小なるを如何ともするなく、其の右壁にかゝりて飄蕩する數十條の銀絲は、妍麗の趣を添ふるも、豪壯は缺きたり。加ふるに、巖壁の石質、きたなき赭色にして、多少風致を害ふの感あり。之をわか曾て實視せし那智に比して、劣る所あるべきを、今にして悟りぬ。思ひ起すは、去歲盛夏の日、那智山を下り、觀音廟に詣でし後、喬樹枝を交ゆる谷底に下り、萬雷の響すさまじきに驚きて、馳せ至れば、三日の大雨に漲りし水の、かけ下るす珠簾千尺、濃霧白く長杉の梢に凝り、浩々たる天風、晴空の飛雪を捲きて、吟衣に濺ぎ來りしことなりける。瀑は、深黒色の絶

壁にかゝり、照映頗る佳、眺觀所を得たるも、なほ且つ仰がずんば、瀑頂を見る能はず、眞個、銀漢の水を傾けし觀あり。その石壁は高さ百八間にして、瀑の幅は八間とや。之を華嚴に比して、過ぐるところあるは、言を待たず。要するに、美の一點に於ては、華嚴、むしろ上にあるべしと雖も、壯と大とを兼有するにいたりては、那智や、つひに、その匹儔を見ず。近ごろ秋田縣内に、那智以上の大瀑を發見したりきといひ、又た石狩河源の地に雄大無比のものありと傳ふれど、いづれも未だ判然せざることにしあれば、今日のところ、那智は眞に「天下第一」の稱を專にするを得べく、華嚴は實に之れに次ぐものとして、不可なきが如し。

風、いよ／＼吹きすさびて、寒は身を刺す如く、つみ残りし雪は、脚の指尖を凍らすやうなるに、ひたすらに、いそぎて、日くれのほど、中禪寺の湖亭にとまりぬ。前游の日は、黄昏雨歇み、嵐氣未だ霽れず、烟霧四合の裡、湖光山影、全く蒼莽の中に收り、乾坤たい夢の如くして、一氣濛々、湖面波死して、全く聲なく、時しも樓上に誰か吹きすさぶらむ、洞簫の寂寥を破りて、ひいき度り、水龍をして、飛舞せしめむとしたりしに、今宵は、寒風

雨を挟んで、戸扇を打ち、湖面の水、ひたすらに騒ぎて、夜もすがら静まらず、睡中身の舟中にあるを疑ふばかり、いくたび、旅寐の夢を驚かせしぞ。

二日、朝とく起き、欄に倚りてながむるに、さしも烈しかりし夜べの風雨は、名残なく霽れわたり、朝日はなやかに、湖を圍みたる山の一端にさしのぼりつ。微茫たる水けぶりの、やう／＼湖面に溶けて消えゆけば、對岸の山、ひたすらに近きを覺え、目を西の方に向つせば名にしおふ白根の山、皎々たる雪冕をいたゞきつるが、日光を受けて、燦然としてか、いやき、深碧一泓、鑑を開きたる湖水の中心に、その影を倒したる、更に一幅の精神を増し、朝なぎの風、ゆるやかに吹き來りて、徐に鏡面を摩掃すれば、忽ち搖蕩して碎けむとするもの、如し、折しも歌の瀆のあたりより漕ぎ出でし小舟の、橋頭半幅の紅を染めて、上野島の方へと向ひけるが、やがて帆影小さく、杳渺たる殘煙の中に見えずなりぬ。

かゝる興あるながめせし間に、朝げの膳は据へられければ、いさめしませと呼ばる下婢の聲に、おどろかされて、われは折角案じ出でたる詩句をも忘れつ。是非なく、人なみに膳につき、やがて箸を擲て起ちぬ。湯本はこゝより湖岸を西へ三里、雪なほ深しと聞きけれ

ば、同行の友の難色をなせるも無理ならず。われも再遊のさまで熱心すべき筋にもあらねば、遂に山を下りて、摺原に赴くことに決し、程なく結束して立ち出づ。舊路を劍の峯までもどりて、珠峯老人が足を痛めきといふところに至り、憇ふこと多時にして、いたく後れし老人を待ち合せつ。鬚いかめしき三十男のへたばりたる姿、振袖の小娘にはいたく劣りたるに、をかしさは扱て置いて、今は同情の念に絶えず。されど老人か自ら奮勵して、たどひ、この足折るゝとも、是非摺原まではたどり行かむといふに對しては、みな人少しく畏敬の心を起しつゝ、中にはそれといはねど、やゝ危ぶむ色をなせるものありき。

馬がへしよりは、昨日と異なる本道を取り、やがて足尾より來れる鐵軌を布きし路と合し、大谷川の早瀬たぎるゝ音を藪陰に聞きつゝ、晴れし空の又もや心なく曇り來て、風は男體山の絶頂より吹きおろし、杖うちふるふ手の先もかぢかめば、征衣の薄きをかこつばかり。是が貧書生の旅の定りなるを知らぬほどの愚にもあらぬ人たちなれば、汗出るまで駈けるべしとて、今は老人の氣の毒にも、又もや、いたく後れしをさへ忘れて、ひたすら

にいそぎつ。坦々たる大道を走せて、程なく含滿の潭上へと來りぬ。

含滿は、日光の一勝區たり。大谷川の水、こゝに來りて、嶮巖たる尖石に束ねられ、奔騰飛瀉の勢、つひに駐むべからず。巨靈の咆哮するところ、層巖を裂開し、破壊して、さながら缺甕の如くならしめ、水その間に穿ち入りて、回折渦旋す。その壯快なる、之を形容せむにも辭なく、見るものをして、覺えず慄然たらしむ。巖上に群れて踞坐し、俯して潭中を見つゝ、同行の一人、忽ち口を開いていふやう、世に自殺を爲すものあり、その可と不可とは今いはず、苟くも自殺せむとする者、この浮世を以て苦惱となし、之を擺脫せむが爲めにあらずや。然るを又た死の便法を講し、もるひねならば安かるべく、鴉片ならば眠るが如くに極めて樂なるべしなどいふ、そも亦た何等の卑劣ぞ。すでに生の志なくして死に就き、大安樂境に至らむとするもの、刹那の小苦痛は、その旅資と知らずや。死するに、何ぞ方を講し、處を撰ぶを須るむや。この含滿の潭に臨み、一躍して盤渦の中に巻きこまれ、身を粉塵する如き、亦た頗る可なりといへば、又た一人、然り死せむとするものは、死をして高潔神聖ならしめよ。宇宙の大動力たる水火を啣りて死する如き眞に壯快の

こといふべし。但しこの含満の潭の如き、未は又た淺流となるなれば、死屍何ぞ永く潭中にあるを得む、腐爛せる醜骸をして、再び人の目に觸れしむる如きは、未だ到れる者と爲すを得ず。水を踏まむものは、宜しく大海に於てすべく、海天霧合し、星月影暗き夜、洋中を航する舟にありて、甲板人なき時、身を躍らす如きは、大に可となすべし。さはいへ、又た魚腹を肥し、その跡をして清淨ならしむる能はず、その魚の網せられて、腹を割かるゝとき、誰のとも知らぬ、毛髮齒牙の出でたりなぞいふ如きは、死後なほ醜を遺すものに非ずや。聞くならく、希臘の大哲はるめにすはべすびあすの噴火口に臨み、紫黑色の烟霧、柱をなして天を撃ぐるを一睨し、耳に地下の霹靂を聞きつゝ、微笑して坑底に身を投し終りぬと。死、かくの如くして以て加ふる蔑からむのみ、など息まきつゝいひけるに、又た一人、善く之を言ふもの、善く行ひたる例を聞かず、卿等のごときはなかくに案じらるゝ筋にして、病の暮にしがみつゝ、唸りつゝ息絶えたりなぞいふものならずむは幸のみ、など互にのゝしり合ひしは、すぐれてをかしく、潭底の水鬼、之を聞いて、何と感ぜしか、これ問うて見たかりき。

亭午すこし前、つひに日光にかへり、更に路を西北に取りて、霧降の瀑に向ひ、泥滑の山路を、すゝみゆけば、やがて廣野めきしところに出で、東方眼界頗る曠濶、帯の如くなれる鬼怒川の流を隔て、はるかに磐巖二州の連山を望む。須臾にして、走翠浮嵐、壑中より曳いて低迷し、つひに一景なきに至り、又た歩を早め、泉聲山谷に震うて、雷の如く聞れるを聞きつゝ、われは失せかゝりし昔時の記憶を喚起して、馳せいたれば、忽ちさゝやかなる茶亭を得、壑を隔て前面に一大瀑のかゝれるを認めたり。

そも霧降は、華嚴湯湖につぎての大瀑にして、高さは三十丈とかや、上下の二段に別れて、相距ること數百歩、この茶亭のあたりより望めば、ともに全豹をあらはせども、若し一たび險崖を下りて瀑底に就けば、やがて下瀑のみ見えて、上瀑は全く仰がれぬなり。前遊の節は、險を冒して上瀑の底にまでも至りしが、今日は前程のいそがるため、えゆかず。同行の友の、せめては下瀑の底までゆかむといふに、われ先つ前導して、茶亭の後なる壑に下る道、危険なるが上に、曲折幾十盤、石は礫礫、泥は滑澁なるに、行き悩む嘆息の聲の、後方に聞ゆるを叱責しつゝ、つひに瀑下の小亭を得たり。瀑はこゝにて見れば、又た雄

偉ならず、水流岩壁にひらばりて、徐に流れ落つる故、さして心魂を蕩揺する底の喧騒の聲をも聞かず。唯だ残雪なほ潤邊に堆く、山嵐吹きめぐりて、濛々たる大霧を蒸し出すさまのみは、何となく物凄く、山魘木魅がいぶきを吐いて、人を惑はす類かともおもはれ、扱て高寒あまりに堪へがたかりしかば、枯木を折りて山積し、火を焚して暖を取り、晝の用意の握飯を頬ばりつ。

瀑下に觀を恣にすること一時間、再び崖を上り、彼の茶店に老婆の居たりしを幸に、路、仔細に問ひたし、やがて、道右の細徑に分け入りけるに、そぼふる雨の燒野のけしき、いとも淋しく、春なほ寒き頃なれば、妻呼ぶ雉子の聲も聞かず、わづかに舌澁りし藪鶯の、征原の中に鳴くがありしのみ。四顧蕭條の中に、肝心なる分岐の所は、何處なりしか、知らず打ち過ぎ、口を酸くせし老婆の言葉も、さしたる効果なく、いかいせむと躊躇する中に、誰なりしか、中に一人、左方に水音の聞ゆるは、霧降の下流なるべければ、たゞ路を求めて壑中に降り、流に順てゆけば、自づと村に出てつべく、近道か遠道か知らねど、この外に策ありとしも覺えずといふに、衆議一決し、つひに壑に下りしに、幸にも一綫の

細徑を得てければ、灌漑を穿ち、茂林をめぐり、急湍を涉り、危橋を越えなどし、行くこと里餘にして一村を得、名を問へば小百といふに安心し、更に路を問ひ、秧田溝渠の間をすぎ、又九里餘にして、つひに會津街道に出でたり。

細雨すでに歇みて、雲正に霽れたり。たい見る、東方に一斷峰あり、北に向へば、脈絡連亘していよ／＼高峻とならむとするが如く、南に向へば之を限の餘勢漸く潰えて、唯だ小丘となりて、東南の方に頽走し去る。更に顧みれば、來し方の山は、五百重の雲に鎖されて、男體の絶頂、いつくをそれと知るよしもなく、葉山しげ山、重ね合ふて、北に走らむとし、分明兩山脈は對峙して、自然の門關をなせり。われ等は、こゝに、始めて鬼怒川の峽口に近づきたるを悟りぬ。

ゆくこと少許にして、江流のひゞき、地を動かすやうなるを聞きつゝ、疾驅して之に向へば、春漲を得て藍の如くなれる鬼怒川の水を見る。しかも、愈近けば景は愈よ奇となりゆるものゝ如く、忽ちにして中岩橋を得たり。この所、兩岸は斷崖削るが如く、川の中央に、一高岩の屹立せるあり。橋は爲に二つに分れて、岸と岩、岩と岸とに架す。之を望め

ば、宛ら断虹の如し。加ふるに、崖上處々に青松を着け、石而稜層の上に、その根を硬着し、虬龍天矯たり。俯して見れば、橋下の水は、湫潭百尺、流緩にして聲なく、その下流數町のところに至りて、始めて風雨颯到の響を爲す。橋に對して最も近く、又た一岩の水の中に特立する者あり、鉾岩といふ名に負かて、高さ百間の呼び聲いかめしけれど、橋上より望めば、はるかに脚下にあるが如し。之を要するに、一幅の風趣、甚だ大ならざれども雅、亦た以て畫となすに足るべし。

橋上に佇立すると多時、左瞻右望、しばらくも歇まず。更に秋時の觀の奇なると、月夜の觀の清なるを想像し、又たこの鬼怒川の上流に於ける景勝の饒多なるべきを憶うて、うたひ吟魂の遠くなれるを覺えき。

橋を渡りて、林を穿ち、水聲漸く聞えずなりて、ついに高德にいたる。もとより山間の荒驛にして、人烟稀疎なるは定りてあるに、憐むべし。近頃舞馬の災に罹りて、全村悉く烏有に歸し、老弱男女、海松の如きつゝれを着けて、假屋の中に、飢に呻吟するもの、頗る多く、さながら鄭俠流民の圖を見るが如く、人をして酸鼻するを禁せざらしむ。嗟乎祝融

たるもの、何ぞ無情の甚しき、凡そ山村の破屋は、是れ平和の住むところにして、都門の中に、朱門崔巍として、いかめしき大厦高屋は、鬼に似、魔に似たるしれもの、すだく所と知らずや。さるを、汝の彼を赦して此を攻むるもの、豈に強を恐れ弱を虐ぐるを以て其性となすに由るか。われはこゝに感慨措く能はざるあり、潸然たる涙は珠の如く、覺えず袖の上にふりかゝりぬ。

これより路一棧、鬼怒川に傍ふて、時には離れ、時には近きつ。曇りたる一日を、雲、時に薄らぎて、日の光、紗を隔つる如く見えしこともありしが、つひに全く晴れしことはなく、蕭條としてさびしき國道を、馬の鈴りん／＼と鳴る小荷駄の影も見えず、前面に聳ゆる高原山より吹きおろす夕風は、黄昏ちかく、いよ／＼はげしくなりまされるに、疾走するごと一里ばかりにして、大原といふをすぎ、又もや、脚下に鬼怒川の奔流するを認めつ。今日は川治までゆかむ定め、なほ四里近くはありといふに、少しく辟易したるから、藤原に泊るに決し、ひたすらに程をいそぐ。

又た一里にして、薄暮の頃、つひに藤原にいたる。亦た山間の一荒驛にして、高原など、



同じ程のところなり。扱て兼てより泊らむと期せしは、旅行案内などにも見えたる温泉なれば、可成の者なるべしと豫想して、驛中を尋ねめぐるに、つひに見當らず。あまりの事に、村人にたゞせば、それは一里半ばかり跡の方にして、御前さま方、その家の前を通られしなるべきが、あまりにさゝやかにして、そいろかなる所なれば、知らずして打ち過ごされしなるべしとたふるに、われ先づ甚だぬかりしを愧ぢつ、中に一人、なる程、さう聞けば、絶壁の下なる河岸に、人の浴し居たるがありしやうなりなどいふに、それと見たらば、何故に告げざりしかなど、みな人いきまきかくることをかじさ。かの人又たかしこの對岸にも、温泉宿らしきがありしが、これはいたく頽破してありきといふに、村人又たわれ等に教えて、それは瀧の温泉といふものにして、もとはかしこに橋ありしが、近ごろ春漲のために流されければ、一二里の上流、もしくは下流よりならでは、行き得ざるなりなどいふに、之をいづれにするも、つまらなき温泉場に過ぎざるべし、かゝるものをこそどくしく紹介したる何とか案内などいふ書は、杜撰頗る甚しき者なめりと、少しは負惜のまじりて多寡をくしり、扱てしもあるべきにあらざれば、つひに藤原の驛中に投宿した

りき。

泊りし家は、さまで廣からねど、裏に離れの小坐敷あり。そこに導かれて、荒壁に燈の影もらぐ山里の春の寒を火鉢二つに積み上げし火は、やかて青き焰を吐きて勢よく、夕げの膳に飲みし酒のみは海かりしが、夜の物にまで氣をくばりて、風邪召し玉ふなど心づくる主人の情は、あつく又た暖く、旅装の宿もかゝる所のみならむには、いかに嬉しからまし、どこそ語り合ひしか。

三日、時空のけしき、たゞならず、寒さは骨にしむばかりにして、吐く息さへに白く、都へは柳櫻をこきまかせて、春の錦、日にくうるはしかるべきこの頃、聞けば、この地は、漸く早梅の花一二輪、僅に窓外の香を綻ぶとか。されば、玄冬素寒の真中はいかにならむと、自らおもひやられぬ。

程に上りてゆくこと一里、路の勾配は漸く急になりて、懸岸の半腹にのぼりて盤旋し、鬼怒川の流は、名をそのまゝの勢凄じく、その疾きことさながら矢の如く、蕙爛せる岩層を剝き、疎鬆なる土壌を洗ひ、水石相闘ふ聲、雷車地に落ちしに異らず、奔湍激瀬、處々に

あり、日光の含満に似たるもの、しばくならず、見られたりき。もし夫れ山送水迎の間、嵐光雲影の變幻するに至りては、風趣更に佳なるものあり、木曾の山道と相似て、しかもやゝ大なるものといはまほしきが、唯だ北風飛雪を捲いて征衣を撲ち、首すくむべき寒さには、齒の根さへあはず打ふるへつゝ、花より團子のはかなき今の境涯には、早く川治にゆきつきて、温泉に暖まらむとあもふ心のみせかれて、仔細に諦觀をなさいりしぞ遺憾なる。

高原の驛を通りぬけ、再び鬼怒川のほとりに出づれば、やがて虹の如き一長橋あり、前面に突兀たる一奇山を仰ぎ、その麓に一字の破屋あるもの、是れ温泉のあるところとは知られたり。この湯は、瀧温泉などに比してやゝ繁盛なるよしなるが、この春寒の頃には、客などあるべきいはれなく、われ等はいたく歡待されつ。やがて降りしきるみぞれに傘さしかけ、導かれて浴槽にいたる。

衣を解かむにも所なければ、みまな、近傍の懸崖の半腹なる洞窟めきしへこみに投げおきつ。湯の涌き出づるは何處とたづぬるに、早瀬の波の噛み合ふ河岸にあり。その一には吹

けば飛ふべき假の屋根を設けたるが、他の一にはそれだになし。かく河岸に近きところに天然の巖角をえぐりて湯壺となせるとなれば、頃ろ雪解の水河に満ち、水かさ増して來ぬるときは、濁流滔々として容捨なくさし込み、操浴不如意なるを常とするよしなるが、今朝より水すこしく減じれば、漸く浴するを得るやうになれるなりとか。されども濁色なほ去らず、敗葉塵芥などの水中にかきみだされて、體にさわるは頗る心地よからず。一體は清澄無色といふに、かく棄てし置くは惜しきものなり。折しもみぞれ益々はげしくなりければ、板屋根の透間もり來る溜滴に頭をうたせつ。屋根なき浴槽の中に入らむとするには、傘さしかけて、體をひたし居るの外なく、その風流のをかしきは、豊後の別府濱脇の磯邊にて、随意に海砂を手して堀り、涌き出づる温泉に背ひたしつゝ、日傘さしかけて、夏天の午日を防ぐと相似て、とてもく都の人など夢にも想ひ到らむと察せらるゝばかりなりけり。

一浴すでに畢りて、午餐に就き、坐憩之に久しく、雪はいよく降りしきれども、碌々として半日を消さむはわろしとて、やみくもに、出で立たむとぞしたる。そもこゝより鹽原

へ赴かむものは、敷町のところ、高原まで小鼻をなし、三里の峠、越して、湯本に出づるを便とするよし、聞き居たれば、よしや兪悪との噂はあれども、そは生柔き都門の土を餘りに踏み出せしとなきしれもの違の、いひふらせしことなるべく、昨日日光山を下りてより後、つねに前前に打あをぎつゝありし名も高原の山こそは、流石に天を攀ぐるばかり、白雪その頂を埋めて、寒光凛冽、目皆爲に裂けなんとしつれ。峠の路といふは、かゝる頂にあるべきいはれなく、いづれ峯つゞきの低きところを蛇行すべく、現に夜へ藤原の客舎にて念のため亭主に問ひしに馬さへ通ふ處ろとて、さも易き路のよし聞きければ、いよ／＼それと評議は決してあり、今朝しも高原の驛中を通りぬけし折、一徑分岐して山にかゝるを認めて、大方それならむと推し、先々のことはえしらず、この様子にては、道も可成に廣かるべく、知らぬ谷間に迷ひ入りて、狩人にさへめぐり逢はず、狼の聲ちかく聞えて、一夜を警の火焚きてすすすなどの、おそろしさは、萬々なかるべしと信し居たればのことなりけり。

田舎人のいとまめ／＼しく、この吹雪に酔狂なる旅をいさむる親切は、世に有がたく、奉

かる、袂すげなく拂はむは流石なれども、思ひ立てはやめぬが氣質のわれ等なれば、それ勘定、それ支度と、油紙に火のつきしやうな騒に、罪なき櫻婢の目をまはすばかり。何にこれより山路を鹽原の方へ御出とか、それには御話申すことありとて、われ等を爐邊にひきとめて、懇々と語り出てたる亭主の話によりて、仔細を聞いて見れば、豫想とは全く相反して、遂に前案を駈すの止むを得ざるに至りしは、是非なき次第といふの外なかりき。尤もそれも唯だ亭主の話ぐらゐならば、随分馬の耳に風として聞き流すの勇氣なきにしもあらざりしが、來合せ居たりし獵夫と稱する男の忠告を受くるに及びては、弱蟲ならぬ我等すら、慄然として身の震ふを禁ずる能はざりき。

かの獵夫は爐邊に踞し、烟草の吸殻はたと敲き落し、身を後へそらし、跡から考へ見れば面憎きまで、乙う澄し、咳一咳して、徐ろに説き出していへらく、すでに御存じの如く、鹽原への捷路、あるはあれど、峯つゞきの低きところなどいふまだるきものにはあらで、直に高原山の七合目あたりにかゝり、行くこと一里半ばかりにして、平曠なる原めきしところに出で、脚下に湯本の里の浴戸臥蠶のごとくに簇撥するを認むべし。かくて路は峻嶮と雖と

も僅に三里、しかも眞の登りはその三の一に過ぎたる程なれば、御前様方にはまことに朝飯前の仕事なるべし。但し北地の春は猶ほ浅き今日この頃のとにしあれば、残雪の深き測りがたぐ、こゝらあたりより見ゆるところさ、かく厚く白きに、絲より細き逕路の縫ひ行く谷間などは如何ならむ。先づ浅くて腰に及ぶべく、深きは身の丈にも餘りぬべし。扱て雪みちの險を冒す者は、初の程こそ氣張りつめて屈せず撓ます勢よく進むめれ。もはや前程剩すところ幾許もなく、やれ安心といふ段になれば、俄然として氣弛み、疲勞一時に起り、身のはたらき前に似ず、一たひぬれたる汗は冷かに感し來り、漸々に嚴寒の肌に侵するを覺ゆるものなり。されは今日山を越えむには、かの高原に達し、山下の村里の見ゆるあたり立ちすくみてエヘ、、、、かの峠は、あろか、半月程前には、この國道の中にも、一人の行脚僧の、是もエヘ、、となりしがありけり。われ等は獵を以て業となすものなれども、雪のかく深きとき、獲物おもふやうならぬを知らば行かぬなり。そもこの峠越は、舊曆彼岸の頃より開け初むべく、今に越えしものあるを聞かず。われ等はもとより些少の勞を吝しむものならぬと、故らに御身方を導いて危に臨ましむるを取てせず。たゞ雪みちと

水の出たる川とは、人の言ふことを聽いて、誰も褒めはすまじきつまらぬ失策は爲すまじきものぞ、若し必ず藪原にゆかむとならば、こゝより北に三里、上三依といふところより右折し、尾頭峠といふを越ゆべし。かしことて雪浅きにはあらぬと、日々郵便脚夫の通行する者ありと聞けば、嶺路に人跡のものとめがたきことなどは、ゆめなかるべし。峠は矢張三里なれど、半日の仕事だけのものは確にありなど、語り去り、語り來り、さてもく脅迫してけりなど、われは腹の中に頗るむしやくしや覺えしものから、越て見たくも毛布釘靴の用意なきを今更詮なく、又おもひめぐらせば成程無謀の冒險をなし、エヘ、の中に萬一を僥倖するも、をかしらず、捷路躰攀の壯圖はこゝに目出たくも廢止に歸しつ。炊派の喜、推して知るべし。時は二時に近くなれり、今より急ぐとも、尾頭の嶺頂にて日は暮れなむを、宜しく中三依までゆきて泊る方然るべしなど、善後の策もやうやく決議されければ、扱て立ち出てぬ。

路すがら、われは舊遊中に見聞せしことをおもひ出で友に語りて、凡そ雪みちの困難は、卿等南方の暖地に生れし、人たちのとても想像し得らるゝ者にしもあらず。いつの年なり

けむ、三月の末といふに、われ獨り旅に出で、磐梯山北の檜原を越えしことあり。積雪深さ丈餘に及び、消え残りし鞋痕の黒きを、たつねつゝ行くに、動もすれば踏みしむる脚先に力の入り過ぎて、雪の下に流るゝ小川に陥りしこと幾度なりけむ。大壑氷合して蛟龍蟄し、枯林雲冷かにして鷺鳥叫ぶさま、日暮をいそぐ旅人の心驚かさぬことかは。人に遇ひしは、行々四里の間、たゞ一回のみ、漸くして絶頂に近けば、斷崖聳立して殆んど直角をなし、積雪の上に手をかけて登りつ。巖羽二州の國境たる頂に立てる分界嶽子は、雪の上に、僅に一二尺を抜くのみ、その間の苦艱は言説し易からずといふのみにて足りなむ。又かつて陸前笹谷峠の麓なる茶店に憩いて、老人の語るを聞きしことあり。そのいひ草、腹筋にちかきものなれば、今に忘れず。曰く、峠に登るに、旅慣れぬは始に急くものぞ。されば流るゝ汗を拭ひもあへず、夏の日などは子細なけれど、雪深き初春の頃などは、頂に達するに及び、猛風天より吹き下し、高寒俄に襲ひ來れば、一度出でし汗は忽ち凍り、針となりて肌を刺し、その痛さに堪へずして苦死するなりと。その理屈の故事付けなるは、三尺の童兒、直に識別し得べしと雖も。雪中の凍死は、之によりてその理因を推知すべく、

前の獵夫の話と對照していよくその然るを知るべしなといへば、みな人、なる程どうなづきぬ。

かくて、名を聞くさへね、そろしき埋谷といふにいたれば、行倒人の高札あり。人相書に行脚僧とあれば、正しくかの獵夫の語り聞かせしものたるを知りぬ。こゝに物ごとに感し易き男の、中に一人、われ等にして、若し仔細に問ひ正しませで、委細かまはず、かの捷路にかゝりたらむには、疑もなく今頃は早くエへ、となり丁り、數日といはず、數月の後、發見せられ、之とおなじ高札に、美男子ならぬ人相書を止むべし。あな恐ろしなど、今更の如くいひ出て、からき命もうけしやうに喜べるがありき。

中三依まで三里の間、なほ鬼怒の上流に沿へとも、漸く狭く淺くなりて、水石相闘ふ奇觀を欠くにいたりしは口惜し。

われと紫石とは先鋒となりて、宿をも取り置かむとて、いそぎつ。年はわづかに十一ばかりなる愛らしき女馬士と後になり先になりつゝゆきしが、突然聲をけて、中三依へは何町あるぞと問へば、さして驚きもせず、いちらしくも、姉さんかぶりにせし手拭をとり、こ

なたをふりかへりて、十町ばかりがツすところたふ。更に宿屋は何處がよきぞと問へば、會社よかんべいといふ。これが都に育ちし娘ならば、いかに貧しき家のものにもせよ、またこの歳にては、新しく結び立てし蝶々髻に、珍らしき花釵、むりやりに母を縁口に連れ立ちて引きまはし、べそかいて見せて、買はせる位の者なるに、吹雪面を撲つて、北風髪を吹き亂るをもものともせず。手綱を握りしまし、筒袖のふところ手して、竹藪の雛鷺、低く歌ふ聲をもしらく、遣つて除ける神妙のけしきに、われは西歐の詩人が勞働の神聖を賦咏したる詞句をしもおもひ出でつ。なほも仔細に誰か家の子なるかを問はむとせしが、中三依に達する少し前に、畦路を横に折れ入りて、吹雪の中にはやその影の見えずとなりける。中三依は藤原などに比して、いたく劣りたる全くの寒村にして、戸數纔に三四十、泊りし家を會社といふは、通運の事務をも掌ればなりとか。入られし室は煤けていぶせけれども、火燧のもてなしは、明かに田舎入の情のあつきを見るべく、濕衣を脱きしたために貸して貰ひし衣物は、よそいきの取置と見えて、縞柄は野暮なれども、まだしつけの絲だに抜き去らぬものにして、之を遠慮なく着ひらげて、ごろ寐をやらかしたる同遊の人の心なき加減、跡から考へ見れば、あまりのことなりき。

夕げの膳の物淋しき、雞卵を除きては全く精進づくめにして、米の色は飽くまで黒く、口中にごそつくばかり。されど薄くとも一壺の村酒には、陶然の酔を結ふを得つ。われは斯行に、たつた一度の失策として、勢よく椽側に飛び出でし折に、板を踏み抜きつ、名たる旅行家の鐵脚は、違ふたものよと、つねに人を笑ひし報いの、今は一層總がよりにて囃され、いぢめられてける。

われは、こゝに自己感慨の一端を洩らさむとす。そも遠僻の民、自ら太古の風を存し、一舉一動、兎の毛ばかりの虚飾なきもの、是れる―そ―がえみ―るを著はし、文明は人を毒すといひ、老子が道德經を書し、玄朴を以て本體となしたる所以にあらざるか、おもふに今の世に所謂文化や、開明はある人のいひけむ如く、社會の病にして、その毒に罹れるものは必ず斃る底のものなるやも知られず。しかも却て狡智を増大し、奸巧を加入するにいたり、今様は尻かろくして一寸手先の利くしれものを指して才子とぞ呼ぶなる。知らず是れ何等の謬見乎。見すや眞實は深く藏めて虚の如く、君子は盛徳ありて容貌愚の如しとい

へるを。蓋しその虚なるところ、その愚なるところに於て、一種の靈能を存すればなり。嗟乎われもうきふししげき吳竹の世になやみむづらひ、妄念火の如く、未だ葛藤を解くに至らず、猶ほ時に流に枕し石に嗽くてふ幽味清境を求めむとす。今はたゞその覺束なきに泣かむ外はあらず。

三日、味爽宿を出てむとしけるに、又しても腹筋千萬のことこそ起りつれ、友なる一人、支度せむとにや、あはたゞしく室中をかけめぐり居たるが、機といふは不思議にも且つれそろしきものにして、らんぶ釣りのかぎのぶり下りたるに、目ぶたした、かに引かけ、獨にては容易に取放たれず、事々しくも人を呼び立てしは、まことに噴飯の至、神代より語りも傳へず、物の本にも見えぬ絶奇絶妙の大珍事なりと嘯し立てられしも哀なりき。因てこの男は、新らたに目釣坊の名を得たりしが、元と釋迦牟尼佛弟子たるべき筋の人なりしかば、字に書くときは、滅離坊こそ然るべけれど、その後定められける。

中三依の村を出で、行くこと僅に數町、上三依といふにいたり、鬼怒上源の細流を右に渡れば、直に尾頭の峠にかゝる。さなきだに峻しきところと聞くなるを、雪満山を埋めては、

壑に臨める徑路の上、頓轉墜落の危艱、眼前に逼りて見ゆれば、北廓全盛の花の頃、八文字ふむ傾城の足どりもかくや、そろりくと運び出す一步一步、決して次序を誤るを得ず。加ふるに、旭光枯林を穿透して、璀璨たる積玉の上にかゝりやきぬれば、乍ち我眼に奇痛を起さしめつ。會稽の耻雪かひとにや、はじめには頗る勢こんで見へたりける滅離坊も、大に辟易の氣味ある者の如く、次第に跡びさをせしをかしさ。むかしく雪山に薪をこりたる汝が、教祖の御苦勞さ加減にても思ひ出てよと、きめ付けられしが、心こゝにあらざれば聞けども聞えぬかして、どうかうの返辭もなかりき。

行遇ひしは、たゞ一人、是なむ郵便脚夫なりける。路すがら見たる景色は、向上ぐれば青壁萬尋、直下せば碧潭千仞といふべき程のものにしあれど、よくある奴ながら、旅には剛の者なるわれ獨りは、絶えて驚かされず、程なく、絶頂、を極むるを得たりき。聞けば、この道、戊辰の役、白河城の攻撃をなさむとせし折、官軍が特に一枝隊を派出せしところなりとか。

嶺頂の眺觀は、流石に軒曠といふべくや。雞冠山は小牛の如くうづくまり、櫛か嶽は龍の

如く蟠り、名のみいかめしき剣が峯より續いて、でこぼこしたる大入道小入道の絶嶺を左右に磨きつ。山峽のや、開けしところ、鹽原の山村、墟落星散しつるに目を留めて、なほも遙かに眺めやれば、小松の群たちこめたる那須の野影蒼蒼たり。その平蕪天に接する邊、染むるか如き一片の山影は、磐城の入瀧山と見たる、よも僻目ならしなど。われは手に地圖を按し巻煙草を口にふかしつ、あくれし友を待つ間に獨りごちせしこと多時、やがて下ること半里ほどして、地上また雪華をといめず。地形と山勢とによりて氣候の異なるは、かくまでにもやど、つまらぬことを、今更の如く感じたりき。

上鹽原村に少憩し、鹽湯須卷畑下戸などいふは横道なれば、たつねさることなし、古町門前などいふを過ぎ、午後二時といふに上鹽原なる新湯といふに至り、明賀屋といふにつく。こゝにわれと紫石とは、雷霆の瀑といふを見ゆかむとて、草鞋を解かずして、杖を揮ひつゝ、直に立ち出てしが、木こりすら今は通はぬ岨道春寒くして、湖底の氷雪に入日の影うすくなれる頃、數度ならず道を誤りつゝ、山深く迷ひ入りしこと一里ばかり、やうやく瀑らしきもの二つ見つけしが、そのさまでならぬに骨折損のくたびれもうけして、眩

きく立ちかへり、骨なしの軟派輩に冷かされし悔しさ、今に忘れず。

浴場はすべて河岸に駢列し、岩の湯といふを初とし、數け五六、その湧出するもとは手足をも觸るべからず、鶏卵を煮るべきばかりなるに、河水を加へて浴を操るに適宜ならしむ。この地はもと空海の發見にかゝり、古くは七湯と稱せられしを、治承中地大に震ひし折、泉盡く涸れしが、その後別に湧泉を生せしもの、是れ今の新湯なりとか。すべてこの地は、屋舎各處に分散し、區域徒らにひろきばかりが特色にして、浴槽完全ならず、旅舎瀟灑ならぬが多き中に、こゝは先づ取るべき分にして、まして初春のこの頃わさく出かけしことなれば、寂寥の折から、なほ佳なるところもあり、よく掃除されたる三層樓上に一夜ねて、山寺に在る如き岑寂の滋味を領するを得たりしが、漸く世に知られたるしるしとや、田舎の淳朴を脱して、よろづ貪り勝ちならむとする傾向は、もどくわれ等の齒に合はぬものなれば、三伏の鹽原は、斷然熨斗をつけて、避暑てふ小人の閒居に、借金しても見榮を張りたがる世にありふれの偽紳士の前に、擲ち去るべしと、われはつくく心に感じける。



五日、くもりたる空、風いと寒し、今日が旅のをはりとあもへば、朝食の膳の上に酒を添へしめ、九時ころやうやく立ち出づ。一路の溪山、霞雲低迷し、斷崖危橋連亘する趣、さすかにあしからず。但し名所に見るべき者、高尾の碑は北山の文のみいたづらに尤らしく、普門の淵は李白が采石磯とは似て非なるやうに覺えつ、野立石の平たくて廣きも、天狗峯の尖りて高きも、この地に在りてこそ見所はあれ、もとくさしたるものには非ず。材木岩は成程粗面岩質にして、六角の石柱に相違なきも、廣さ何程ぞ、一間四方に足らずして、わづかつて見し陸前小原のに比すれば、千分の一にも及ばざるなり。さはいへ、われはこの地の風景を以て、全く價値なしとはいはず。その一川寒玉を束ねて駛走し、急湍岩に咽ひて霧を騰け、兩岸の巖壁夾立して、青倒碧奔、攔れとも住らず、烟嵐錯落し、風泉琅然、耳底に清き姿趣にいたりては、常に見るところにして、欄りこの地に限らざるものとはいへ、確に一顧を値すべし。凡そ山水の見るべきは、全體の布置如何にあるべく、區々たる一石一水を擧げて喋々するは、愚人のことといひたし。岐蘇すでに然り、馬溪すでに然り、この地獨り然らずといふを得むや。鹽溪の山水、根が都人士輩か偶ま來り遊びて、贊辭を

與へしものなれば、名の實に過ぎたるも宜なり。げにや或人のいひけむ如く、人物の評論は古今東西の歴史に通曉したる人ならでは任し難く、山水の眞價は宇内五大洲を踏破したる者にして始めて之を判し得べし。若し過賞するものあらば、誠にその眼識なきを表すに過ぎざるべきのみ。余やもとより其人に非すと雖も、都人士の如く審美の眼なき者に非ざる事は、自ら許して疑はざるなり。かくてわれは人事的鹽原に對しては、全く之を斥け去ると雖も、天然的鹽原に對しては、なほ棄てがたくて多少酌量するところあらむとするものなり。

山○峽○を○出○て○盡○し○て、關○谷○の○村○に○い○た○る。佇○立○し○て○回○首○す○れ○ば、孤○雲○一○片○岫○を○出○て、搖○曳○し、さ○な○が○ら○我○を○送○る○こ○と○く、嵐○翠○客○衣○を○吹○い○て○凄○然○た○り。あ○、鹽○原○山○水○の○靈、わ○れ○を○駐○め○む○ど○し○て○然○る○か、萍○水○流○轉、游○ふ○に○東○西○な○し、他○日○豈○に○再○游○の○期○な○し○と○い○は○む○や、須○臾○に○し○て○天○色○い○よ○く○惡○し○く、や○が○て○大○雨○沛○然○と○し○て○來○り○ぬ。

那須平原の一部は、故三島氏の開拓せしところにして、今に一村、その姓を冠して、千歳の紀念を傳ふるものもあり。然れども、水利その便を得ざるあればにや、なほ荒蕪に委し

て願みざる所多く、たゞ所々に麻麥を植うるのみ。西那須停車場に達する三里の間、一棧の大道、直きこと箭の如く、見るもの雨の日の焼野に雲低く垂れかかりて、知らぬ小鳥の鳴くが有りしのみ。

同行六人、ぬれ鼠の見にくきさまになりて、亭午すこし過ぎし程に、西那須につきつ。友はあぐれし汽車を待ち、今日の中に三日いや六日見ぬ間の花の都にかへらむといふに、吾は旅囊を検して、なほ數日を支ふべき丈あるを打算しければ、ふいと氣がかはり湯津上にかねて聞きたる那須國造の古碑をたづね、那珂川を下りて水戸に出てむことを思ひ立ち、流石に一人はさびしきまゝに、紫石をそののかして、さらば〜のことばと共に、篠つく雨を冒して、東へむかひつ。六人七日の旅は、一先こゝに局をぞ結ひたる。

《三十一年四月》



やぶれ笠

ありふれたる破帽と弊衫とに、身をかためる行脚の瘦姿、われながらをかしく、破れ鐘のひびきすさまじく、風ぼう〜と吹きめくる都大路を、人ごどにいそまへる年のくれのあはれさ、よそ目に睨みすぐして、心ばかりは飛ぶ鳥の跡を濁さず、蝸牛の殻めきて、わづかに膝を容れ得べきばかりの下宿の一間をぬけ出で、千里を駆け通さむず健足の自ら軽く、勢よく鹿島立せしは、そののどし師走の廿四日朝のことなりき。つねよりいぎたなき性なれば、残月の清き光にさそはれてなごい風流はあかりしものから、朝日瓦上の霜に照りろひて、花やかにのぼりしこと三竿ばかり、もどり傷むたぬ足元の明るきはいふまでもなく、樂の門守る犬に吠えつかれざりしも幸なりき。

馬車は新橋にとまりぬ、乗りうつりし藤輪の電を掣して飛ひゆくは心地よく、やがて濱風の横に吹くところにつきしは、かれこれ十一時に近きほどなり。約せし友はさぞ〜待ちわびてあらむすらむと思へば、止るを遅しと急き車より飛ひ下りけるに、案に違はず、わ

れを迎ひにと出て、ありけり。長者と期して後れしは何ぞやなどいふきびしき小言聞かぬ  
 さきに、われより遅刻の罪を謝しつ。伴はれて彼の寓に赴き、支度するを待つこと殆んど一  
 時間、主客たちまち位を易へて、こなたより放つ催促の矢、雨の如くして、漸くに之をし  
 も終らしめ、いよ／＼打ちつれて立ち出てしは、亭午すこし過ぎし頃なり。ひたすらに歩  
 を早め、間道を取りて程ヶ谷へとむかひぬ。

それより戸塚にいたるまでの間、道の左右、冬枯の小山、山出し合ひて、蒲團きて寐たる東山の  
 係をしのべるもをかしく、山かけは、三角の形に刻み上げし枯田に、張りつめし薄氷のひ  
 ねもす解けもせず。ことに取り出て、面白しといふはなけれど、風物のあくまで清瘦にし  
 て人に可なるは心地よく、迢々たる官道、驛樹の缺けし絶間より、見ゆるは雨降足柄箱根  
 の山々、雲を截て立てる崔巍の姿、自らいかめしく、半歳都門の裡に書を讀み飽きて、花  
 も月もあほろに眺むるわびしきわが兩眼のくもりを拭ふに堪へたる、爽快たどふるに物な  
 じ。

五里に近き道のほど、一飛に走せて、覺東なき冬の日影の、はやも西に斜なるころ、藤澤

の驛に入りて、清淨光寺に賽す。時宗の總本山とかや、世には藤澤の道場と呼び、又遊行  
 寺とすいふなる。寺隅に立てたる小栗の墓、すぐれて名高し。寺は近來回祿の災に罹りて、  
 金碧莊嚴たりし堂塔房舎、憐むべし、一塊の焦土と化し去りしが、開山祖師の遺澤なほ盡  
 きずや、末世の今にも、凡天下の善男子善女人か喜捨せし淨財積んで山の如く、建築の功  
 年を経て、むかしにまされる鉅觀を落する、將に近日の中にあらむとすといふ。

けふは小田原までゆかむのさだめなれば、こゝより又汽車に乗らむとて、停車場にむかふ。  
 時に日虞淵に薄りて、暮色やうやく遠よりいたり、輕烟曳いて蕭疎なる郭外の林塢に着き  
 ぬ、離畝の上、人すでに去り、馬牛舎に歸り、鈴聲や、歌聲や、杳然として模糊の裡に消  
 え、眼色を撞き送る殘鐘幾杵。ひいきの搖き出てし方をたづねて、ふいと西北の空を仰け  
 ば、一綫の餘照、芙蓉の絶頂に迷ひて、玲瓏たる白雪乍ち紅珊瑚と化しつ。頂下少許のと  
 ころ、先には鶴の翔舞徘徊するかと怪まれたる數片の斷雲は、爛然として殷赤色をなし、  
 別に青天高きところに曳きし一抹の緋雲、色は紫碧を染めて、形は虬龍の飛ぶに似たるか  
 ありけり。折しも歸鴉點點、陣勢をなして、横に天空を度り、恰も一簇の黒雲の如く、こ

の自然の大圖書の中に絶妙の照映を添へぬ。われ等もこゝにおなじく畫中の人となりし、神情恍然、しばしば吾を忘れてありしが、更に汽車に乗じて、この畫中の地を横走りぬ。疾風を截りて馳する車の窓に、首さし延ばし、頬、赤く吹く腫らす奇寒の水の如きをも忘れ、たどれば數百年を経たる名畫の、將に消へなむとする如く、漸くにして模糊暗濛となりゆかむず、この佳景に別を惜みつゝ目送しぬ、須臾にして彩雲みな色を失ひ、天地黯然として、物象明ならずなりゆきつ。殘烟地を罩めて、黒闇々の中に見るものは、明閃々たる遠村の燈火兩三點。

國府津にて、流車を下る。時は初更に近し。小田原までの馬車あれども、乗らず。やみにまたしく星の光を便りに、行き／＼酒勺を過ぎつ。おなじ名の川を渡るに、江湖漫々として灘聲なく、潭影幽にして魚龍の眠おのづからしづかに、森然たる列宿の影、その中に涵漾せられ、夜氣風ならずして、寒は又一しほなり。これよりゆく手の路は、海に近き杉林の中にあり、嵐翠霏々として、陰凄人を襲ふさへあるに、風一颯海より來り、吹いて樹梢

を撼かせば、龍吟自ら起り、木の間を洩れし星一つ、わが眼を射て爛然又熒然、凜たるさむさの骨の髓にも透るやうなるに、首を龜の子の如くすくめ、話せば聲も吹き凍るに、友どふたり無言にてひたすらに急ぎつ。かくて小田原の町に入り、輝然たる燈光に寂寥の情を一洗せしは、夜すでに二更のところなりき。友は知人の居をたつねむとて別れ、われのみは町中第一といへる某逆旅に投じ、何よりもさきにも、倒すや膳の上の酒二三本、快き酔を買ひし後、厚き衾をかつぎて睫をどさしぬ。

次の日朝、いと早く、友なるが來り促しければ、支度して出つ。こゝに舊友夏雲と呼べる男、こゝ三四年間、梨の礫の音づれ絶えてなかりしものから、病餘の軀をこの地にどいめてあるよし聞きければ、たつねぬ。不思議にも訪はれしものかなど、いたく驚きし彼と、席を分ちて、往を憶ひ舊を話すること多時、つひに相携へて古城址にのぼる。後北條氏が五代の榮華は、春の夜の夢さめて、稻葉大久保の兩氏相嗣きて居すわりきといふこの城、譙樓女牆、今ははや跡だになくて、舊濠のかたばかり残りたるに、冬枯の草ふし合ひて、霜冷かに白くおきつ、佳人が濃春の夢に酔へりけむ棲鴛閣は荒蕪に歸して、金

鈿玉釵の名残とめず、掃ひ盡されたるも哀れなり。城址の頂には大久保神社といふがあり、赤欄の小橋を渡り、石壇を拾ひのぼり、やがて祠前にぬかづく。こゝ眺望頗る曠濶、箱根足柄西に近く、雨降丹澤、北に高し。東南の二方は見渡すかぎり、目もはるかに開き平楚海濱につくるほどり、こゆるぎの磯長くつき、大磯小磯の村落、指點しつべく、早川酒匂花水の諸川、帯の如くに流れめぐり、洋々として八州を環れる大瀛の水の、波渺漫として漲碧天に連り、浮びて漂ふ大島初島は、洞庭の君山ならねども、これもさながら白銀盤裡の青螺とぞ見えたる。伊豆の山脚延びて海に入り、之と相對し、やゝ東南の方につりては、江島鎌倉よりついで、三浦の山々、雲霧の中にほの見え、房總の半島は、その後、に當りて、遙青掃ふが如し。この日天氣いと暖なりければ、四方のけしき、何とはなく春めきて、石垣山のあたりに燃ゆる炭竈の烟、直く上り、うらくと照る日影に、更に景致の添はるを覺え、恣眺時を移しぬ。この地はわがすでに二回も遊びし處なるが上に外に、たつねべき處なければ、直に立ち去らむとせしが、五城にての友なりし小森なにかしの在りしことをおもひ出で、之をしも訪ひつ。誘ひ出して海邊に逍遙し、歩々相話して情

未だ盡きず、つひに早川の畔まで來りぬ。城址の後なる小峯の村は、世の人多くは知らぬ梅の名所とかや、折もあらば必ずよ、杖履再經して、ともに塵外の春を賞せむかなと語らひ合ひつ、つひに袂を分ちて伊豆への道に上りぬ。

一里ばかりにして、石橋の村あり。頼朝の敗れしところ、早雲か攻め入りし道なること、今更述へたてむはうるさかるべし。米神を過ぎて根府川にいたる、むかしは關門あり、西は山に據り、東は海に盡きて、柵をしつらへ、小田原の城主、番士を派出し警衛せしよしなるが、蠻舶豆南に來りし後は、更に一層の嚴密を加へ、かの吉田松陰か密航を企て、下田に赴きしときは、熱海への浴客ととなへ、關吏を給きて通りすぐせしとかや。江浦ふく浦をすきて、吉濱にいたる。その間大方は坂路にして、高低一ならず、迂曲盤旋すること、しばしなり。崖畑の畔に立てる橙の老樹、枝もたはんに實りたるか、霜を浴びて黄やいよ、黄。竹林の前、斷橋の邊、日あたりのよきところには、野梅の一株、めづる人のありやなしやを問はず、南枝すでに綻ひ初めて、珠葩玉蕊、的燦として星を綴るか如く、色よりは香こそ哀とちもほゆれ、輕風こゝろありてわか袖の上にはほふもゆかし、窮陰人

を促す荒寒の天地に、早く一點の春痕を返したる、今更の如く風情ありなどいふも愚かや。むかし大頭將軍かひそみて難を逃れきといふ窟もあり、かねてはその安房に舟出せし舊蹟たる眞鶴崎を左に眺めつゝ、門川の村を過ぎ、一川を渡れば伊豆の國なり。この路はすでに一再經過せしこともあり、詳しくしるさでもあるべきか、扱ても風景の佳なるは、しばし見るも飽かず、ましてや曾遊四年の前となりて、恍惚として夢寐の如く、大方おぼろになりかゝりし記憶の新に喚起せらるゝは、更に一層の快感を増しにき。海天霽開すれば望眼遠曠にわたり、道はつねに海汀より屹立したる斷崖めきし小山の中腹にあるなれば、一碧鑑の如き大海を脚下に見おろし、漁帆兩三、白鷺の如くその上に飛び、自然の大香爐とやいはむ大島の、烟吐くを十餘里の海を隔て、望みつ。手をのばせば届かむばかりなる、初島のこれと相並ひ、我行漸く遠くなれるに随ひて、一度は重り合ひしが、又もや離れて見え來りぬ。かくて伊豆山の古祠に詣で、熱海につきしは黄昏のころなり。小田原よりこゝにまで七里の間、今は人車鐵道あり。乗り心地いかにや、自ら試みねば知らねど、その無趣味さ加減、言喋ぐ高麗の國などにありて然るべきものと見しは僻目か。

前遊の節は、宿屋の名の殊に雅なるをのみ撰びて、氣象萬千樓といへるに泊りしが、こたひは名の如何に關せず、今になほ親のすね噛しる身の、分に過ぎたるも悪しく、事はすべて中を貫ふべしとの決議により、友なるがわざゝその筋に赴きて問ひ得たる何屋といへるに投ず。

次の朝網代より魚を搬ひ來る漁舟の、歸るさには安價に客を載するかありと聞き、亭午までの暇あればとて、梅園に未開の若木をたづね、老楠林をなしたる來宮の幽邃なるに、神威のいやまされるをおろがみ、温泉寺の古松には、南朝名臣のむかしをしのび、物凄きほどなる熱泉の噴出するを見、友なるを案内がてら、われは游覽の復習をなし、めでたく十分なる熱海通となり澄ましつ。もとより廣しはいへぬ町ながら、隅々までめぐりし上に、わびしき借物の下駄、ありきにくかりため、やゝ疲れてぞ戻りぬる。

海上より名たゝる錦浦の勝景を眺めくれむと樂みあたりし漁舟は、魚少ければすでに陸より搬びて、今日は來らぬなりといふを聞き、待ちしもはかな、なまよみの甲斐のなかりしを嘆息しつ。扱てあるべきにあらざれば、いよゝかちあるきと事のきまりて、宿を出てし

は十一時のころなり。

路はいつしか海汀の沙濱に盡きて、魚見崎とて海中に突出したる小丘に登りはじめむ。山路  
 暇々として呼吸喘逆せむばかりなるが、程近ければ、一息にのほりつく。頂に一小亭あり、  
 十國一覽とかや、今の世に流行するこけおどしの大きな名をつけたり。さはいへ、房總  
 相豆をはじめとし、駿甲武常の遠山を望むべしといへば、全くのはかなき法螺にてもな  
 るべしや。近きところは例の大島初島の二嶼、呼へは應へむばかりにて、かへり見すれば  
 熱海の市、脚下にあり、樓閣參差、碧甍白堊、日に映して明にかやく。亭下の平地、一  
 笏のせばきところに小屋あり、漁師一人を置き、魚陣の海に入るを見るとき、法螺貝を吹  
 き立て之を報せしむるぞう。されば、岬をかくは魚見と名づけしなるべし。

亭を去り行くこと數十歩にして、崖を下る。峻嶮なるか上に、草樹少く、薛蘿の攀援すべ  
 きものもなし。下ること三四町にして、左右の崖脚に洞窟の開きたるを認む。右方のは殊  
 に面白しと見えたるが、下るべき便なければ、止むなく左方のばかりにてもたづね見むと  
 す。こたびは前と異にして、灌莽からみ合ひ、路いつしか消えぬ。外にせむすべなければ、

力まかせに蒙茸を排し、荆棘を踏みひろげつゝ、小猿の崖を傳ふ真似をして、からくも進  
 みゆくに、忽ち脚下に洪濤の崖を鎚して、撞撃彈回、ひいき雷霆の如くなれるを聞く。見  
 おろせば漲る沫は、時をも分かぬ波の花、さなから石灰を溶したらむ如くなれるを、麗は  
 しと褒めたへむは愚か、その一刹那おそろしき心地のせられしは、我ながら情もかりき。  
 かくて漸く下り盡せば、白沙の汀あり、磊々たる奇巖は、狗のかみ合ふ如く顛轉起伏す。  
 これを飛び石として、つひに洞中に入る。名はありふれたる胎内くゞりとかや、洞口の高  
 さ、試に暗算すれば七八丈もあるらむか。さきの方は二つに岐れ、共にかなたに向て開き  
 たり。されば洞中絶えて暗黒ならず、潮水玉の如くに澄ければ、水中の游鱗、明かに數へ  
 得べし。洞のあなたには、烏帽子巖あり。唯だこれのみにてはさまで感心せぬものから、  
 他に探見すべき手段なければ、一覽意盡きて後、又もとの崖路を攀ちのぼり、つひに本道  
 に出づ。このあたり總名を曾我濱といひ、海中に散點する巖礁ことに多く、兜岩、碁盤岩、  
 霰石、五色石などいふもあり。崖脚に穿ち入りし洞窟又頗る多きが中に、奇絶なるは錦巖  
 洞にして、早朝舟して入れば、旭光巖壁より反映して潮水を閃射し、爛々たる金波銀波は

龍田川の秋ならねど、眩き錦の色を浮ぶとかや。その鄰なるは観音窟にして、他になほ狗くぐりといふもあり、無名のもものは、大小一々枚舉に堪へずといふ。

たきこる山賤さへ通はじと見えたる覺東なき細道の、しかも九折の峻しきを登頓下上すること幾十回、やがて三里ばかりも來りしと覺しきところ、多賀の村を得たり。この間人家絶えて無し。こゝに小憩し、白波打よする濱邊の眞砂を蹴ちらし、半里ばかりにして網代といふに至り、又もや山路にかゝる。宇佐美まで一里又半、その間に横たふ峠一つ。嶺頂の眺あしからず、東には初島頗る近く、島上の田畝林塙までも、明に見え渡りて、全體の形は砲臺に似たり。やゝ南に向きて、大島いとも鮮かに、三原山の烟の劃時的に雲騰するまでも認めへれたり。房總は漸く縹緲の間に遠く、雲か山かと疑ふばかりなる一髪の遙青を天末に横へつ。首を回らす西北の一角、蜿蜒波の如く重疊屏の如き群山の奇青峭碧を抜いて、白扇倒に懸れる喬嶽の姿、挺秀獨尊、さながら丈人の兒孫を擁するに似たるは、問はでも知るき芙蓉の八朶、長空紅霞を滲する餘照の中に、幻奇の景を百變しぬ。

宇佐美より一里ばかりにして伊東につき、宇を和田といふところの温泉宿に投ず。地は町

の西端にして、四面みな田圃、格別の風景なきものから、紛鬧雜沓など夢にも見ぬやうなり。温泉の緣由を聞くに、この地、往古は蘆荻の繁茂せし沮洳の處なりしが、またく創を負ひたる野猪の來りて洗浴するを認めしものあり。因て初めて靈泉のあるを知りきとぞ。こは松原の湯にして、後についで残り多くの多くは發見されしよし。就中こゝなる和田の湯は、慶長三年はじめて浴場をつくり、慶安年間には樽詰として江戸に送り、大樹の澡浴に供せしことありとか。湯質略ほ透明にして温度よく體に適す。

雪にやならむと樂みし甲斐も、情なの冬の雨、夜半より降りしきりて、擔溜細のごとく、いつやむども見えぬに、馴れぬ木枕、いが栗頭の曉さむくども、衾の脚の伸ひ心地よければ、出て立たむ勇氣もぬけて、淹留とまで思ひ居たりしに、幸なるかな、空いつしか簪れ、朝日ほがらかに雲を破りて出ければ、結束しつ。十時近きほどなれば、直に修善寺の方に向ひ、町中を見物せさりしぞ遺憾なる。あとにて聞けば、この町松原といふところに、かの伊東入道祐親の墓ありとや。海若子の伊豆日記に、「新井より松原といふ町にゆく、この横さまなる處を半町ばかりゆきて、小笹しげりたる山に登れば、やゝ平かなるところに、



松の木、五もと六もと立てるもどに、伊東入道の墓とて、五輪の石たてり。苔むして、文字なども見えず、さびしく物哀れなるところなり」とあるもの、是なり。

町の中央を貫流せる小川に沿うて、ぬかり道たどりゆけば、半里ばかりにして柏峠といふにかゝる。登り一里とちほしきが、なか／＼峻しく、片石怒起して、足を刺し、脚下には目くろめくばかりなる深壑の底に、奔泉石に激たる響のすさまじきを聞く。折しも大風西より吹きければ、逆うてすゝむ人は吹きも飛ばされむばかりなるに、帽子失はじものをも、兩手に頭をか／＼つゝ、からくも登る。こゝは、かの二蘇の父なりし河津三郎が殺されしところなりとか。前に引きたる伊豆日記、赤澤山の條を按するに「すべてこのわたり天城山の續き、奥野と名むいへるところなりける。むかし伊豆相摸の殿原、つどひてすまひどりたるは、こゝにこそありけめ。かの河津三郎祐泰のうたれしは、このさきなきかしは峠といひけるとぞ」とあり。

大風いよ／＼吹き暴れて、奇寒劍の如く、身を刺すに、齒の根も合はず打ち慄へつゝ。頂を下る半町のところは一宇の茅店を見出し、冷酒一二瓶引かけて、又立ち出づ。これより

は下り坂なるに、路峽間を縫うて、風は屏風なす山に遮られ、前の如くならず。趙衰は愛すべき冬の日影の暖なるに、いそぐとしもはあらねども、殊の外に捲りて、亭午までに四五里の道を飛ばし、冷川柳瀬などを過く。身はいつしか平原の上に立ちて、四望や、曠濶、西の空に仰く富士の根、よべの雨は山嶺の雪なりけむ、更に一堆の白を増したるか如し。かくて田代といふを過ぎ、立野に出で、小さき峠一つ越して、桂川の畔に下り、之を溯ること數町、つひに修善寺の里につきぬ。

《二十九年十二月》



箱根の三日

國府津にて、汽車を下りつ。これより箱根の方へ赴き、今宵は塔澤に泊らむのさだめなり。道は僅に二三里のところ、旅の初日をぶらり〜と歩まむは興あるべしとて、初より馬車に乗るつもりはなかりき、人家のならぶ所を通りすこせば、例の松並木の道にかゝる。朝よりくもりがちなりし空模様、大によろしからず、一面にかきくもりて、淡墨を流したらむやうにもなりつ。今にと思ふ暇もあらせず、大粒なる雨滴、草帽の脰をたゞきぬるが、酒匂にいたりし頃より蕭々として降り出でぬ、破れたりとも一本の傘あればこそ、ぬれ鼠の見たらしきさまのみはなさしりけれ、棄つるも惜しとてこゝまで引かけ來りし古草履の、かゝどの方よりあへなくもちぎればじめ、道の土流るゝ頃よりは、はね上る泥痕、肩先にも及びたり、かくていつやむとも見ぬ雨に、豫期せし興も失せければ、友なるが先づいひ出せしまゝに、こゝより馬車に乗る事に決し、一時間餘も其來るを待ちつゝ、遂に乗車す。この位ならば、國府津よりすぐに乗るべかりしものと、今は後悔さきにたゞず。

湯本にて馬車を下り、六七町のところを歩せば、はや塔澤なり。かつて滞留せしことある、某といへる旅店に投す。かなたにても見覚えてあらむなどいふ、初心の考ありしにあらず。たゞ空桑の一宿さへに、なつかしを、且つは盜するどにはあらねど、家の中の様子も知りて、すべての都合あしからずと思ひたればのことなりけり。

はや六年の昔となりぬ、初めてこの地に遊び、この家に客となり、早川の清流に臨みてつぐられたる瀟洒静寂なる樓上の一室を借りて、數旬滞在し、岩にせかれて咽ぶやうなる溪水の音を、夢心には雨と聞きつゝ、住み煩はしき世のうきことをも忘れ、心のどかにありたりしこと、いたく心になひて、今になかき思ひ出とそなりたりし。その後とても、馳騁放跡、遊ぶに方なく、南豆に入りしことすでに數回、この函山の嶺をすぎ、聊か情に堪へざるものありしが、折あしくて、つねに來らず。今や時のめぐり來りしに乗して、消ゆかむとする昔の夢を呼び起すを得たる、うれしからぬこととかは。ことに時節なほ早くして、俗客の來遊するもの少きは、一しほのこととやいはむ。

欄外には積翠の山あり、樓下には碎玉の泉あり。天然の清趣、その舊を改めず。雨いつし

か霽れて、山をつゝみし名残の雲、ちぎれくゞて消えてゆく、山盤も心ありけなり。浴終りて酒を呼ぶ、紗燈の影ゆらぐまで、風は自在に吹きぬくる、狭からぬ室の真中に、きもあへる友とし對座し、大こつぶにつぎて飲みし、びいるの味うまかりける。

次の日、雨はれたる空にさし上る朝日いとも花やかに、ひるには殆んど堪へ難かるべしと見ゆる天氣なり。湯本まで戻り、あやしげなる裏道の近きをもとめ、早雲寺、裏門より入り、久しぶりにて北條氏五世遺墳の前にぬかづく。表門に出づれば、寺前一條の大達、これがかしの東海道とかや。ちもふ、長槍大馬、肅々然として絡繹ひきもきらす、こゝ雲間の嶮路を度りし當年の大諸侯は、いかに勢猛のものありけむ、又たその折、この街道一帶驛舎の繁榮はいかなりけむと。あはれ行川の流、もとの水ならぬこの浮世に、今は一場の夢なれや。はじめにさしかりし湯本茶屋といへる村など、屋舎の數さまで減せしと見えぬと、大方は軒破れ柱傾きて、鶏が上りて鳴く、屋根の上には、一八などにや、草生ひたり。こゝは農業の暇に、挽物細工をなし、七湯遊山の客を相手に賣り付くるなれば、まだしもかくは残れるなるべし。

玉籬の瀧を谷間に瞰る、叢樹の間にかくれたれば、懸け下ろす素練のはしを望むのみ。これより上の路は石高道とて、蹴鞠ほどの圓き石をしきつめたり。歩を移すに、艱ならずといはず。されど巖角稜々怒起し、足を刺し鞋を破る底のものに比すればなほ、勝れりといはむか。かくて石徑斜に登りゆくに、山はいよゝ深く、雨後の嵐翠流れむとし、無心の雲の岫を出て、卷舒するなかくに趣あり。喬樹の上には幽禽の人を待げに、名を呼びつゝ、囀る聲のちもしろきもあれば、琪花瑤草の間に香を追ふ蝶の、輕き翼、山風にみぢけもせで、舞ふがあり。須雲川橋のあたりこそ、殊にすぐれたる畫中の景色とねぼへしか。とある峻坂を一つ登りつめしところ、長松數株、枝ぶりのをかしきを前にし、瀧などをむかひの崖上に見つゝ、山おろしの風烈しき時は、吹きも飛ばされむが、また建て直すも造作なき、なべて心安げなる、よしず張りの小屋あり。われも、しばしとて憩ふ。凡世辭てふものは、言の葉の花のみありて、實のなきものなるを、全くいはぬとにはあらねど、都人ほどにはなき、質朴なる老婆と語り合ひつ。脚下に連れる山岳大環の缺けたるところより、相模の海の開きたるを眺む。かしこに遠白きは酒勾の川、その先なる一堆の丘は高麗

寺の山、下はこゆるきの磯つゝき、少しく陸と離れて見ゆべき筈の江の島のみは、かすみ  
て今日は見え候はず、など、問はぬさきより姫の得意にいひもてきかすを、うるさしと思  
ふほどの、われは俗士にあらざれば、松風の音いとも涼しく、潺湲たる泉聲と和して、人  
まぬならぬ自然の奏する仙樂を、耳邊に清く聞つゝそありける。

畑宿より上は、坂路いよく峻し、さいから坂、かしの木坂、さるすべり坂、追こみ坂な  
ど、なまやさしく聞えぬ名なり。丁意か東流道名所記に、この山あまりに險しく、行人く  
るしさのあまり、糞たる、故、はこねど名つけぬるよし、しるし、が、さのみ、の、そら、ど  
どしも覺えず。もとより、旅には剛の者と、人も許せしわれ等すら、午近く、烈日の光いと  
も暑く、殊に高樹少くなりゆきて、すゝきに波うつ山風も死したるに、やゝ苦しみを感せ  
しものから、腹の虫のみはいつもながらの我慢なれば、そのさま露ばかりもあらはしたく  
なく、同じ心なるべき友と先後して登る。坂のつきしところは、今の人の多くは知らぬ天  
蓋石。これよ、箱根山中街道の最高頂、こゝより、次第に下るなり。路二つに岐れ、われ  
等は右なるを取りて、元箱根にむかひぬ。左すれば古關の跡を通るなり。

い、つ、見、て、も、心、地、よ、き、涵、碧、千、頃、蘆、湖、の、水、光、を、脚、下、に、眺、め、つゝ、芙、蓉、の、倒、影、の、う、つ、ら、ぬ、に、  
少、し、く、不、幸、を、鳴、ら、し、元、箱、根、に、下、り、て、つ、ひ、に、湖、岸、に、出、づ、湖、尻、に、航、す、る、乗、合、船、を、た、づ、ね  
た、れ、ど、も、得、ず。わ、ざ、く、一、艘、を、仕、て、む、か、ど、思、ひ、し、も、隨、分、廉、か、ら、ぬ、櫂、に、見、て、ど、り、し、か、ば、  
斷、念、し、ま、づ、權、現、の、祠、に、詣、で、眺、望、す、ぐ、れ、し、處、を、見、立、て、笠、を、卸、し、て、い、こ、ぶ、こゝ、は、山、上  
の、と、に、し、あ、れ、ば、白、雲、の、風、な、き、に、飛、べ、る、い、と、涼、し、く、元、箱、根、の、人、家、よ、り、つ、き、て、嶽、影、樓、の  
あ、た、り、離、宮、の、た、て、る、塔、島、ま、で、見、渡、さ、る、一、幅、の、風、景、大、な、ら、ぬ、ど、流、石、に、幽、雅、の、趣、は、あ  
り。あ、た、り、近、く、森、の、し、げ、み、に、啼、く、鶯、は、ま、だ、音、を、入、れ、ぬ、に、や、つ、ね、の、聲、い、と、を、か、し、く、都  
の、人、は、か、つ、て、聞、か、じ、な、ど、い、ふ、杜、鵲、も、こゝ、ら、盡、な、が、ら、飛、び、叫、び、時、に、は、新、蟬、の、嘶、く、や、う、な  
る、も、交、れ、ば、旅、せ、し、こ、と、少、き、し、れ、者、等、は、奇、ど、も、思、ふ、べ、き、ま、で、な、り。

これより細徑一條、湖岸に沿ひ、新宮山のふもとをめぐる。覺束なき路なるが、幸に誤ら  
ず。初は林叢の中を穿ちたりしが、次には不規律なる田廬の開きしところに出で、後には  
すゝき原となりぬ。かく湖岸に沿ふことなれど、さしたる眺なく、午天の驕陽燦くが如く  
なるに、渴を療すべき溪流もなし。折ふし湖中に浮ひし舟の、われ等と並行してすゝむに、

湖尻の方へ向ふにやあらむ、呼びとめて乗船たのまばやと、友はいひけるが、餘りに遠ければ、聲も届かず、崖を下りて汀に出でむには路なく、氣のみいらだつるあはれさ。われはしばらく、その舟を見つめてありけるが、このあたりの田畝に肥料を運ぶものと認めれば、友にむかひ、もはや姓子へは程もあるまじとて急く。湖岸の急に北に轉せむとするあたりより、かへり見れば、わか思ひしにたがはで、舟は汀邊に止まりしやうなりき。又たしばし林間を穿ち、やがて破屋二軒ならぶ汀上出づ、これ湖尻なるべし。これより冠嶽めがけてのぼる。一山すべて、かやとすいきとなり。七八町にして、平かなるところに出づ。あたりには林樹しげく、下よりは見えざりしところ、浴舎數棟、昔しは二戸ありと聞きしが、今は一戸のやうなり。されば彼れ是れ選びごとするまでもなく、その家に入り、草鞋の紐を解く。足すいぐも煩はしとて、少し廊下をはらばひ、淺からぬ湯壺の中に、見事じやほんど身を躍らす。湯壺は赭色なる天然の巖角をけづりなせるにて、その罅より湧く湯は、とうくとして瀧の如くなり。深さは乳の上に及ぶべく、しかも温は身に適し足の指さへすいて見ゆる清らかさに、心地いふべくもあらず。わづに四五里の

山路なれど、雨後新霽のあつさに單衣もにじみし程の汗、流しをはり、浴衣着換ゆれば、その快たどへむ方なし。

食後事なきまゝに、脰を曲けて、華胥の遊をなすに、時あり。うるさきものは蠅の、細き脚に人の寝顔の上を容赦もなくふみにじり、長かるべき舌にて酒の餘瀝の涎と共にうるぼひ居たりけむ、口のあたりをねぶるなりけり。それよ、一二疋ならば、愛嬌なるかも知らねど、群をなして襲ひ來り、その數を知らざる程なるは、傍に茶受の菓子の一、二片残りたるが、黒くなりたるにてもしるく、あはれや、夢はつひにさめぬ。憎くき奴、いで打殺して呉れむずと扇を真向にふりかざし、二人して専ら方略を講し、しばしが程に、殺傷百餘疋とぞ注されぬ。蠅軍一時は辟易し、爲に退くこと三十里ともいふべきやうなりしが、いつの間にやら再び嘯集して襲ひ來れば、罪なとよと思ひながらも、又た百餘疋を殺しぬ。かゝる子供らしきことして、小年に似たる長き日は暮れたり。

夜に入りて、友は按摩を賃す、五十あまりと見えし、目しひたる姫なり。その筋骨の逞しき、むかし安達原の黒塚にこもりけむ鬼婆もかくや。もまるゝものゝ折々顔しがむるを見

れば、もみ殺す悪意はなくとも、窮處に徹すればのことなるべし、友のがをはれば、われも後の話の種にとて、この鬼婆どの、手にかゝる。鬼婆とは、まこと悪口にして、狂者の言すら聖人は擇ぶといひけむ。療治の中、しばしも口やすめざりし談話は、まゝわれに知らざること教え呉れたり。その話によれば、こゝなる湯は、眼病や瘡毒に大効あるよしにて、遠國よりわざ／＼來浴するむきもありとか。

次の日、朝とく大地獄を見むとて出づ。こゝより北へ凡そ半里、その半までは、木下闇の赤土すべり易き道をたどる。その上は、草鞋の底に踏む土のあやしく生暖かく、草はどび／＼に僅に一寸の青を残し、あたりには枯木の林をなせる、胡地のさびしさもかくや。その間を穿通する細流は、大地獄より湧出するものにして、熱湯の川なりけり。硫黄製錬所を過ぎて、なほも上れば、冠嶽のつゞきの一ヶ峯の絶頂につく。こゝを一町ばかり下れば、地獄茶屋あり。その傍の小高きところには石像の地藏尊いづもながら慈悲の御顔、いともうるはしくたいせ玉ふ。このあたりすべて所謂地獄にして、地上の穴は峰の巢の如く、白き烟、風になびきて、幾すちとなくたちのぼる。されど潜して池となれるなどはなく、み

な地をくゞり流れ下るとおほし。勢も亦さまでならず、絶えて音だに聞かぬ位なり。土質はみな赭色の粘土にして、烟の吹き出づる穴のふちには、硫黄の結晶へばりつき、黄ばみて見らる。われはじめに陸奥恐山の地獄を見しときは、やゝ奇異てふ感を起したれども、磐梯上の湯の大噴泉をたつねたるが上に、一層盛なる立山地獄谷を見たる後なる今は、これほどの者、つゆ面白しとは覺えず。されど、かの鬼婆の話に、折々粘土の軟かき中にふみこみ、足を火傷する人ありといふは、浮きたる言にもあらざるべしどうなづきぬ。

地獄茶屋にいこひ、片目しひたる主に打向ひ、しばし物語し、舊路を取りて一まつ姪子の宿にかへる。また一浴し、無聊のあまりには、例の細打をなし、午飯ををはりたる後、初めて結束して立ち出づ。

西に向て坂路を下れば、野草離々たる大牧場あり。遠きところには、牛馬の群をなして遊ひまはれる、斗南の地にて見しと、同じ様のけしきなり。このあたり多少の高低はあれども、大方平衍にして、いはゞ高原の地なり。されば南北に連りて、わが眼前を遮る山脈も、さまで高くは見えず、従て山上にある心地はせぬべきまでなり。仙石の村、近くなれば、

青田さへ開けたり。收場の中、細徑交叉のところいくらもありたれども、大方の方角、見窮めてゆきけるに、幸に謬らず。

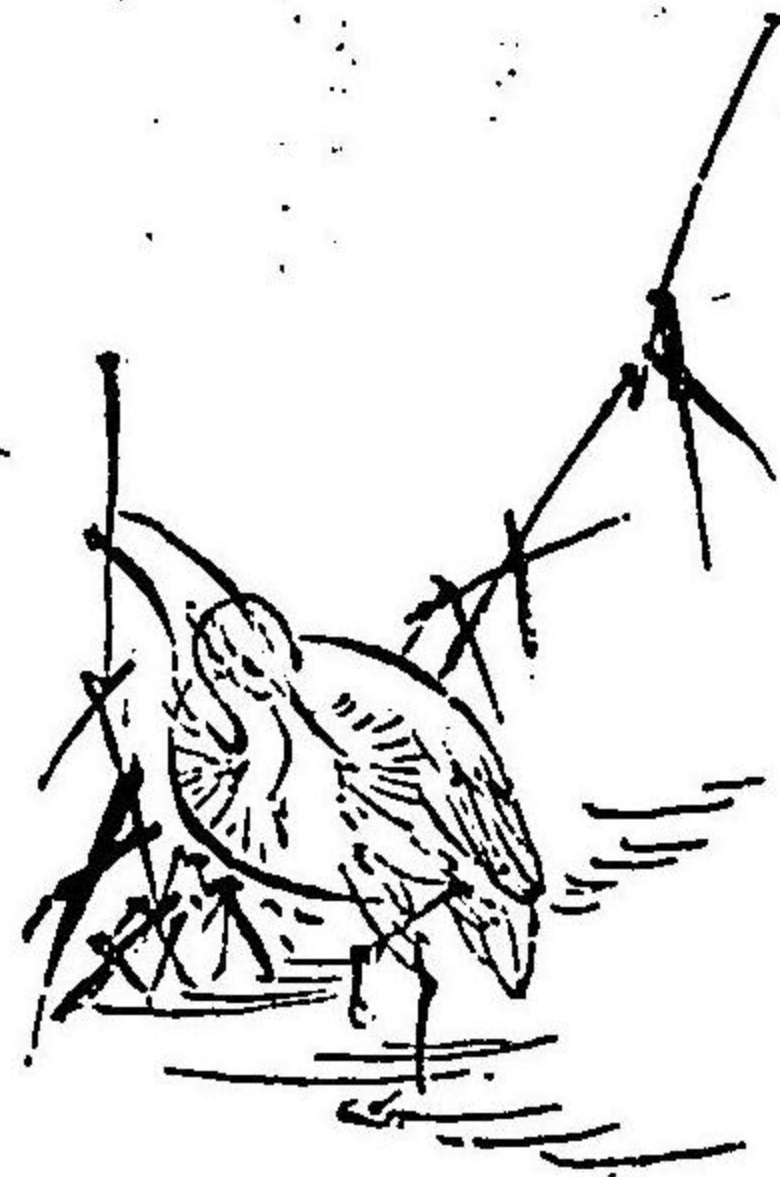
やがて蘆湖の水あふれ出で、末は瀧津瀬の早川となる流の、こゝは僅に幅一間あまり、しかも淺ければ、徒渉す。たま／＼後より大聲あげてわめくものあるに、顧みするひまもあらせず、一頭の逸馬、走ること箭よりも速く、流をはね越えわが側近くかけ來るに、友と二人、大手をひろげて、誰もほめぬど、これや斯行第一の功名、首尾よくも遮り留めたり、跡より息せき切て馳せ來りし馬夫は。頭惜氣も無く下げ、禮を述ぶるくど／＼しきまでなり。こゝにて路仔細に問ひただし、仙石の村にかゝらず、直に乙女峠にさしかゝりぬ。峠は名のみやさしけれども、實はなか／＼に險しき坂路なり。屏風の如く堅立せる峻嶒を、蝸曲蛇行して辛くも攀づることなれば、遠くより眺めて測算せしにまさりて、道の程いとも長く、かれこれ一里近くはあり。峨々たる巖石、鬱々たる灌莽、いま／＼で經て來りし草山とは似ても付かず、いかにも峠らしく見ゆ。頂には小屋あり、茶をすゝめ餅を賣りなどする翁の居るべき筈なるに、今日は見えす。こゝは富士を望むに頗るよろしく、洋客

などは函山第一の勝區として、わざ／＼來り登るもありどか。まことに蒼空新に霽れ、扶桑若木の上の紅暎、はなやかに萬道の毫光を放ち、白玉璀璨如たる芙蓉の一峯、その尖頂を五百重彩雲の中に閃めかし、天柱一萬丈、屹然とし、泰嵩を藐視し天地の心にたゝすむを仰がば、いかで仙才も蹇澁を覺えずしてやあるべき。あやにくに、今日は時利あらず、雲晴れずして八峯の全面を蔽ひ、一大障壁を築き成し、風力の爲に吹かれて流走するとき、いよ／＼ひろがる者の如し。時には嶽腰を露はすことあれども、半腹以上はかつて見えす。おもはぬ方に、晴れし嶽頂を眺むる活趣もなし。なべて西施が嬌羞に堪へず、故らに避けて、碧紗帳裡にかくるゝに似て、われやつひに懊悶を禁する能はざりき。

されど、もし晴ることもやと、はかなき望をつなぎつゝ、凡そ一時間ばかりも留まりしが、はてしなければ、つひに下る。ひがみし心の、例の負け惜みには、見えたところが、嘗て足柄山頂にながめしと大差なかるべしなど、強いて自ら不満を慰めつ。だら／＼坂の一里半を、東山といふ村まで下る。又しても、草野の禿山、溪流はありたれども、曲折奔激の奇趣はなかりき。

山椒魚、孫太郎蟲の外なる箱根の名物、拂へども去らず、かけぬけても追ひつく、例の蠅  
てふ蟲を、背にのせて來りしが、これより平地なれば、緩歩しつ。しぶとき奴、今は許さ  
れずと、われ先づ友の後にまわり、その背にとまれる蠅十餘疋を例の扇子にて退治しつ  
す。こたびは、われ前に立ち、友をしてわが脊のを打殺さしむ。かく交代すること兩三回、  
互に蠅を取りつくし、ひたすら笑ひ興する中に、眺乏しき寒村の小路、いつしかすきて、  
日は西に斜なる五時の頃、御殿場の停車場にぞつきぬる。

(明治卅一年七月)



### 三河北部の勝地

待つとしなれば長き數時間を、友と二人、話もどだえがちにて、慰めかねて見えしが、や  
がて夜十時といふに、汽車東より來れば乗りこみつ。

車中はさまざま雑沓せざりしかども、わが坐ちかくに、四五人の一組、豊川稻荷詣のものあ  
り。いたく酔ひたるけしきなるが、猶ほ飲を絶えせず。纏るゝ舌にわめく如き聲して、い  
やしき鄙歌うたふ、埒もなきまでなり。これはまだしも怒すべきことなし、上州のある製  
絲場よりのかへりと稱する工女二人、居並べるをとりまき、これにも杯さし、聞くにも堪  
えぬ謔言いひつゝのるに、車中の旅客はみなねむき目をさまし、恨めしげに睨めてぞ居る。  
われもその一人なり。かの工女ども、よせばよかるべきを、これも酔狂の相手となり、  
一人は年も二十あまりや、すれかゝりししろ物、受太刀なか／＼すさまじくぞ見受けられ  
し。他の一人にまだうら若き、鬼も十七ころの少女、酔人のからかふを真に受け、時には  
顔を火の如くあからめ、辯疏百方つとめてやまざる、これのみは罪なくいたましげなり。



眞夜中近きころ、静岡すぎし後は、さすがの酔人ばらも吠えくたびれしにや、頓ど鳴りをしづめ、車中漸く静かなり。月なき夜の車窓の外は、更に眺めもなければ、われは車の動揺するにつれて、きれ／＼の夢、はかなくも結びぬ。

ねむりさめしは午前四時、東の方やう／＼白みわたり、あやめも分くる頃なり。すでにして車は馳せて、濱名の湖邊をすぎぬ。盈々たる一盞の碧水、さながら明鏡を指ひたるが如く、汀上の林樹、輕靄未だ散せず、布帆早く旭日を受けて、橋頭一幅の紅を染めたり。北の方に重疊せる連山は秋葉つゞき、遠夢の境に赴き、わが曾て踏破せしところ、故人と相見る想ありき。

豊橋にて車を乗り換え、豊川一宮も過ぎて、東上の驛にいたる。汽笛數聲つゞげさまに吹き鳴らししが、汽車は發せず。かゝる田舎の小驛に長居するは心得ずと、われも車窓に首さし延べ、人々のしりあふを聞くに、驛長未だ來らざるが爲といふ。思ふに、彼や朝いの床にさめずしてあらむとて、かくは汽笛を吹き鳴らししが猶ほこれにても來らねば、迎ひの者をば走らしめたりとか。かれこれ十五六分も過ぎし後、驛長はねむき目をこすりな

がら、馳せ來り、汽車はまた進行をつゞけぬ。これより行くこと未だ二哩ならず、枕木の骨かれたる坡隄の雨に崩れ、漸く修繕終り、昨日より開通せしといふ處あり。汽車は速力を減して、徐行せしが。いかなる故か、毫もす／＼まず。あたりに、むれるたる工夫どもは見兼てや、こゝにポンチ畫に見るべき汽車の跡押といふことをぞ始めける。これ果して効果ありしや、覺束なけれど、兎に角汽車は無事にこの難所を打ち過ぎ、程なく新城にぞつきにたる。

そもこの豊川鐵道は、乗客頗る少く、收支相償ふや餘處ながらすこしは心配らしく思はるゝ程なれど。かの豊川稻荷祭禮の折などは夥しき賽者ありといへば、まづ／＼遣つて行けるなるべし。さてもこの汽車に乗りたるばかりに、驛長の朝寝といひ、汽車の跡押といひ、外にては一寸求め難き、随分面白きこといをも見たるなりけりとして、友と二人語り合ひ、もしあらば冠纓の絶えなむばかりに笑ふ。

新城の町中をあさりて朝食をしたため、終りて、郡長宇佐美治香氏を訪ふ。われにはもとより生面の人なれども、友なる紫石が、その令息とねなむく工科大学にあり、深く相知れ

りといふを以ての故にこそ。疾くその草鞋とき玉ひね、洗足の水はこゝにあり、團扇はか  
 しこよ、浴衣はこゝよなど、一方ならぬもてなしぶり、心ぐるしきまでなり。われ等は、  
 これより川合石橋の奇を探らむとすといへば、それもすでに通知ありたれば承知せり。案  
 内をも命じ置きたりなどいはる。それまでとはいなみたれども、聞きも入れ玉はねば、そ  
 の周旋のかたじけなきを謝しつ、案内が来るまではとて、しばらくくつろぎて物語す。た  
 ま〜一客の門に至るあり、主人は衣服あらためて出て、應接せられ、少焉して客は去り  
 ぬ。後に主人の語るを聞けば、これなむ實習のため大學地質學科の生徒どもを引率して來  
 られし、神保教授なりける。友はわれにいふ、かの五城なる同じ學舎にありし人も、定め  
 てこのあたりにあることならむが、折もよくば邂逅すべしやと。  
 案内の男は例の田舎者の悠々然たるが、とみには來らず。一たびは來りしが、日傘を忘れ  
 たりとて、又も取てかへし、十時頃漸くに來りぬ。こゝに荷物など預け置き、輕装して出  
 づ。この男飛脚を業とするものよしにて、足の早きは韋駄天にも似たり。つとめて捷路  
 を取り、常に豊川の西岸に沿ふ。このあたりの山には、林樹密生し、翠色いとも濃かに趣も

ありけるが、冬は鹿猪など狩り取るべしとぞ。

有海村にいたる。こゝは長篠合戦の折、武田方の陣營しつらひしところとかや。人家の庭  
 などぬけて頗るあやしき道をたどり行けば、黒板塀にて圍ひたる半月の地に、いとも古り  
 たる一基の墓碑あるを見る。その正面には、智海常通居士、俗名鳥居強右衛門、天正三乙  
 亥年五月十六日と題し、その左側の一面には、拙れどもこの勇士が辭世の吟、

我君の命に代る玉の緒をなといとひせむ武夫の道

といへる一首の國風を鐫し、なほ他の二面には、誰か撰ひけむやまどぶりの銘辭を刻めり。  
 短からぬ年月の風打雨淋を經しと覺しく、磨滅して讀みにくく、掌上に摸するも判しがた  
 き二三字あり。われつねに思へらく、強右衛門が圍城の中より出て援兵を求めしは、南霽  
 雲か賀蘭進明に使せしに似たりや。これは善く使命を全うして、身槍玉にかゝりて斃れ、  
 かれは進明の意の決せざるを恐り、浮屠の上の軛を射けづり、城陥りて後、賊を罵て死せ  
 り。かく求援のなりゆきに於ては同じからざるものあれど、その勇悍なるは互に遜る所な  
 し。もし唐やまど人物の對にても作らむには、よき一對なるべし。世は澆季となりはつる

も、さすがに民情は、なほ幾分のみかしを存するにや、將た忠烈の餘風人を感ずると深ければにや、こゝ墳上に來り香を焼き花を捧ぐる人は絶えずとかや。鳥居大明神とか題せし奉納の幟幾本、山より吹き來る涼風に翻りて片々乎たり。われも懷古の情に堪えかね、しばしぬかつきてぞ立ち去りし。

これより坂を下り、西北の方より流れ來りし一川を渡れば、名たゝる長篠の村なり。城址はこの川と豊川と合する所にあたり、矢の如き急流を以て自然の壑濠となし、後は丘つきなり。郵便投入函を門にかけしある一村家など、石鹽いかにもいかめしく、ろの上に立てる松の木どもは、老幹龍の如く、むかし知りがほなり、これより程近く、田廬の中に老樹の林をなす所あり、穀倉のありし址なるよし。今もなほ雨あがりの時などには、たいき出されたる焦米を拾ひ得べしとかや。なほ少し行けば、道の左に石橋あり。馬場美濃守墓道としるせり。聞けば、この甲軍勇將の古墳、久しく野草の中に埋没してありしが、さる物好のものが詮索の末、それと分り、頃ろかくはしつらへしよし。また大通寺には杯井あり。それは守城の將士、今は最後の死を誓ひし折、杯にてくみかはし、水なりとぞ。これ

は少しく迂路なれば、見ずして過ぎぬ。

晝少しすぐるころ、長篠村役場につき、しばし休憩し、茶を乞ふて用意の晝飯したゝめ、飛脚屋をかへし、新しき案内者に導かれ、またも立ち出づ。

鳳來寺山の積翠をば左に仰ぎつゝ、一里許にして大野の對岸なる寺坂とかいふ村をすぐ。一村擧て赤痢なり。かゝるところを通行する、心地よきにはあらねど、詮なし。われはさ

ままでに思はざれども、やゝ神経質の友は、いたく閉口の姿、氣の毒のことなりき。

このあたりは、わが曾て一遊せしことある地なり。そはことしの正月、秋葉より山越して大野に出て、この村にかゝりしが、今より向はむとする川合をば、草鞋の下の地つゞきのそこども、知らで行き過ぎ、月を燭に行者越の絶嶮を攀ぢ、次の朝宿の主は乳巖石橋をたづねて、夜へ越えし路を二里、この村まで戻らではと聞きたる時、地圖もちながら、これには載せぬ逕路もあらむかと、人にも問はで獨り合點し先後の次序を誤りし不覺、今に忘れず。あるじが慰め顔に、今は寒氣甚しき故、乳岩も凍りてあるべく、見時にあらずといふに、わが見むと欲するは石橋なれど、これも同断なるべしやなど、自ら文る小人の過、

遺憾なれども立ち去り、長篠を對岸に眺めすこし、豊川よりは汽車に乗りたり。されば、新城よりこなた大方は生路なり。

豊川と離れざる路は、溯るに従て盡くに足るべき佳景もありけり。ある處は河中全く石にして、たゞきの池に瓶をいけたらむ如き窪み多くあり。水は飽まで清ければ、心よげに其中を游泳する香魚など、明かに見らる。時には深潭底しれぬやう、藍色いと濃くなれるところもあり。なほ崖上處々に、小飛泉をかけたたり、洞門の穿ち入りし所などは、耶馬溪に見たる様なる大巖、兩岸にさしむかひて、屹立し、散在せる松の木ぶりも畫中のものに似たり。こはもとより一局部に過ぎず、境域は小なれども、峽意巖容頗る幽雅なるはよし。途上たえて涼風なかりしに、こゝに來れば扇たむべき程なり。たゞ愁は限なく巖間進む清水あらばこそ思ひしか。

柿平とて人家十軒ばかりある村にこひ。また案内者をかへたり。新城より川合までは六里と聞きしが、思ひしよりは多く時を費し、つきしははや四時の頃なり。直に石橋にむかひ、一溪流に順ひて上る。峽勢漸く弱り、前面には屹然たる斷崖を仰ぐ。その頂は遠くよ

り眺めても、それと知らるゝ鍾乳石の雨霜にさらされて、やゝすくけたるが、巖骨を露はせるもの、これ問はでもしるき乳岩なり。かくて石橋はその後にあれば、こゝよりは見えすどか。溪流を涉り、細徑をたづね、やがてかの斷崖に登りかゝる。すべて林中にして、晝なほくらく鼠氣身にしめど、路けはしければ、汗さへに出でたり。

導者は勢よく先に立ちて行きしが、いかにしけむ數歩却退し、いたく怯ち驚きたるさまなり。何ぞと問へば、蛇あり〜といふ。山路にては珍らしからぬこと、このあたりにすむものに似合しからぬ臆病者よと、やゝ心にさげすみたりしが、これはいたく毒ある奴にして、もし噛まれるれば一日にして死する故、名も日ばかりといふよし。見ればきたなき褐色にして、長は二三尺許あり。鎌首ふり立て、線の如き舌を吐きつゝ、殊勝にも向ひ來るを、友と二人にて蝙蝠傘の石突もて、腦天したゝかにくらはしければ、あはれやこの小さき白帝の子は、漢高ならぬわが手にぞ死したりし。導者はさも恐ろしけにその殘骸を踏ぎ、こゝを過ぎ、傍の林中に入り、前よりもさらに峻嶮なる石徑を登る。そのきはまる處は乳岩にして、川合よりは一里許なり。

乳岩は石鐘乳の大洞窟にして、洞口高さ數丈と見え、頗る大なれども、奥は割合に深からず。中には、石佛十數體を安置す。頭の上には、例の鐘乳の底鐘下垂せるがあれども、長からず。鐘乳洞としては、武藏秩父、下野出流のに比して、尙に其奇を遜れり、思ふに、洞口あまりに大なる故、風も自在に吹き込み、長き結晶を凝成せぬべし。されどこゝは一の靈地とて參賽者も少からず。石橋の名は知られずして、専らこの巖洞を以て聞ゆ。またこれと同じやうなる洞窟、五つ六つ、斷崖の中腹にあり、路なければ行き見るすべなし。たゞこの少し西にある一つは、自由に入らる。これは更に小く、見るべき程のものにあらず。

乳岩は初よりさまで望を囑せざりしかば、かゝるさまにても、落膽はせず。石橋はいかにと急ぎて登り、二三町にして斷崖の頂にいたる、身は既に巨巖の下にあり。仰ぎ見れば長さは五六間ばかりもあらむ、細長き大石の中空にかゝれるがあり。導者がこれなりといふに、こゝを通りぬけ、少しく下りて身を反して眺む。是れ長虹洞を飲みしまゝ化成せしに非ざるか、穹窿の弧形、さながら橋の如く、高さも四五間はたしかにあり。巖質は、ひか

目ながら凝灰岩と見届けたり。かの帝釋の鬼橋などとはことかはり、水に架せざるものなるを、橋といふは少し可笑しく、矢張石門といはむ方然るべくもや。これをかの妙儀山中の石門に比するに、廣狹高低互に長短はあれども、容ば相當るに足るべし。これを見る所は唯だこゝのみにかぎり、仰角あまりに高ければ、われはせねど寫生などするには不便なるべし。かねて聞きしにも勝れる様にも覺え、未だ普ねく世に知られざる地なれば、われ先づ祖鞭を着けしかの心地もせられ、友と二人互に此行の徒爾ならざりしを悦びつ。

しばしは見とれてありしが、やがてこゝを去り、前と反對の方に下る。三四町にしてまた洞窟あり、よくある名の胎内竇なり。洞口頗る窄く、身をつぼめて僅に入る。中は深くして暗黒夜の如く、この世ならぬ冷たき風の骨にしむやうなるに、蝙蝠のをのがすみか踏み荒らさるゝと思ひてか、十數羽一時に飛び騒ぎ、悲しき聲して叫ぶに、何とはなく物凄し。導者に従ひすゝみゆくに、先はつまりたりと思ひの外、通りぬけなり。こゝを出れば、すぐ下に道の崩れたる跡にや、下るには頗るむづかしき所あり。二丈ほどの高さ故、飛び下りるだけは易けれども、下は平地ならず、石徑の斜下するところなれば、殆ど術つきたる

やうに見わたるに、導者は用意せしとねばしく、麻繩取り出し、先づわれをして帯にくり付け、草樹を手がかりにせしめ、づるづると之を下す。友は次で下りぬ。導者はさすがに慣れたるもの、猿の如く巧に樹枝を傳うて下り来る。これよりまたかの蛇殺したる所をすぎ、舊路をとり川合にかへる。四山の暮色漸く暗く、輕烟茂林を罩め、佛法僧の一聲聞えぬ。

導者はわれを旅店に案内して後、辭して去る。こゝは山間の小村といへども、信州飯田への捷路なれば、旅店などなかくによし。香魚のあぶりたる肴に、水よりも清める焼酎、利目のいよきを酌むなどの洒落も、出來得べし。

次の日、川合を去り、こたびは歸路を豊川の東岸にとる。山かげは日もあたらず、樹陰いとも涼しきに、大野まで三里一走りに達す。昨日見し同じ處、今は路を異にすれば、山も水も樹もわが眼には新らしきもの、様に覺えたり。友は鳳來寺山に登らむかなといひ居りしが、意氣地なくも、山登りのあつかるべきを口實にしてやめける。

小川にいたり、山轉し溪廻る。見れば路上に一人の若者、古洋服をつけ草履はきたるが、

鐵槌を揮うて巖石を打ち割りつゝあり。友は目敏くもそれと認め、聲をかざりに呼へど、馬の耳に風ほどの通せぬ、これが奇特のところなりけり。あまりのことに近よりて、傘の先もて戯れに帽子を打ち落せば、初めて心づき驚き顧み、君かど叫ぶ。これやむかし同じく五城の校舎にありし福地のなにかし、今は大學地質學科にあり、神保教授に従てこの地に來りしものなり。われも友も豫想せしことの中りしを喜び、彼にひきとめられ、連れられて、小川なるかれの旅宿にいたる。

ひるめしもこゝにてすまし、話も盡きて登寢し、それがさむれば三時といふに、急ぎてこゝを出づ。日吉といふところに河を渡り、新城につきぬ。路は昨日よりも近く、且つ頗るよき様に覺えたり。蜂巢巖とて豊川の一奇勝、こゝより遠からぬどころにあるよし聞きしも、暇なければ見ずして止みぬ。

(明治三十二年七月)

## 斷魚溪

夜一夜、汽船と汽車とに揺られて、夢圓かに結びもあへず、廣島につきしは朝八時ごろなり。しばしいこひて後、十時といふに立ち出づ。今日は是非とも、北へ十里、本地といふ所までと思ふ心は、箭に似たる直なる道をたどる。太田川に沿へども、をかしき眺どてはなく、目に入るものけ例の赤土禿山のみ。午天の烈日焼く如くなるに、少しは避暑の氣味あるものから、ひたすらに急ぎつ。絶峻の聞えある可部峠といふはあれにもやど、面前に突兀たる一山を仰ぎ望みつ、そが頂には世にも稀れなる清水ありとこそ聞け、いで一汗流して越さむものをと、なほすゝむに、道はいつしか左に折れて、峠にはかゝらず、飯室といふ所につきぬ。地圖ひろけて見るまでもなく、道を誤りしなりけり。うらめしや、このものとは、可部の町の北端にたてたる新しき石標の、たい左濱田とのみしるしありたればなり。

こなたの道は平かなるものから、舊路に比して二里のまはりなりとか。かくて急ぎに急ぎ

て、たそがれのほど、漸く目的の地には着しつ。

あくれば朝いと早く、曉の星のなほ残れる頃に發し、六里を歩し、濱田への路と分れ、礪碓の小徑をたどり、又二里ばかり、午の頃龜谷といふに着く。こゝはすでに石州に地なり。

まづ目に入るは、草樹鬱葱として翠色流れむばかりの山、山陽とは打て變りし景色なり。われは、山陰の地を踏破せむとて、廣島を立ち出でしなり。されど石州の都どぞいふなる濱田に向はで、人の知らぬ僻境に入りぬるは、心ありてのことこそ。江川といふは石州の中央を貫流する、山陰の大川なり。その河口より浜すること凡そ八里、左岸に因原と名づくる小村あり。矢上川、こゝに江川と會す。これより南し、矢上川を溯ること六十町、溪山の特に奇景に富むところあり、斷魚溪と名づく、この川の源は二處より出で、一は矢上の奥なる原山よりし、一は鱒淵よりし井原に至りて合注し、なほ冠山よりする一小流を併す。龜谷は鱒淵の南一里にありて、一嶺を隔つるのみ。われすでに西海千里の羈旅につかれ、なほ餘勇を鼓し、嶮を辭せず遠きを厭はず、こゝ石州の地に入りしは、實にこの斷魚溪と三瓶の熄火山とあればなりけり。

この溪勝名未だ世に顯はれず。わが始めて知りたるは、親しき友のなにがしといへる男、四年前の夏、この地に遊び、歸りて語り聞かせしに因れり。彼れはいひぬ、この溪山の奇、頗る見るべきものあるが上に、一奇翁あり、井原の人、野田慎といひ、斷魚溪樵と號す、齡は耳順に近けれども、嬰鑠としてなほ壯者の如く、峻山嶮坂を行くに毫も勞せず。この翁熱心にこの勝景を江湖に知らしめむと欲し、東奔西走こゝに二十餘年、常に高門雅子の家を叩き、その來遊を求め、今は殆んど産を傾けたりとか。風懷の高士とは、この翁のことにはやあらむ。あはれ君、他日必ずこの地に遊び、この翁を見、範山摸水の仙筆もて、奇景を寫し、この翁の志を成し、かねて翁の名を百代に傳ふるを期せよと。わか今この溪山に遊ばむとするは、親しき友に對する夙昔の然諾を果さむためにこそあれ。

鯨淵の村に下らむとする前、嶺頂すでに水聲を聞く、すはや川の見ゆるぞと急ぐ。山風林樹をうごかして、涼簾耳にあり。山峽の間、地自ら幽僻、雲烟變幻看るべし。

二里、井原につきぬ。まづ野田翁の宅を問ひ、これより半里ばかり河下にありと聞きて、又いそぐ。このあたりの道路は近ごろ修築したりと覺しく、砂利もいまたふみ堅めず、道

の傍には家さへに稀なり。

兩岸に開きたる田塍、又なくなりて、溪山再び追合せむとするところ、鉾杉の立木の森あり。丘に倚りてならぶ人家五六。一人の嫗、道上の草をむしりつゝあるを見ければ、呼びかけて、汝、野田翁の家を知れりやと問ふ。翁の家はこゝより二三町下の方にあり、されど今日は深篠なる本宅の方に、所用ありて行かれたれば、夕ぐれの時ならでは歸られぬなるべし、などこたふ。時は、二時をわづか過ぎしのみ。猶ほ四五里は前に進み得べしと思ひながら、訪はむとし、人見で打過くるは、さすがに物足らぬこゝろもあり。とまれかくまれ、このあたり、さまよはむものをと、斷崖の下に通する河岸の路をたどる。一弓の閑地、老木の松の五六株たてる間に、このあたりの特有なる赤瓦屋根にしきならべたる、大きやかならぬ家あり。問はでもしるき、翁の菴なり。門扁堅く鎖したれば、かの嫗のいひしこと詐ならず。こゝにいこふこと少時、去て溪山の間を逍遙しぬ。

再び還りて見るに、かの嫗はなほ去りもせず。われ、必ず野田翁を見むとぞ思ふなる。深篠といふは、こゝより何程にや、などいふに、嫗こたへて、野田翁常に妾を戒め、佳客の



来るれば、その名を通せしむ。公は必ずや、斷魚溪を見むとて來玉ひしなるべし。國はいつれぞ、東京とや、いしくもはる／＼と來られしものかな。げに名所の名を聞かで獨り眺め去らむは、寶物の由來聞かぬと同じ程のことぞかし。妾か家にわらべあり、これを行らし、翁を迎へ來らしめ、公に引き合すべし。道のり半里ばかりなれど、坂あるところなれば、往復一時間餘に及ぶべし。その間かしの茶店にいこひ給いね、なぞいとまめ／＼しくもてなし、わが名刺を乞ひ、やがてその家にもどりぬ。

茶店の板縁に腰うちかけていこひつゝ待つ中に、はや夕くれ近くもなりぬ。かの嫗は果して使走らせしやと、すこしは氣遣ひつゝ、思ひ居たる折ふし、ひとりの老人、かなたより、來かゝるがあり。主目敏くも認め、野田翁來たまひぬ、といふ。高士の風貌、仙骨瘦せていよく清し。翁はわが來由を聞て、いたく喜びを述べられ、今日は暮れたれば、明日こそ案内し待らむ。こよひはわが溪上の小菴に泊め參らせたくもへども、所用ありてまた深篠へかへるなれば、意に任せずなどいはる。われは、また半里、村あるところまでかへるごと、いとうるさく覺、えければ、主に頼みて、つひにこの家に草鞋を解きつ。姑らくし

て翁はかへらる。

酒、飯、したる後、將に眠らむとし、しばし檻に倚る。河いと近ければ、涼風面を吹いて酔味忽ち醒む。水音沈みて靜かなるに、蟲の音かこどかましく、秋氣身にしみて客懷自ら凄。夜山を掩ふて曳きし煙の、斷間よりもれし新月の影、眉に似て細かりき。

次の朝、五時といふに起きぬ。滿峽の大霧、曉色未だ分かず。主氣をきかして、朝げ直にしたむ。かの翁は、夜明の頃より來らむなどいはれしものを、待てとま／＼遂に來給はず。朝暾すでに三竿ならむとする頃、杖を曳いて訪はれ、昨夜家にかへりし後、俄に持病の起りて、今に胸腹ともいたし。されど佳客と約せしを背くもいかゞと、病を冒して來りぬ、といはる。志の篤き、われは、謝するに辭なからむとすめり。これより、翁の家にいたるの間、昨日すでに過ぎしところなり。杉木立あるあたりより、河水西北に轉じ、俄に幅ひろくなりもてゆく。水中には沙石いと多く、清淺の水平かに誦きて、相鬨く音はさ／＼やくが如く、佩瓊憂玉、水と石とともに躍る。これは踊庭といふとか。右手はかど／＼しき斷崖にして、道はその下に通ぜり。左方も崖岸の勢漸く逼らむとするが如し。こゝ溪

口に入りぬれば、思はずでに馳せて、また見ぬ溪山の奇、髣髴として眼前に幻出するを覺えぬ。

かくてまた翁の家にといたる。翁はまづ戸を推し、われを導きて中に入れ、茶などをすすめ、菴中に藏するくさくさものを出して示さる。松韵蕭颯として檐端に鳴り、風鐸響丁東、自ら塵囂に遠し。あゝ長安名利の境、何處にかこの静閑の滋味を求めむ。

小菴の西には一道の細流あり、これは源を冠山より發するものにして、深篠川といふ。この溪谷は狭けれども、自ら幽邃の趣あり。風すしき夏の夕、飛びかふ螢火數萬點、頗る美觀を極むとかや。溪畔に立て仰望すれば、冠山、東北に突兀として見ゆ。冠山は一に不可思の山といひ、龜谷より鱗淵に越えし峠のつゞき、北に數里川本の方まで走る山脈の最高峯なり。高は三瓶に次ぎ、この國にては歌枕の一とかや。懷中抄には、なべてその不可思の山に入りぬればかへらむみちも知られざりけり、とあり。

しばし打くつろぎて、しめされし中のおもしろきものなどかきしるしつ。翁がいであ案内仕らむとて、日傘を手に、草履つきかけ出て玉ふに、われもついでに出て、直に河床の中に

下る。

こゝは兩岸すでに迫りて、削壁の高さ殆んど千尺、崖腰の斧斂波よりもしげく、壁面は拭ふ如くなるに、たゞ藤つたなどその上にはひわたり、其状さながら蒼龍の水を得て天に登らむとするに似たり。兩岸これ一連の巖嶂、幽溪の底も亦一連の大磐石、奔激の水粗糞たる土壤を洗ひ、數千年來、巨靈の雄力以て穿鑿する所。その色淡黒、昨に青色を帯ぶ。

河床の磐石、時に凹みて、缺鑿を立てたる如き所あり。之を瓶澗といふ。奔流こゝに懸泉となり、鞆々搗下し、旋流渦を生じ、その響萬雷の轟くが如く、飛沫風に散して霧を起し、之に臨めば滿身忽ち粟す。その傍に一瀑あり、綠樹の茂れる崖頂より落ち、灑々綏々千條の銀絲を垂るゝに似たり。その源は二處よりし、崖の中程に於て相合し、一となり、更に三段となりて下る。これを連理の瀑といふ。涼風四面より吹き、吟衣軽く颺り、絶て暑熱を知らず、恣眺多時にして去る。

崖上の路を取り行くこと一二町、また降る。いま、では幅一間ばかりなりし新道、こゝに盡きたれば、細徑をもとめ、蝸曲蛇行して崖を下り、瓶澗の下三四町の處に出づ。この間、

流水奔激、巨巖起伏、河床を歩む能はざるなり。

河水更に北轉し、巖峽の間、一町ばかり。たゞ見るその床をなせる太奇なる磐石は、中央に裂罅を生じたるを。幅は僅に三尺、上流に於てさへ膝に及ばむとせし程の深にて、幅半町はたしかにありし河水が、その水量のすべてを擧げて、この食道めきたる裂罅、一二町もついくところを穿通し、流駛することなれば、深さは幾十仞なるや。實に測り知るよしなく、水勢矢よりも早く、餘波つねに岸に躍る。奇絶壯絶、秃筆の能く盡す所にあらず。

これより少しく上れば小石潭あり。未だ奇となすに足らず。更に下れば、裂罅右に轉じて直に、崖腰を穿ち、缺巖怒て立ち、傲然として四方を睥睨す。渴驥が水を飲まむとするに似たればとて、駒頭渴と名づく。その間を流るゝ水は、激勢奔騰、瓶潭に比すれば更にまされり。河水また左に轉じ、峽の中央を流れ、裂罅復た狭くなりゆき、今は幅僅に二尺、流沫空に散し、霧を飛ばし雲を生ずる處、呼で岩榎川といふ。松の丸木二三本を束ねて、之に架し、通仙橋と稱す。

これより下、裂罅漸くひろく流淺くなり、水は河床全面に平かにして、時にさゝがにの脚

手にめぐりて流る。千席淵とはこれなり。遠く望めば布を曝らすが如く、珠を敷くが如く、近いて涉れば三冬雪を踏む想あり。かくの如きもの數百歩。

路を求めて右岸の崖下をめぐる。河床急に傾斜をなし、水は直に人脚を洗ふ。崖上に杭を植ゑ、危難を避くるに便す。これを箕腰といふ。仰げばいままで續きたる巖障の、こゝに嶄然たる一峰を抜きたるがあり、臥龍山の名、すぐれて聞ゆ。箕腰をすぐれば、直に一小丘を得たり。上には稻荷の小祠あり。千席淵を流れし水は箕腰を衝て、珠玉滾下し、下に明神淵を作り、淵溢れては瀑をなし、その下には神樂淵をつくる。瀑響鞋々、耳爲に聳せむとす。この瀑や魚路を斷ち、これより上には香魚を産せず。俚俗呼で魚切といひ、斷魚の雅稱またこゝに起る。神樂淵より下は河水清淺、白石璨々、水中の游鱗明かに數ふべし。前面には絶壁の盡くる所、一巨巖の雲漢を衝くを見る。楯かがらの名あるもの、これなり。かがらは方言、巖といふに同じ。稻荷の祠前、老松數株あり。幹長く枝垂れ、十畝の清蔭、滴翠人衣を染む。これ翁が私財を投じて、購ひ求め、心なき田夫野人の抜いて風致を害ふを防ぎしものなりとか。祠にいこひ、後方を顧みれば、駒頭渴、岩榎川、小石潭など雙眸

の中にあつて、一も遊匿せず。蟬聲樹上にあり、涼風壑中に起り、清爽一氣、胸襟をして豁ならしむ。これを溪山第一の絶勝とす。

翁はいふ。これより以往二三の勝地あれども、残山剩水遂に相及ばず。加ふるにわれ病あり、子を送て遠く行くこと能はず。坐せよ、われ子の爲に語らむ。凡そこの溪山の奇は、河床にあり。されば秋溪水縮んで、崖沙露はれ巖石出づるときを可とすべしや。崖上には立田姫の織りなしたる紅葉、雲錦千幅を懸けて、之を夕陽にさらしたる時こそ、心もことほも及ばぬ眺まれ。いまはなほその時に非ず、われは子をして好観を恣にせしむるを得ざりしを憾むなり。山陰は、古來忘れられし地なり、况んや僻遠のこの境をや。われこの溪を以て、天下第一とはいはず。ただ詩人畫伯の來遊すべき所、小仙寰たるを疑はざるのみ。往年耶馬溪に遊び、竊かにおもへらく、耶馬と斷魚と、兄弟の次をなすべきにあらずと。然るに山陽かれを見、誇稱して天下無雙と稱す。是に於てか、勝名一時に高し。われこの土に生れ、これを愛するや甚はだ切。しかも不幸にして未だ斷魚の知己、山陽と相當るべきほゞのものを得ず。これ老驅東西に奔走し、雅客を訪ひ、その出遊を促せし所以なり。吉

吉嗣拜山、わが爲に賦して曰く、

昨探耶馬景。今聞斷魚名。兩谿皆奇絶。二美互爭衡。耶馬以山勝。斷魚以水鳴。恍如魯與衛。難弟又難兄。遊跡恨未到。披圖已心傾。從此與君約。杖屐期同行。把杯坐露曲。尋詩步澗坪。山美探可茹。水鮮釣可烹。勝景二十四。一々繫我情。夜來魂夢裡。彷彿聞溪聲。

また嘗て圖を携へて、五岳上人をその廬に訪ひぬ。時に上人既に老い、遊ぶ能はず。一律を賦して、われに謝したり。

石州多怪石。怪石疊層巒。地險國如蜀。泉甘谷似盤。瀑懸魚路斷。樹瘠鳥聲寒。捲畫望天北。名區欲訪難。

溪山の二十四勝は、わが名を命せしもの、往年諸名家の寄題を乞ひ、歌詩數百首を得、斷魚題詠第一集を上木せり。溪の名、これに因りて少しく世に知らるゝを得たり。

この地鄙遠、物産甚だ少く、加ふるに道途頗る峻峻なり。因原に達する二三里の間、矢上川を徒渉すること六七回、深さ時に股に及ぶ。然れども地圖を按し、且つ實踏するに、道

路一條、溪に沿て南北に通貫せば、雲莖の二州比鄰の如くなるべし。われは造化が技工を  
 鍾めたる溪山の奇景を害することなくして、之を鑿開し得べきを確信し、自ら規畫する所あ  
 り。明治八年以降、専らこの事にのみ盡瘁し、之を縣會に謀り、之を知事に乞ひ、更に有  
 志者の協賛助力を求めたり。かくして産を治むるに暇あらず、時に村民の嗤笑を招き、或  
 は呼で溪狂となし、齒せざるものさへあるに至りき。たゞ強頑の性、撓挫を経て素志いよ  
 く堅く、遂にこれを開鑿するに至り、今餘すところは、溪上二里の間のみ。その初われ  
 を嘲笑せしもの、また漸くその益を知り、大に力を致さむとするに至り、工の終るは實に  
 今歲の中にあるべく、旅客のこの道を過ぐるものは、輕車に乗じ、たやすく廣島に出づる  
 を得べからむ。かくなれば、わが志、略ぼ遂げたるに似りと雖も、なほ爲さでかなはぬこ  
 ともあり。そは風景保護のため、溪上の山林數百歩を買ひ、また遊覽者の經へき溪中の徑  
 路を作ることにして、易事たる如しと雖も、資産已に蕩盡したるわれに取りては、意の如  
 くならず。願くは普ねく天下の雅客に訪へ、各人の書畫數幀を乞ひ、之を賣て資となすを  
 得む。たゞ昨妻兒を失ひ、身みづから一家の衝に當り、絶えて閑暇なく、歴訪するを得ず、

姑らく餘命を養ひて、數年の後を期せむのみ。もしこの事にして終らむか、死するも亦た  
 憾なし、而して今特に君に請ふ所は、以て少しく見るに足るの地となさば、之を江湖に紹  
 介するの勞を取れといふにあり。唯た願くは忘る勿れ、と。因て別る。

われひそかにおもへらく、翁がこの地を以て耶馬溪と比較したるは、少しく不當なるが如  
 しと、蓋し規模の大小、固より同日の談にあらざればなり。されど山陰に於て溪山の勝を  
 觀るへき唯一の地たるに至りては、敢て異議あるべくもあらず。山陰に遊ぶものは、青松  
 白沙の天橋の外、こゝに流水峙巖の斷魚あるを遺るべからず。

またおもふ、今日耶馬溪を過ぎて香海道人の名を憶ふものなく、昇仙峽に遊びて圓右衛門  
 の古碑を吊ふもの趣し。翁のこの溪に於けるまた頗る二人の爲せし所に似たるものあり。

これも亦たその忘れざるを保し難しと。或は、翁を以て名を求むるものとす。此の如  
 きはこゝ、稻荷の岡の松風に耳を澄すことをなし得ざる、しれものこのことのみ。固より、齒  
 牙にかくるに足らず。たゞ溪狂の名に至りては、寧ろ佳號たり。翁や、宜しく甘受すべし。

嗚呼狂なるかな、狂なるかな、世を擧げて混濁、黃白に眩し、名利に狂す、たゞ翁や山水

の狂、所謂煙霞痼癖、泉石膏肓なるもの、人間豈にこの大風流あらむや。しかも翁は、なほ別に仁人たるを得るもの。

われは、今この溪の勝を記し、兼てこの翁の名を傳へむとす。しかも柳州の山水を寫し、子厚の仙筆なく、黃四娘が名を千古にせし少陵の詩才なし。良朋宿昔の約に背く、また之を奈何ともするなきのみ。己まむ矣。たゞ今日この文を讀む人に向て、告ぐるを得ば、足らむのみ。あゝ耳あるものは鼎鑪も聞け、石州第一の絶勝たる斷魚溪と、この溪山の保護者、大恩人たる風懷の高士、斷魚溪樵野田慎君との名を。

(三十一年八月)



### 立山登躋録

越中魚津に着きし夜、立山の蹊路を問ひ、その詳悉を盡す。その翌早發、國道と分れ行く。と數里、迂行して大巖山に詣る。山は溪流の源頭にあり。一山皆石。挺秀竝立、綠樹之に被り、蒼潤將に滴れんとす。寺あり、中腹に倚る。近傍の幽巖靈洞、その數を知らず。飛泉奔瀨、巖峽を劈き、水聲雷の如く、樹籟之に和し、爽颯清冷言ふべからず。この地、一に千巖溪と名づく、眞に謬稱に非らず、徘徊多時、漸にして去り蘆倉寺に向ふ。

路田徑を度り、丘麓を廻ぐる。之を地圖に照する明ならず。分岐百出、揚朱の嘆を爲せしこと、數回に止まらず。然れども天幸ありて誤まらず。行て一峻嶺を越ゆ。巖石巉兀、稜角を磨し、歩を移すこと甚た艱。時は午を過ぎ、連日の晴空、一點の雲翳を見ず、驕陽光を飛ばし、萬籟正に瘖し、流汗背に浹ぬく、拭ふに遑あらず。加ふるに山を焼く者あるに會し、猛焰天を薫し、火氣面を照し、武尊駿獵の災に髣髴として、酷熱堪ふべからず。嶺を下れば、破廟あり、金碧剝蝕、風打雨淋の跡、徒にさびたり。之を問へば蘆倉寺立山の

社と云ふ。稽拜して去る。

蘆倉寺は立山山麓の一小村にして、人家に僅に數十、概ね祠官の居と云ふ。先づ事務所に至れば姓名郷貫を問ひ。止宿の處へ導くと月山等と同じ。余又た導者の賃を問ふに一日四十五錢、而かも必ず二日を要すと聞き、聊か躊躇する所あり、直に決せず。導かれて宿に至れば能州の客四人と居る。余之に托し、萬事借にせんとを約し、先づ導者を命じ、二日の糧を聚め、草鞋數足を買はしめ、合せて委托す。余は又た其注意により、綿衣の準備なきを以て、鹿紙數十枚を購ふ。この夜同舎に宿する者無慮數十人、屋室湫隘、喧囂殊に甚し。明朝早發の故を以て、食後直に寢に就く、帳外蚊聲雷の如く、夜熱人を蒸し、困窘極なし。

三更衾を蹴て起ち、盥漱を終へて朝食に就き、その終るや直ちに結束して出づ。同時に發する者、殆んど百人。村中祠官の宅より出て相會し、人毎に一炬火を携へ喚呼して進む、隊行陸續町餘に及ぶ。夜色昏黑、咫尺を辨せず、山氣霧を醸して白く、冷風面を拂ひ、曹騰の夢魂全く醒め、爽快言ふべからず。而して天上星斗を見ず。將に雨ふらむとするに似

たり。衆皆危懼す、行くこと一里、路は絶壁の上であり、脚下に水聲を聞く。深瀬石を轉し、河水の深淺測られず。一たび足を失せば水底の鬼とならむか。衆皆戰兢、薄氷を踏むの想あり。遙かに仰げば、一山高く眼前に湧き、その半腹に當り閃々の火光を認む。之を導者に問ふ、曰く、先發者の炬火ならむと。行くこと數十町、其光終に動かず、導者始めて前言の失を悟り、熊野堂茅舎の火光といふ。地は此を去ると二里にして遠し。行くと又一里、藤橋に至る、山鵬一聲天色漸く曙け、始めて物色を辨じ得べし。此地もと橋あり。藤蔓を以て牽鉤す、因て此名あり、曾て洪水の爲めに流され、又造らず。急流矢より疾く、今は徒涉して過ぐ。對岸には一高原あり、之を常願寺の墟となす。溪流一は地獄谷より出て、一は温泉の下より湧き、此に至りて合注し、常願寺川となる。試に河幅を暗算するに、三町を下らず。下流は知るべきのみ。平時は水流甚だ少く、積砂滿目、灘聲石に咽ふのみ。一朝汎濫、大浸天に稽り。害をなすと少なからず、而して治水の効、又施すべきなく、僅に一時を彌縫するに過ぎずと云ふ。

河を涉れば茅舎あり、眉雪の老翁、客を待て湯茶を賣る、休憩少時。これより以上、阪路

崎嶇、峻絶削るが如く、石片稜々怒起、鞋を破り足を刺し、一步一息、二步一喘、漸くにして登る、其尤も險なる者を材木阪といふ。石柱横に倒れ、層疊自ら階をなす、削立して登り易からず。巖角を攀ぢ、歴躡すると梯を踏むが如し。陟り終れば熊野堂に達す。即ち先きに火光によりて認めしもの、怪杉の下に茅屋あり、湯茶を賣ると前に同し。僧あり之を守る、その貌頗る瘠、夜叉の如し。此より阪路絶えざれども、險峻前の如くならず。時に平林を穿ち、峯腰に遶ふ。古木千章、天日を遮蔽し、嵐氣袖に入りて重く、鬚眉亦た將に緑ならむとす、回視すれば重巒複嶂、四面に起り、身は宛ら巖底に在るが如し。路傍叢樹の間、時に紫蕊紅葩を見る、一々名を記せず。行くと又二里、數は愁ふて、遂に觀瀑谿にいたり、荆棘を排し、岸頭に立ち、皆を決して馳望す。千丈の巨瀑、轟然として下り搗き、潭中の巖勢、開張峭削、水着くるに所なく、空に騰て飄蕩し、雲氣英英として噴出す。之を稱名の瀧といふ。佛者瀑響を以て稱名に似たりとなし、此名を負はしむ、妄誕笑ふぶし、瀑は此を距ると半里、路の到るべきなく。只囑望する耳。遺憾窮らず。行くと總て六里、彌陀原に出づ。筭全く盡き、荒草靡々、綠蕪舖くが如し。野の廣さ方凡そ三

里、之を横ぎり東向し、遂に壑に向て降る、一の谷といひ、二の谷といふ、曲逕盤折、逾よ岫、下は溪流湯々として奔瀉し、淵底には火山巖の碎片、起伏顛倒し、大なる者は數丈に餘る。二の谷より以上、險絶攀つべからず、鐵鎖に縋して登る。仰ぎ見れば一巖突出して壑に臨み、狻猊奮躍の怒勢をなす、之を獅子岩といふ。側面に小洞あり、空海の護摩を修せしところ。巖面に附して行けば、獅子の鼻頭に至るを得べく、俯して深壑の谿澗たるを見るとき、よく菜色なき者少しと云ふ。此より上は草亦た生せず、焦土炭石、脚下にあり、處々に殘雪を踏む。山麓より凡そ九里にして室堂に至る、實は十里にして遠し、時に午後四時と云ふ。室堂の在る所、舊時の大坎となす。前には白皚々たる氷河あり、衆峯肩を駢べて頭上に起り、その間に三峰を抜く。正面に雄山あり、西に淨土山あり、東に劍嶽あり、皆火山口障壁の殘留する者。淨土山は焦砂の堆積せし者にして未だ奇となすに足らず。雄山と劍嶽とに至りては、巖骨稜稜として土壤を着けず、峰尖分岐して劍戟を列植するが如く、望むべく攀つべからざるの概あり。この日朝陰午晴、此に至り又雨ふる、大霧壑中に滿ち、四顧迷



茫、山容を見ず、衆明日の事を思ひ、晴を禱らざる者なし。  
 室堂の大き富士山頂の巖窟に十數倍し、能く二百人を容る、而して此日投宿する者既に定  
 員を越え、喧争紛擾名状すべからず。導者は皆客の爲に炊事をなし、賽者は錢を納め、  
 先づ行いて地獄谷を見る。祠官板を拍き衆を集む、すでに結束して堂外にあり、時に雨益  
 暴、白羽の大箭空中に紛飛し、横風之に和して、防ぐに由なく、衣裳皆沾濡に任す。地獄谷  
 は蓋し熱泉の涌出する處、停滯して池をなす者其數を知らず。祠官衆を麾き一々其名を呼  
 ぶ、鍛冶屋地獄、百姓地獄、紺屋地獄、ふいご地獄、戸閉地獄、血の池地獄、無間地獄等はれ。近  
 いて見れば、地上の噴孔、百を以て數ふべく、大小各異なり、硫泉熱涌して黄霧を吐き、咳喘  
 禁せず。轟然聲あり、山鳴り谷應へ、耳爲に聾せむとす。祠官は其度毎に怪しげなる縁起を述  
 へ、定額の賽錢を拂はしむ。固より迷信に乏しき吾の如き、地獄谷に鬼の出ぬことすでに  
 不平に堪へず、兼て曾て修め地學に對照して考思するに、池水の色を異にするは、何物か溶  
 液を混せしなるべく、火山には毎にこの事あり、毫も怪しむに足らず。唯だ祠官の慾張り  
 は、轉た其の焦熱地獄に落つるとなきやを危懼せしめしのみ、且つや是山の如き、山頂の參

賽は、祠官の指導に非らざれば恣に爲すを得ず。之を富士等に比するに大に逕庭あり。本  
 は神社維持の爲に設けし者なるべきも、依然として變せず。遊覽の客、殊に執念き迷信な  
 き輩には煩惑限りなき事どもなり。地獄谷の巡賽すでに了り、室堂に歸り、導者の羞むる  
 熟飯を喫す。高山の常として、煮炊意の如くならず、加ふるに米質醜惡、其よく數碗を喫せ  
 しは、飢餓の甚しきに由て然る者とす。  
 夜に入りて雨歇む、細颯堂中に入り、清寒瘦骨を襲ふて耐えず。嚶乎たる巖壑の聲、山鬼  
 の嘯くに似たるを聽く、凄寥亦甚し。是に於て準擬せる紙を取り肌を纏ふと數重、又祠官  
 に乞ふて毛布一枚を借り、僅に之を防ぐを得たり、然れども仙夢屢破れ、窘甚しく、通宵  
 殆ど睡らず。  
 四更禱食して結束を成し、五更拍板の音を聞て出づ、同時に聚るもの二百餘人、祠官一々  
 點呼し、人毎に名を唱へ、次序を以て進ましむ。仰ぎ見れば頭上咫尺、天色清瑩、水より  
 も淨く、銀河一道、斜に西に傾き、露氣溥として、滴瀝雨下し。笠檐を撰ちて響き、颯々  
 たる天風、面を拂ふて冷に、清爽一脈の氣、自ら脾肝に溢るゝを覺ゆ。

群衆喧囂先を争ひ、紛雜亦甚し。余や單身衆を排して進み、遂に淨土山に先登第一の功を著たり。時に森然たる星芒は、一つ宛滅して去り、曙色天罽より生じ、一綫の陽光は死したる世界を蘇生せしめむとして、早く山巔に射かかり、紅霞は蒸されて東方漸く明け、下界入寰、鴻濛猶ほ未だ開けず、北溟の海光夢の如く、白雲迷漫、一色平に鋪き、五六千仞以上、中央山脈の喬嶽のみは、柔柔僅かに巒頂を搔け、日光之に映し、氷壺瑤界、杳茫として海陸を分たざるが如し。須臾にして遠近漸く辨ずべく、遙に淺間白根の噴煙を望む、宛として博山香爐の薫するが如し。而して正面の一方最も開豁、群山の缺處に方り、一峰の尖形をなすを望み、凝視する者良久し、整然の貌、温然の容、問はずして駿の八芙蓉たるを知る、大聲快を叫ぶ者數回。此を去て雄山の頂に登る、是を立山山筧の最高點となす。時に景物未だ變せず、北方又曉けむとし、皆を決すれば、溟渤天と連り、一髮の青をなす處、鬚鬚として物あるに似たり、儻くは是れ鞞鞞の舊地歟。岩上に立て衣袂を翳し、下に千仞の絶壑を俯瞰し、浩平たる天風に御し、神氣飛揚、恍たり惚たり、吾自ら吾を忘れ、魂や飛て造化の秘奥に參透し、宇宙の玄妙と冥化契合し、茫々漠々の中、一も見る所なく、

剩す所は虚無縹緲の元氣のみ、この時の念、この時の感、吾歌はんと欲して、終に歌ひ得ざりしなりき。

雄山の頂、小祠あり、諸冊二尊を祀る、祠官人を招いて神酒を酌ましめ、祈禱すると少時、終る者は下る。雄山の東に在る者を劍嶽となす、之に登らむとすれば復た一日を費すといふ。余や前程遼濶、客行匆忙、暇なきを以て罷む。疾走嶮を下りて忽ち半腹に到る、後れて登る者、猶ほ陸續たり。下に視れば室堂脚底に在り、厦屋巢の如く、又甞中の趣あり。登降の難易、懸隔すると霄壤も宙ならず、僅々一時間にして室堂に歸る、時に八時。

復た食に就き、搏飯を腰にして出て、舊路を取りて歸途に就く、蘆倉寺にいたれば、未だ日暮ならず、猶ほ程を貪り又三里にして上瀧にいたり投宿し、導者を謝遣す。その翌、能州の客と分れ、富山高岡を過ぎ氷見に至る。

後數日、能登の東岸を巡り宇出津港にいたり、海を隔て、劍嶽を望む、烟水遼絶、山容巍峨、真個大丈夫の氣象あり。恣矚時を移し、低徊去るに忍びず。迂行して北登に至るに及びて復た見えず。嗚呼、仙緣一去、杳然として尋ね難し、紅塵の裡、脚を挿むこと既に久し

く、  
而かも墮謫の期未だ終らず。知らず。この遊、何の日か之を再せむ。

(二十九年八月)



### 妙義山の秋

(本篇は鳥水との合作に係る)

庭梧の一葉を先だて、秋風軒に音づれしより、はや幾十日、時雨の空も近くなりぬ。人は知らじな、奥山の紅葉はいかにとれもひ寝の夢は、つねに妙義の山にぞ飛びし。

わが妙義に遊びしは、五年前の夏、淺間に登りし次の日なりき。かの折は金洞の旭嶽といふを攀ち、かねては白雲山の中腹までを窮めしのみ。こたびは人力の及ぶべきほどのところ、残さず探りくれむと、平生旅を命の天隨、友なる鳥水をそゝのして共に立ち出づ。

午後二時上野發の汽車に乗りこむ。過ぎゆく路すがら、田圃のうら淋しき景色、今更眺めすどものことなりと、殊勝にも一時間ばかりは、懐にせし書冊をくりひろげしが、いつしか倦みはて、初めて目を車窓の外にうつす。遠くは文君の肩かどぞ見る秩父の山々、虚空にふわりと横はりて、空鞍の駄馬につまれもやせむ。近くは誰か背戸の畑の影茄子、ひよろりと土に轉ひて、行く秋を錆厄丁の災難免れたるううれしき。野分の風に吹き飛ばはされて、雀の落ちたる小藪を隔て、古蒲團乾す竿の先に、夕榮の空の色いともあざやかに、折し

もわが乗れる車の汽笛鳴しつゝ走りすゝむを、菅笠かたむけて見送る農夫が手をやすめた  
る。鐵先に、入日の名残を閃かしぬ。

大宮にて、乗車の大、半は下りぬ。傍の人の商賈がたりするを、聞くとしもなく耳聳つれば、  
今や工事中なる小佛峠のトンネル、石質至て堅く、一日に一尺截り開くべき豫定のがらり  
と外れて、わづかに二寸位に止まり、いづれ山氣はみちくたる受負師は、少からぬ損失  
をなし、工事を中止したりきとや。鼻紙一枚もたやすくは得られぬ世なりけりと心にうな  
づく。ふと目に入りしは稚木の林の中に、樫四五本もみちして、ほうけたる旗すゝき、風に  
は雪どや狂ふべき。畑の真中に影うすき柿二三株、これも青女が織れる秋の錦の敷に入る  
べきかと、いと捨てがたかり。

車は飛ぶが如くして畑を横きり、藪をぬけ、時には松杉櫟榎の林を貫く。秋風居酒屋の細  
暖簾を動かしてより、綿白く、蕎麥の花白く、脛わらはなる賤の女が小流に洗ふ大根も白く、  
空尻の馬追ふ男の吐く息また白からまし。たいわれ等が詞髪未だ幡からさるを幸とせむ  
か。過くるところの停車場、李俵綿俵ことに多く積まれたりき。

深谷を過ぎて、赤松多く、小徑の生ひ茂れるを見る。光氏が陋巷に賞せしと聞く花の實りし  
烏爪、その蔓ながら延びて、路もせに倒れたる石地藏の尊體をくゞり、石塔をめぐりて咲  
ける蓼の花のくれなゐと摺り合へる。をかしくも又哀れなり。

それより先は、桑畑松林などにて、行けどもく果あらばこそ、礙る隈もあらばこそ。土  
堤に野菊のたいひと本、薄紫のゆかりの色をいつくしみその昔、南は多摩川、北は荒川、  
東は隅田川、西は秩父甲斐が根にわたりて、十郡に跨れる武蔵野の、風蕭颯として尾花波  
寄る五百年前を冥想しぬ。日虞淵に没せむとして、夕の雲は滄溟に湧く八百潮か。うす墨を  
流せる中に、一條の朱を拖着て燭の燃せらむごとく、草鞋焼くけふり幽にほの白く、残る  
蚊、煤烟と共に風に吹かれて窓に飛び入る。いさゝ村竹しげきところ、鎮守の森のこんも  
りどせるところ、淺茅生や、露のかゝらぬ草もなかるべうおほえて、肌さむし。  
本庄神保原を過くるところ、われ等は雲の卷舒の姿態と色彩の變幻とをのみ觀してありける  
が、初めは山吹の黄金色なりしに、裾より消えて唐藍のぼかし色となり、又葉鶏頭の赤みた  
らむが如き茜色さし、やがてすべの色は蒨黄色の大風呂敷につゝみこまれぬ。神流川の鐵

橋際くひまに馳せ越え、天の低るゝあたりに横はれる暮山朶朶、眉睫の間に飛ひ到らむとするを目送して、新町をすきしは五時半、早くも認めけり村家の灯兩三點。かくて日全く没し、山も、水も、野も、畑も、混沌たる夜色の中に葬られて、鉛筆もつ手もと定かならぬば止めつ。汽車、高崎に停まる。

こゝにも慌てふためき前橋行の列車に乗りこみ、しばしは人々物笑の種となりたるわれ等、常に似ぬいみじき失態なりけり。輕井澤線は一時間も猶豫ありとのことに、二人は市中をそいろありきす。都にはなかるべく珍らしきもの見付たるは、牛肉屋と汁粉屋と兼ねたる一軒の家なりき。かくて七時頃停車場に馳せもどり、又汽車に乗る。

月なき夜のしかも陰りたる、天地たい窈冥、烟嵐咫尺に迷ふ妙義の山も見えず、碓氷の清流たい水聲を聞くのみ。凄寒衣を透して、おほへば窓の戸を引き上げぬ。

松井田にて、車を下る。今は蕭然たる破驛、むかしは仙道の難關たる碓氷の要路に當り、君侯橋輿に上れば、左藩雲を披いて入り、前驅騶を拂ふてすむ。喝道の聲いかめしくねり行きたる大行列、日ごとに追隨したりし全盛も、無常はひしく暮山の鐘、有限は朽ち

ぬ幽壑の雨、行旅の鞋痕、日に稀れに、さしもの周道、鞠して茂草となりはてつ。知るも知らぬも夜寒の一つ火桶を擁し、腋を枕にして驢話せし羈旅のをかしき、今こゝに見るべくもあらず。いたく寂れたるものから、さすがに今日は町の祭日とて、頬冠の若者、華奢なる女性とつれ立ちて行くも見ゆ。樓上誰か家の蘇小テ、媚めきたる三味線に、唄ふは今やうの一ふし、鄭衛の淫聲なぞいひて賤しめ退けむは、むかしめかしく頑なるべくや。

驛外れまでさまよひて、とある家に宿かる。夜すでに更けて燈心の吉丁子をむすぶところ、旅なれや、温けからぬ垢しみたる煎餅蒲團にもぐり込み、暫くは妙義をかけめくらむず魂をつむ。木枕いつもなから、いが栗頭にいたかりしが、結びし夢はちそろく向ひの家の黒漆蒔繪の塗枕の上のよりも清かり。この夜、小雨そぼふりし。

(二)

昨夜の雨、いつしか霽れて、朝日ほがらかに椽側近き手水鉢の影の障子にさせるに驚き、衾を蹴て起ち、支度と一の宿を出でつ。町の中ほどより、南に折れぬ。桑畑の傍に炭部屋ほどの木戸口をしつらへ、村芝居にはものくしき看板、何ぞと仰けば、さても銘打た

りな、東京大歌舞伎。

畑に傍ふて下れば、碓氷の清流あり、浮梁人の渡るときに振盪して、心を揺かす。満目積沙、碧水その中を穿透して、さしがにの蜘蛛にめぐりながる。橋を渡り畢れば、茅屋蕭條たり三兩家。この地、寒國の習、屋根板釘することなく、上に拳石を載せて、瓦を敷くに代ふ。毎戸いひ合せたらむ如く、粟の實を珠數つなきにして、軒につるしたる、正月のそなへ物にせむとてなるべし。鶏の米俵つゝくを人の追はむともせざる静けさに、心しづかに句など案して、川に沿ひ仄崖を上り。汽車道ふみ切りて桑畑の間をたどれば、夜へは見さりし妙義の三山、峯尖分岐して劍戟をづらね、截然屹立して、峻峭の大屏風を豎て、白雲屯まりて流れず。二人杖をふるひて天を劃し、大爽快と呼ぶ。

路左に岐れ、烟草ほしたる家の側より、又右に折る。土地やうやく高し。見渡せば松井田より以東、平蕪幾十里、權程正に熟して、黄雲滿地、みのりよき秋や、小娘にぬだられても晴衣新調してやる人、そこらに多かるべしと、よそながら豊作を壽く。道は眞直に志す山に向ひて、右は竹藪椎森、左は庚申塚、廿三夜塔、稻荷のよろけ鳥居などを控え、坦々

として砥の如し。白雲山の中腹に、白蟻の躍るが如きを、眼鏡二つかさねて覗へば、これなむ音に聞ゆし「大」の字なりける。

夜ならば月明露麥花如雪と、古人の句にても誦しなむ、このあたりの景色は、この七字に盡きて、しかと手帳を懐に收めぬ。

路傍に菜莢の枝の、未だ紅珠累累たるに及ばざれども、つれなの秋風披拂して、摧けたらむごとくに縮ぬられ、大地に倒れたるを、杖の先にて擡げ起したるに、俯くこと初の如し。露の恵が重いか、人の情が軽いかと恐して過ぎぬ。一村家の破れ籬には、菊の花今を盛りと咲き匂ひたり。黄菊紅菊は花賣の籠こそよけれ、七寶の瓶こそよけれ。かゝるところに白菊の月藍霜葩、ことに品高く色潔し。天地岑寂、二人の話し聲の途切れたる間の拍子と

り、桶のたがにてもうつか、槌の音山に反響し、篋に鳴動するいと興あり。向上る三山の中、金洞山は半腹より以上、磨剝削成して雜樹を生せず。金鷄の巖は猿の手を掉るがごとく、羊の頭を低るゝかごとく、松樹列生、さながら馬鬣に似たり。白雲山は「大」の字あたり、櫛か楓か、鮮紅燃えて燦のごとく、しかも山は今にも裂けて飛ばむとぞ

すなる。近づくほどに山は次第に低くなるやう覺えしが、一叢茂き篔竹の間を歩き、古道  
 黒門に向ひて、左にまがれば、やがて妙義の町に入りぬ。  
 あばらやの垣にからみつきたる朝顔の花、日にく小さくのみなりまさりつ、それも照ら  
 す日影のつれなさに、大方は凋零したれど、残れるは粒々くれなるの露を宿せり。翻れて  
 はこれも常の水かや。紺の筒袖、甲斐くしく裾を端折り、髪も油ぬけてそけけたる世話  
 女房の藁草履つきかけ、みちては溢る方形の溜井の側に踞みて、米磨くを見てあれば、さい  
 めかす白水は、落英をのせて窪溜へと流れゆく、そこにとままれる花の行末ぞ、いたまし  
 き。喉乾きたれば二人とも樋に口をあて、飲む、甘冽いふばかりなし。あはれ伽羅にて飯  
 を炊き、酒をながし水に使ふてふ貴人に、この眞清水、一樽盈たして貽らばやな。  
 町には、妙義山大杉の苗木など鬻く家あり。又その隣には十文錢の形したる看板中央の孔  
 をかこみて永良久屋とかきたる、兩換屋にやあらむ。杉葉の毬をつるしたる又六の門は、  
 今に猶は鄙の片田舎にありとこそ聞け、かゝる看板はまた珍らし、種彦の用捨箱に擧げた  
 る質屋の、たぐひにもや。

この町、むかしは人家どころ狭きまで軒を列ねたれば、三間間口は許されず、二間間口の  
 家のみ、齧を折に詰めたる如くぎし〜と推し合ひ、黒門大門より梨の木村までうちつゝ  
 き、巫女伶人など夥しくて、賑はしきこといはむ方なく、又そが舞を神殿に奏する時よ、  
 黒髪長く束ねて、緑衫を着け、朱袴を穿ち、うつや鼓、振ふや金鈴、一進一却、手舞足踏、  
 肅々として狼籍たらさる古雅の趣、都下靚粧のたをやめが、吹彈嘈雜につれて踊るに比ぶ  
 れば、却て鄙ひさりしとかや。

菱屋といへるにいこひ、案内者をたのみけるに、けふは朝まだきよりお客さまのお伴して、  
 出拂ひたれば、無しといふを、強ひて頼みて、やうやく一人を奪ひぬ。今日高崎の殿様、  
 一族を拉して來らるべき筈、その嚮導として殘し置きたる四人の中より、すぐりたるな  
 り。やがて隣々たる車聲近くありて、殿様の一行、轅を列ねて到る、亭主奴婢一同出迎ひ、  
 僂僂應唯、太だ恭しく、椽先に草鞋の紐結ひ直してありし五六人の書生に向ひては、あな  
 た方、早くそこ退いて下れど、俄に蠅とぞ追立てたる。秋の扇と捨てられしは、長信宮裡の  
 女ばかりにはあらざりしよと覺えて、これも哀なりき。

## (三)

案内者、名は乗吉、三十あまりの逞しき男、金洞山と背に染めぬきたる紺の絆天を引掛け、菱屋より齎らしたるわれ等の行厨を袋に入れ、二雙の草鞋を結び合せて、しかど腰にくりぬ。妙義神社の石階を仰ぎつゝ、之をのぼらで左へ折れ、行くこと幾許もなくして、路岐れ、上は金洞、下は金鶏。下なるを取り、老杉暗きところをたどり、栗の毬の落葉を刺して轉げ合へる窪溜を踏み越え、右の坂へと下りける。石田礪礪、つくり物すべて瘦せたり。

かくて一方は畑、一方は椎木林の間を盤折して行く。こゝまでの處、岡坡一望たゞ索然。風なきに腐葉の靜に枝を辭する音を聞きながら、松の緑、樺のもみぢと錯れる金洞山麓を右に仰ぎ、左には金鶏の峯尖ちかく聳えたり。路は芋の如く、瘤の如く、朝の如くなる小山を負ふて行く。しばし穿ちて過ぎし椎木林、秋葉漸く老いなむとして、翠色すであせ、紅あり、黄あり、樺色あり、毎樹の葉色同じからず、佳趣たどふべきなし。脚下たちまち水聲を聞く、路は溪流より高さ三尺の名のみ埜の上にあり。埜窮りて徑に尋

礪の巖石あり、大狗小狗の咬み合ふ合く輾轉する間を繋りて、瀬聲いと聒しく、いくたびか曲折したる後、俄に一頓し、水化粧せる紅葉の影をかき亂して奔れば、灼々たる碎錦、そよと吹く風に篩はれ、行く水を追ふて低く飛ぶ。この溪流は高田川となり、富岡にて鑄川に注ぐといふ。

溪を涉れば、爪先上りとなりて、傾仄せる崖をのぼる、水韻やうやく遠し。やがて山盛り路また窄く、人はいつしか茂林の中に入りぬ。雜木を力まかせにぬぢ伏せ、脛となく、襟元となく、片小鬘となく、蚯蚓張いくつか俯りて、路を拓く。幼きころ天狗草とむいひならはしたる蔓の、牛の鼻麩の如く、わが顔に絡まりたるをかなぐり捨て、椎の實礪の如く頭をたゞしきも何のその、呐喊して林をぬけ、乾きたる馬糞をふみて、や、開けたる小原に出づ。見わたす限り、秋の千草は、廣袤を知らぬ花筵をひろげ、苔の中明けても見まほしき桔梗、濕りがちな鼠尾草、鄙しからぬ馨ある藤袴、その他の紫葢紅葩、一々名を記せず、しいと鳴く蟲の音、いと哀なれるなごゝあるに、黄なる蝶わが肩にとまむとして、又高く飛び去りぬ。



身は、金鶏の山腰に立てり。この山の絶頂を吾妻山といふとか。石皴巖脈、さながら銅佛の缺片を鉛にて繋ぎ合せたる如く、怪特峻異、その比を見ず。鳥旋りて流星の如く、雲行きて白氣の上るをその儘なり。やがて絮の如くなれる一塊、咫尺の間に滾け來り、展びて紗と化し、山上さくやかなる石の祠を三匝するよと見えけるが、須臾にして一陣の天風と共に、又空に騰り飄蕩して去りぬ。山崖の裂拆よりは、參差たる赤松五六株、或は聳立して天を指し、或は俯曲して壑を瞰る。よし寒流石上のものに非ずとも、いかで倦鶴の翼をやすむるに堪へざらめや。

なほも山腰をめぐり、捷路を出で、遂に本道と合す。この路、すこしは峻なれども、本道よりは十町あまり近しとか、桑吉まづおのか功を誇る。

こゝ菅原村のはづれ、金鶏山のふもとなりとぞ。檐低くいぶせき茅廬、たゞ一戸あり。さすがに人のすみてや、烟細く窓より颺る。床垂れて地を距ること僅かに下駄の高さほどなるに、腰うちかけつ。仰げば荒壁に大きな鎌斧鉋などをかく、問はでもしるき樵夫なるらむ。行く秋を麥喰らす大男、可愛や世辭を知らず。おうなは、ぬからすして世のつねの

接待に慣れたり。大木の根を無器用にえぐりたる火鉢すゝむ、風流なり。

(四)

帝、巨靈五丁の力を合して、女媧が鍊れる五色の石を劈破せしめ、之を上毛の地に置く、雨鏤雪刻、こゝに幾千年、今になほ香淡を衝いて、峻嶒玉立す。五色の山、これなり。赤城といふ、黒瀧といひ、白雲といひ、金洞といひ、金鶏といふ。赤城と黒瀧とは遠し。他の三山のうち、いでや先づ名にしちふ金鶏の背に跨り、颯々太清を凌ぎ、風に仰し、冷然善を稱して反らばや。

憩ひし茶店の前、御嶽神社より右に折れ、木の下くらき苔の細道ふみ分けて、喘きく上れば、はや二合目、中澤駒吉といへる老人の銅像あり、この山、登蹻の路を拓くに功ありし人といふ。山は登るに従ひ、漸く峻しく、石みな挺秀、人々辛うして膝行す。中ほどこの山を創めたる僧なにかしの石像あり。香火久しく供せず、堂は風に吹きとられて、今は影たにとめず。なほのほれば少しく平なるところあり、三笠山といふ。不動明王の像に倚りそひて、われ等も暫く氣を吐きしが、これよりは乾瀑類摩など、山中有名の難所ありと

聞き、剛の男不覺を取りそと、いまいで放たざりし鉛筆と手帳とを懐に收めて程を繼ぐ。法螺立岩、稜然たる六面の圭角、高さ五六丈、纖微毛髮の如き雜草を縈ひて、骨立瘦峙せる怪しく奇しき大石柱を仰きて、五合目にいたれば、こはそも如何に。山頂近きところ、白き園の、雨ふらさるに、俄に生したりと見ゆるが、靜に蠢き初めぬ。熟視すればわが一行に先んずるもの五六人、白襯衣一枚の肌ぬぎとなり、縦に一列を作り、千早ふる神の削れる石骨の回梯を傳うて、行く末は青ぐもの空に登るかど怪しまれける。かしここそ八合目乾瀑の峻なれと桑吉の語るに、互に誠めて、力めて危懼戰兢の念を抑へ、手を石の癪あるものに、踵を巖の角あるものに托して登る。巖石の質、幸に粗脆ならず、僅に一命を全うせしものから、若し石柱横さまに倒れば、人は卵となりて潰れけむものを。

七合目八合目にしたれば、奇峭峻異、言の外、字の外、圖の外、やがて乾瀑の絶嶮にいたる。雨ふらば懸泉天より瀉下せむず瀑身を、蟹の横這をそのまゝに、よこぎるなりけり。さしもの天隨、逡巡して獨り進まず。汗流れて踵にいたり、伯昏無人にさいなまれし列禦寇もかくやと、よその見る目も氣の毒なり。桑吉心利きたる男とて、その襟をつかみ、

帶を曳き、聊かにても怪我あらせむと力め、漸くに越え了りける。ほつと息つき、汗ぬくひつゝ、天隨自ら辨していふ。われ曾て陸羽境上の船嶽の奥深く、第二回の探險を試みしことあり。その折、一大瀑の側なる懸崖を身をかすめつゝ攀ち登りしに、未だ半にも達せざる前に足を失ひ、十丈近きところ、より瀑下の深潭にさんぶり陥りこれより後、怯氣つきて、かやうのところ、常に越ゆるになやむなりと。是れ非をかさる小人の言にもあらざるべしと、みな人ともけうなづきぬ。

これより九合目を過ぎて、十合目は頂なり。初は足をもて上り、半にして手をもて上り、はては竟に膽一つをもて上りぬ。やがて吾妻山とて、金鷄の絶頂、一笏の平地を剩すところに踞し、大木の切り株に脊を倚せ、松井田の人烟、菅原天神の森を瞰る。松は苗の如く、田は碁盤の目を刻みたらむ如く、眼下の岡や、巒や、この山を顧み、走りて僵れ、僵れてなほ且つ避けむとす。南の方は秩父の山々、甘樂二郡の重巒層嶽、波のうねりに似て、縦走横奔、しかも脈絡明にして、之を掌上に摸すべし。少しく西にむきては荒船山、内山峠、瀧澤峠など、十里の外に苗乎として、空に尖筆を挿む、桑吉に向て山の名を問ひ手帳取り

出してしるさむとすれば、雲絲縷々として、缺山を補ひ、斷峰を庇ひ、俯仰の間、氣象萬千、髣髴として、空中白衣の人蒼狗に跨りて走るを見る。やがてまた拭ふが如く消え去り、一碧の秋空、清澄初の如し。顧眄して北に向へば、金洞の傍、嶂巒峰、欹峙して形貌一ならず、磬確、駒にして、皴あり、幾千萬本の鐵塔婆を斜に束ね、鋸にて挽きたるに似たり。天地寥廓として山河遼曠なり、乃ち自ら茫乎たる我を叱していふ、汝何ぞ膽きこと春秋を知らぬ、螻蛄の如く、迷ひ易きこと花の香を追ふて飛ぶ、蝴蝶の如くなるかと、然れども奈何せむ、造化か揮へる鐵槌の下には、いかなる詩人のペンか折れさるべきを、おもふに粉華の地、膏梁の子弟、柔き都の土を踏み出つること一歩なれば、むごや芳菊に霜をいとひ、幽蘭に風を忌む。それにくらべて猶ほ勝れりや、こゝ巖頭に立てる乾坤無住の男ふたり。

われ等の憩へる巖を隔りたる缺崖に、洋服着たる男ども、手巾打ちふりて、しばしば呼び招きしが、やがてかたよりそ近き來る。この人々こそ、さきに園と誤られしは、襯衣の白きにて知らるべく、曉早く金洞山中の霜をふみて、今こゝに到れりぞぞ。小き鐵槌を腰にしたる、地質學など研鑽する人にやあらむ。これを近縣中學の教師と見たる、よも辭目

ならじ。

この金鶏の山麓に、世の人多くは知らぬ大洞窟あり、やつがれ一人にて御案内いたさむは、頗る覺束なければとて、さも大層らしく柔吉は語りつ。教師等の率るし導者と諮り、二組一つになりて、探險することに定めぬ。さて山を下るに、前の路とは異にして、蹊をなせるどころまでも、土質粗鬆、趾を着けむよしなく、もし一たひ顛倒すれば、木を推き石を蹴りつゝ、はてはそこの巖に頭をや裂き割らむと、そゝろにあそろし。片手巖といへるを肩を欹て、招りぬけ、やうやく下りて洞口に立ちぬ。導者はかねて用意したりと覺しき蠟燭幾挺、袖の中よりさぐり出し、火を點し、同勢この時すべて八人、尾長猿のつながりし如く一列となり、燭光をたよりに、匍匐して入る、洞は次第に狭くなりて、滴る清水首筋につめたく、眼鏡くもりていよゝ不便なり。烏水はやをら蠟燭もつ手を延ばせしに、烏羽玉の闇はあやなし、その先に蹲れる教師の洋服、尻のあたりに錢ほどの大さある燒焦を作りぬ、あな熱や、こは地獄の底か、水火の責に遇ひしものかなと、わめきけるに、慌てふためき急ぎ退かむとして、自ら頭したゝかに巖天井にうちつけたる、爵は靦面の程こそお

そろしけれ。

長さ十七間五尺、その窮まるるところに穴あり、梯して下る。こゝよりやゝひろく、又行くこと三十一間にして、行止りとなる。そこに溝の如き池あり、水は斜に石根に穿ち入りて、深さ三丈七尺とかや、試に杖をもてさゝめかせば、草鞋の底をひたして、冷は腦までも泌むめり。そのまゝ「廻れ右」して、元來し方へともどる。導者は恭しく、燃え残りし蠟燭を洞口に立つ、こゝ御供岩といふとぞ。按ずるに、この洞、蜂房蟹穴、淺小にして而かも人工を加ふ、細記するに足らざるなり。

不動行場の瀧をながめ、大杉に注連繩はりたる下をくゞりて、先に慰ひし家につく。烏水は帽も上着も泥塗れにて、只今溝より跛ひ上り候といひたげなり。こゝにて行厨を平げ、なほしばし休む。かの教師の一隊は、白雲を除いて外の二山了りたれば、歸らむといひ、一揖して別れ去り、われ等はこれより、金洞山中溪壑の奇を縦觀せむとて立ち出てぬ。

(五)

こたひは、御嶽神社の前の路を左へと上る。路を挾て、凋樹廢葉相仍るところ、小禽のどか

に嘯り遊びけるが、山おろしほどに、人の蹻音を聞きけむ、灰吹く如くに驚き起つ羽音さわかしく、扶疎たる秋樹の黄一葉、ひらりと舞ひて、鎌の痕あさやかなるひつそぎ竹に最期をどげいる。

路回折して一上一下、左は自然斜の谷をへたて、恢然たる平野に向ひ、當面には金鷄の支峯筆頭山といふを仰きつ。林をいくたびか出沒して、下り坂に向へば、下仁田道と合す。野菊一枝を手折りて襟に挿み、炭焼の烟ほのくと白く颯りて、未は天半の白雲となるかと、心もさらに雲の形容なを案しつゝくる折しも、烏水は栗の毬に踵を刺しければ、路もせの草を翻きて、暫らくは草鞋の紐を解き、足袋をぬぎなどする間に、天隨と衆吉とは烟草くゆらしつゝいこふ。風一陣さつと吹く音して、木の葉の上を轉び落ちし露はらく、かゝるときや椎の實こそ欲しけれ。

やがて金洞の麓に出づ、道路太た礪礪、平地置ければにや、藪を刈り盡し、一わたり焼きやがて畑となす。蕎麥の花の白く咲きたる、この爛土より生へたりとは、見えずかし。賤が伏屋七八戸、桑畑の中に見えかくれてありしが、近づけば木を挽く男の小唄、鋸の音に節をか

じくも聞えたり。

仰げば右に金鶏の山、僅に鬚頂を擡げたるが、斜に見ることなれば、巖の奇峭はかくれたり。金洞の崔嵬嶮巖、巨人の如く前に衝き立ち、その頂は奇石嶮巖、骨立條々、槎枒たる古木拗曲して、斷刀缺鋸のごとく、石を穿ち、石また躍然として首を昂け、爪を張り、互に搏噬し、白雲石罅に盪入すれば、依稀僂として將に無からむとす。この山脆からざるに、洞をなし、窟をなし、竅をなし、穴をなし、門をなす。石門凡そ十五、六は大にして、九は小。大なるは名たる金洞四石門の外、百合若射貫岩と星穴とを算す。四石門は到り觀ることを得べけれども、他の二は天霽る日、横川驛前より遠望し得るのみといふ。九個の小石門にいたりては金洞山中に散在して穿たる。その一たる級戸穴をこゝより望むに、僅に隙あるばかり、巖棲の仙客、明を取らむため、故らに牖戸を半ば開きたるか如し。その他の多くも望むべくして、到るべからず、又た奇となすに足らざるもあり。

長阪上りつくせば、武尊廟の入口なり。しばし社務所にいこひて、繪圖をもとめ、やがて又立ち出で、先づ拜殿に賽す。亞鉛葺の屋根、うれしからず。奥院の社にも詣でしか、今

は焼亡して殘礎を募索すべきばかり、その後なる斷崖の半腹缺けてくぼめる處、「運だめし」の岩とて遊覽の客は石を投げ當て、吉凶を下するなりと衆吉の語りき。右手の神代櫻咲き匂ふ春や、淡雪のごと、捨てがたき姿ありとこそ聞け。

これより苦むしたる石燈を、膝の關節いためて上り、巖より巖を傳ひて、西山狹といふ名のみいかめしくて僅に臥牛の大きな石を跨ぎ、兩の腕に力をこめて、巖面に垂れたる鐵鎖をたぐり、肩は重く足は軽く、鬚摩岩に這ひ上りて、一息つきもあへず。なほ上ればとて、二尺どはあるましき石罅を身をつぼめつ横足にすりぬけ、更に鐵梯を踏で旭嶽の絶頂に上る。こゝには石人を祀れり。俯瞰して初めて知る、峭峰千尺、身は今飛鳥の上にあることを。凡そ巖といふ巖はこの一峰をめぐりて、了鬚の趨臨するかとあやまたれ、葛籠岩、鞍掛岩、烏帽子岩、雙見岩など、さながら玉笱の春烟に湛えて簇列するが如く、削成して尖り、すべて土壤を着けず、雨黒雪白石髓までを洗滌しながらも、さすがに秋の小草の毛髪を微風にそよがせて、谿底に臨みつ。ねぢけ性の灌木、まけしものをと根を石に張り、枝を石にもたせ、躍りて相迫り、石と石と瓜剖再ひ合して樹を抱き、樹多く天に參して霜を浴び

紅なる、黄なる。半は青く半は黄なる、凡そ秋の色といふすべての色を雜糅して、鬱然然。久しく佇まむは眩暈のうれひなきにあらねば、二分の景を領して八分の秋を剩し。又梯を下る。誰か捨てたりけむ飯粒のねばりつきたる竹皮を捨ひて、試み放てば、颯颯として吹き下し、大地に落つるまでには幾許の時をや費しけむ。さばかり峻しき旭嶽にはあれど、嶽といはむは、岩といふに若かす。且つこの巖、高さ高さ、この上なしとはあらず、ましてその他の子孫をや。かくおもひつゝ地圖を按して、中の嶽の絶頂いづくにあるやと願みて、衆吉に問ふ。そはこの頂上の又頂上なり。輒く到り待べきにはあらねど、ともかくも路は拓けてあり。可し、往矣。

これより熊笹踏み分け、樹枝へし折り、藤かつらの絡へるをしごきて上れば、灌莽人よりも高く、頬を刺し指を傷く。苦しさいふべきなけれど、かたくな男のいかで半途にて引きかへすべき。これも十五石門の一なる八丈の窟といへるに少し憚ひぬ。石門といへど、實は巖窟にて、上下二穴相通す。碗碗礮礮、手足を托すべきところなければ、巖面に點々たる疣を手がかりに、且つは足ばに、僅に上るを待たりき。

やがてこの窟を出で、又喘きて上る。鬱たる茂林、日光一綫、秋葉疎なるところに隙を索めて、濕りたる巖ひば杉苔の上に穿射す。背には汗あり、眼には塵あり、路は峻にして、人はすでに疲れたり。中にも烏水はとてより蒲柳の質、いたく困難の態なりしが、今に及びてこの五尺の真皮袋を惜みて何かせむとて奮勵し、相呼び魚貫してすゝむ。迂回曲折して上ること數十町、やうやく金洞の山脊にいでたり。

人もし高峻を説く、富士可なり、立山可なり、白山可なり、されど截辭を説く、おそひらくは金洞の尖頂を第二指以下に屈することをえなさるべし。巖石巉兀として峻嶒屏立、秋嵐暗くして木々の枝條を拂ひ、路いくたびか絶えて、小猿の通ふ石の回梯、天にのぼり、掛樹紫潤して峭壁を擁せり。鐵鎖に危一髪の命をつなぎて、胴も足も石の稜角を離れ、石の鋭あるものに頬を摩して攀ち上れば、別に又鐵鎖あり、之を手繰り寄せて、漸く絶頂に上りつぐや、瑰奇なる丈餘の平巖に簇生したる深山躑躅、菌の如くなる上に蒲伏しぬ。馳望曠觀、しばらく時あり。われ等は初めて身の高に在るを覺りぬ。信甲の地、火山岩脈と花崗岩脈と錯綜交絡して起したる亂山頽峰、さなから紫驪の汗、血を流し鬚振ひつ走るか如

く、僣るか如く、淺間山は香象の踞れる如く、さすがに麗偉なり。その前に當り、碓氷峠を控へて荒船山につゝきたる支脈岐峰は、駱駝の背の如く、高低起伏して、黒瀧の山尤も峭拔、近くは西本嶽を右に侍らし、白雲山の缺壁を左に擁す。第四石門のときは、兎の眼よりも小に。蟻の戸渡岩は、人の拊指より大ならず。さきの上りし旭嶽巖磨岩など、眼下千尋の底にありて、拳の如きのみ。こゝ尖頂は海面を抜くこと殆んど四千尺、三山の中の最高處とかや。されば金鷄の急峻、この下にあらざといへども、溪壑の奇を俯瞰する眺望は及ぶべくもあらず。折しも朱霞一片、天の半面に滲すと見るや。東方八州の大野、暮靄漸くに曳き、西面信甲の遠山は、眞紅に凝りて、瑤界杳茫たり。觀すでにつきぬ、好し颯として、雲を追ひ、霞を踏んで旋らむかな。

これより前の鐵鎖二條に縋りて、もと來し坂を下る。途すがら柔吉は渥丹の如き紅葉一枝を手折りて、滿山の秋を半肩に擔ひぬ。かしとき大内山の掃除のとき、酒陵めし衛士のみ風流を解する徒にはあらずしよ、爲仲ならねど長櫃に打入れて、都のつとにせまほしや。下る路は、今更に枯枝に欺かれて身をまかせたるころ不覺なれ、手許よりほきと折れて、

俯向くや、爛沙をかつきて投げ棄てられしこと二三間。起きつ轉びつ、起倒流とやらいふ柔術の秘奥を極めつゝ、さしもの峻山を一息にすべり落ちける。

(六)

社務所にかへりて飯を乞へば、少女膳を捧げ來る。ふさくと切り揃へたる黒髪にこやかに頬にかゝりて、愛くるしき眼さし、深山にも咲く姫百合の苔の姿ぞなほ初々しき。おもふ舞衣をかつき、緋袴をつけて勾欄に倚りかゝりたるとき、晝にいかに。隣室には書畫を多く壁に挂けたる、この山に遊びたる風流人のすさびにやあるらむ。

玉稜の瀧見むつもりなりしが、こゝより西へ半里ばかり、今は草ふかくなりて路なしと聞きければ、罷めつ。こゝを辭し、上の坂を半町ほど行き、左に折れしが、忽ち突兀として峭立せる一大石門を仰ぐ。第一石門の名あるもの即ち是れ。高さ九丈、幅七丈、門にして山、山にして石。刃割して土壤を着けず、狂ふは嵐か、あびるは霜かや、松は根を石罅にもたせ、倒に拗り、豁底よりゆるき出てたる怪石の重複亂立せる壓きて、暗啞叱咤せむとし、その門の楣ともいふべきあたり、石髓自ら怪醜、名狀しがたき奇文を彫れるところを隔

て、土精の凝れる如き三巨巖、相揖して人立せるを近く望む。大蠟燭岩、小蠟燭岩、鼓岩といふ。大小蠟燭は筒の並び立てる如くなれども、鼓はや、離れ、頂俄に平たく磬折して、釘の頭の太きに以たり。或はいふ第一石門の穹窿、些か人工を加へたる痕あり、と。鑄掛屋は鍋釜の底をこそ繕へ、三井寺の洪鐘には手を觸れぬものぞ。さるにても、いかにして登攀を企て了しけむ、いぶかし。

第一石門の側を上ること一町にして、第二の石門あり。形は烏角巾を折りしか如く、上は潤く、下は狭く、頭重げに左方に欹斜し、石骨琅玕の如く、雜毛を生せず。門をくゞりて鐵鎖をたより、「蟹の横道」てふ石の微けく凹凸ある斜面に石を托して、五六間すべり落ち、蠟燭岩と障子岩とを左右に眺めつゝ、丈低き雜木の路を塞くまでにはなく生ひたる間を逍遙し、拳石をふみて迂路を曲れば、路窮蹙して石壁に洞口の如き孔あり。あのづから半輪の形に截られて、脚下に百仞の屏風を披展す、これを第三石門といふ。

かくて元來し路を少しく戻り、本路に出て、右へ前めば虎岩、虛無僧岩など、前後に羅列して、天柱を樹つ。恨むらくはいづれも高からずして、とても緊微に達せざることや。石

にまろび、木の根に躓きなどして、第四石門にいたる。横に潤開せる廣袤は、四石門中の隨一、高さは第三に軼くといへども、第二よりは遙に低く、第一に比すれば、僅にその半を出てす。さはれ眺観は亦た隨一を推すに足るべく、岫起せる巖巖は指を聚めたらむ如く、その爪となれる立木は、二三分の黄葉を繡せり。山勢波濤の如く、南に向ひ、右に金洞の巒頂を仰き、左に天狗臺、龜岩、動岩の礪礪、掛簇して起伏せるを眼のあたりに眺む。佇立多時、去ること能はず。

これより先は、いと危険なればとて、ためらふ衆吉を促し、驢馬の歩みのそれならなくに、膝節の痛くなれるを忍びて、胎内竇を潜りしが、辨慶か泣きたりきと傳ふる石にいたり、二條の鐵鎖に安危を賭して上り、東山狭、天狗臺、龜岩を膝行して過き、蟻の戸わたり岩の鼻にしばし佇みしが、動岩ては一髪を劃して、下は數百仞を隙き、輒く至るべくもあらぬものから、せめては揺りても見なむと、やをら猿臂を延ばし、が、それさへ灌木の叢生せるに隔てられて、能くせず。山こゝに盛りて、缺崖屏峙、蒼黝として斧斲ある大巖石、儼れむとするもの、舞はむとするもの、墜落せむとするもの、あるは豺狼に似て立て歩め



るもの、龜籠の如くひらばりて這ふもの、層重果積して僅に相支え、以て山をなす。松や、雑木や、紅楓や、その罅に貫絡し、雲氣軽く颺りて軽きこと綿の如し。試に一呼すれば、山鳴り谷應へて、あどほ岑寂たり。かく石一として奇怪ならざるはなく、その一を他に遷さは全山をして重からしむやうに覺ゆれど、太年に飽まては螺蛤を味へすとかや、中の嶽絶頂の大觀にくらぶれば、さしもの石柱も、石門も、個々別々にこそ奇もあれ、列らべ立て、眺むれば、あまりに畸異にして、且つは麗偉ならず、盆上の傀儡たるを免れさりき。あはれ、この石門の遊を先にしたらましかは。

泣岩のあたりは、むかし棕櫚繩もて牽釣したれど、遊客は避けて上らず。かつは實際朽ちやすく危なければ、妙義町中の嚮導業者十八人、相謀り有志の寄附を仰ぎ、鐵鎖を繋きて之に代へ、今にいたりきとぞ。時經ふるに従ひ、十八人の導者の中、わるざるきは勞をや客みけむ、あらぬ狼の話などして客を嚇し、又道あるを無しと欺き、半途より引きかへすなどもあり。みな葉をやめられ、生活のたつきを失ひて、この地を退きたりければ、現存するものわれ等八人ばかり。客多きときは宿屋のはからひにて、近隣の車夫の家の鼻たらしの

小倅など狩り催して、間に合すれば、路こそ大方おぼえたれ、巖の名など詳しくは知らず、御氣の毒なるは、かゝる折に來合せ玉ふ御客なむめりなと、大方ならずおのが田に水引くやうなる話、衆吉たばと燻らしつゝ語る。

見わたすかぎりの山々、桔梗の如くなる紫色は、裾より迫りて、夕日の紅は、その頂に鹿子纒纒を晒らし、日に向ふ人の顔火よりも赤し。つきせぬながめを半ば残し、第一石門まで戻り、灌漑に身を浸して間道をぬけ、昔公視の水といふを小高き窟に覗いて、本道に出づ。斷崖の返照うすく路に投げられたるを踏みて、こゝまでも捨てざりし紅葉一枝に滿腔の詩興を動しつゝ、歸り行くわれ等三人、見返れば名残おしげに佇む夫婦岩のあたり、木がくれに山猿の影、小さく薄日に寒し。

この一本道を十町ばかりにして、東華表に出づ。衆吉今は肩にせる紅葉を厄介がり、之を捨てむといひ、天隨もがらに似合ぬ一首の腰折に

人しらぬ深山のおくのもみち葉を誰にとわれは手折りきにけむ

どうめく。欲しといふ人なからでやは、兎まれ角かれ、宿屋までは持ちこめといふ烏水の

發議に、むごや、ついでに衆吉の肩をぞいためける。  
 谷をへだて、金鶏の支峰筆頭山と對立し、赤城庚申男體筑波より、遙けき甲斐が根まで、紺青色の厚衾をかつき、夕日はわが背の一本杉に消えなむとして、丈六の長き影淨地に落ちたり。豁然たる金鶏の風穴を右に眺め、左に子持岩、大黒岩、鷹岩など、金洞の山背に疣の如く、瘡の如く、凸出したるを仰き、傾斜せる畑に若き梅樹を植ゑたるところを過きて、小澤なにかしの撰種園に入りていこふ、茶の代りに供せられたる梅漿いと甘し。  
 程なく妙義の町に入り、菱屋につきしは六時、觀山の客填充したればとて、辭む色あるを、衆吉の口添にて、やうやく樓上の一小室を借り、明朝白雲山の登躋を約してかへす。何はともあれど、先づ酒を命し、疲れたる折から直に酔ふ。持ち運び來る盤上、山中の佳味に乏しからず、腥羶なきはなかくによし。長廊下を傳ふて樓を下れば、少しく離れて新築の浴室あり。源泉清徹、面上一斛の塵を洗ひ去り、快適いふべからず。この夜、月なけれど、碧落すみわたり、星斗珠璣を綴り、瀾氣水の如く、白露檻前に下れば、爽快衣を透して、酔もあつから醒めはてぬ。

(七)

霜を帯びたる朝風に、寝衣ごしの肌寒を感じつゝ、欄干に凭りて見わたせば、臥牛に似たる山を隔て、底に沈める平野一帯、闊くして見え分かず。さるほどに、星一つ宛消え去り、紅の色天鱗より生するや、淺黄、樺、卵の白味のごとき色をなせる雲、三段に流れて、半天にすし絹を展へぬ。あらあもしろの朝ぼらけやなど眺る間に、朝日ほのくどさし昇りて、城堡に似たる雲、黄なるはくれなるに、くろきは白くなり、石垣より、瓦屋根より、三本松より、桑畑より、近きは遠きに及びて、うす紙を剝く如く、次第に鮮になりゆきつ、朝鳥ほらかに飛び鳴きて、爽快いはむ方なし。衆吉は約の如く支度と、のへて來て待てりといふに、さらばとて急き朝餉をすまして出づ。  
 妙義神社の樓門、町を歴して立てり。石磴を上れば、右に黒門あり、中には開山長清道士の墓ありとや。高顯院と題せる扁額を掲げたる隨神門をくわり、又石磴を上れば、神社本殿あり。境内替痕清うして苔香水の如し。階には珠履の人を見ずと雖も、簾には銀鈎の月を桂けたり。陶犬楯間に踞き、鸞樂殿中に響く。たゞ何となく神さびたり。一拜して去り

額堂舞殿などを巡り、朝餅を拾ふ鳩をおどろかして、裏木戸を出づれば、一堂に木馬を置く、巧に刀して、活けるがごとし。堂のなげしに無弦の鐵弓を掛く、百合若が巖を射貫きしとき用ゐしなりとか。

七本杉の古木裂けて空洞をなせるを珍らしとながめ、なほも老杉戟立、路を夾み、陰々として晝なほ暗き坂を上り、水涸れたる荒神瀧のほとり、屏立せる崖の腰をたどりて迂曲し、大石俵の如く層重せるところを、例の鐵鎖にすがりて上れば、少しく平坦なる缺壁に出づ。と、「大」の字のあるところ、棒を縦横に各三本、井字形に組み合せて地に立てつ。更に竹を「大」字形に束ねて磔し置き、竹に添へて呪符名刺の紙片を縋れる繩二條を曳きたるなりけり。白墨もて揮灑したる如く遠望されしは、この紙細工なりしよ、嗚呼のわさくれ笑ふに堪へたり。

この處、眺觀や佳。高田川は銀の針落したるより、小さけれども、碓氷の清流は秋蛇の蜿蜒たるより長く、赤城榛名の諸山陵夷して、裾の仄するところ、平地についき、松井田の炊烟ほの白く颯り、板鼻の驛、つくもの原、墟落星散して數ふべく、野の黄なるは熟稻

にして、平蕪遠く開けたり。ひとり右手に當りて金鶏の峰、崛起千尺、さすがに高かり。こゝを下りて少しく左し、茅葺押し分けて、天狗評定場と名む呼べる一笏の平地に出づ。右には巨石夜叉の如く、牙角を磨して逼り、釋迦嶽の峭壁と相對して、峙立す。左折して鬼尻に至れば、大木倒れて刀鎗斧鉞の地に委したるに似たるを踏み越え、頂には丈餘の巖巖聳立し、欹斜し、或は闘ひて墜ちむとぞすなる絶壁を仰ぎて、覺束なき石磴を上れば、奥の院あり。名は院などいひて、仔細らしけれど、門なく、殿なく、厦屋より大なる危石、洞口を覆ひ、自然に門隙をなし、中に大黒天の石像を安んじ、下には石を疊みて十丈の牆を作れり。又鐵鎖をたのみ、身を宙につるして上り得。その奥の奥なる胎内といへるは、狭くして入るべくもあらねど、下より斜に上に向へる裂隙あり、天光綫となりて通す。

白雲山は人多く「大」の字を觀てかへるのみ。健脚を誇るものといへども、奥の院より踵を回らさざるものなけむ。いでや中の嶽の絶頂より、旭嶽と石門と俯瞰したることくに、この山の嶺上より、奥の院と「大」の字とを脚下に踏まへてくれむと、衆吉を先だて、奥の院の傍に障を立てたる如き斷崖を、芋ほどの石瘤あるに足を托して、葛の根となく、藤蔓と

なく、荷くも身を支撐するに足るべきは捉へざるはなく、捉へては離さずのぼり行く、これをや形容して懸猿といふべき。

のぼり盡して、又胸を衝く如き急坂を膝行せしが、鳥水は命に亞ぎて寶とせし眼鏡と鉛筆とを刎ね飛ばし、やうやく眼鏡をのみ拾ひ得て、いやが上にも生ひ茂れる灌木榛荆を分け入り、右に往き左に曲り、辛くも頂に近けば、涼風れもむろに面を吹いて、この骨將に玉ならむとす。この山峭愕として瘦せたるから、松高く、巖白く、群峰左右に連亘して、裂けたるところ、缺けたるところに紅葉あり、千柯萬條、灼灼として紛拏し、色は蜀錦よりも眩く、われ等は啞然として、自失せむばかり。氣は乾坤の外を壓し、人は凹凸の上を行きて、やうやく絶頂に爬ひ上り、兎起鶴落せる石と石との間に腰うちかけていこひつ。窈然たる谿底を俯瞰すれば、山や樹や、その山に峙つる石の怪なることよ、その樹の葉の色の妙なることよ。石の堅緻なるもの、縦に掛け、横に裂け、柱を礎に屬するもあれば、棟を梁に架するもあり。頂はいづれも雨に洗はれ、霜に打たれ、色は白粉を吹きたらむことよ、肉落ち皮剥げ、毛髮披脱し、稚松若楓とその腰腹をめぐりて、黄緑繡錯、これをたどふれば、累などにや、怨毒の殘骸を風流の彩衣もて裹みたらむ如し。しかもその彩衣いつかは剝かれであるべき。われ等は、こゝに秋の氣の悲哉をかこちわびてし宋玉が感なき能はさりき。

むかひには、二峰突兀、眉睫を壓し、雲を截て立てり。相馬嶽といひ、鼓嶽といふ。これより眼を右に移して横川驛を峽間に望み、白雲碓氷の古關に搖曳して、山勢いよく高く昂る。木曾の麻衣あさくとも淺間の山に立つ煙、ふかき緑も今は枯れし草津の山、雪や降りけむ白根の峰、みな雙眸の中に萃まりて、このながめ、金洞山頂と顔抗して、兄たりがたく弟たりがたくぞ覺えたる。

衆吉語りていふ、五科村の相馬嶽は、村民俗に天狗山と呼びならはせり。一年に一度上るもの、ありや、なしや。たゞ旱魃虐をなす折は、村民この山の頂にのみ生ひたるひるてふ草を搜して採り、村の鎮守祠前に植えて祈禱するに、驗あらずといふことなく、雨ふりて後は、件の草をもとの山頂に戻すなり。しかせされば、必ず崇ありと。これより雨乞の話にうつり、金洞山麓の農民は、中の嶽の五葉松を抜きかへり、おのが村に植ゑ、毎日多